



（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書  
(1)

公益財団法人鹿児島県文化振興財団  
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（1）

南九州西回り自動車道建設（出水阿久根道路）に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

中郡遺跡群

なか こおり  
**中郡遺跡群**

（出水市野田町）

二〇一四年三月

鹿児島県教育委員会  
公益財団法人鹿児島県文化振興財団  
埋蔵文化財調査センター

2014年3月

鹿児島県教育委員会  
公益財団法人鹿児島県文化振興財団  
埋蔵文化財調査センター











中部遺跡群全景（西から）







## 序 文

近年増加する国事業に係る発掘調査を円滑かつ効率的に実施するため、平成25年4月1日に、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「調査センター」）が発足いたしました。

当調査センターの役割は、これまで鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施してきた発掘調査のうち、国事業に係る調査を引き継ぐことと、新規の国事業に係る発掘調査を実施することあります。

この中郡遺跡群については、鹿児島県立埋蔵文化財センターが記録保存調査と一部の整理作業を行いましたが、報告書刊行については当埋文調査センターが引き継ぎました。

中郡遺跡群では、旧石器時代から近世までの遺構や遺物が見つかっております。特に、中国から渡来した貴重な青白磁の龍首水注が見つかるなど、本県の中世史を考える上で、非常に貴重な遺跡であります。本報告書が今後の研究に資することと期待している次第です。

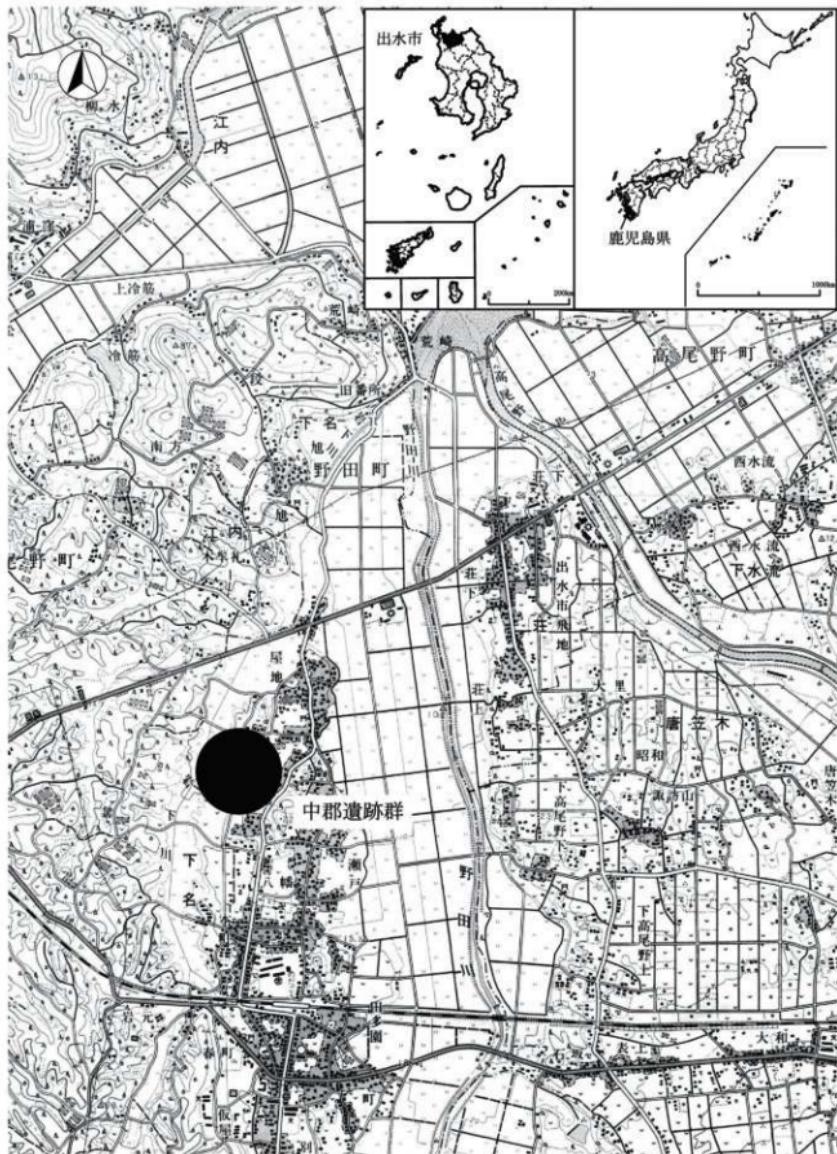
最後になりましたが、本報告書の刊行に当たり、本県の埋蔵文化財保護のために御協力いただきました国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所及び鹿児島県立埋蔵文化財センター並びに調査において御指導いただいた先生方、発掘作業員の方、整理作業員の方、その他関係者の皆様に心より厚く御礼申し上げます。

平成26年3月

公益財団法人 鹿児島県文化振興財団  
埋蔵文化財調査センター長 富田逸郎

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな 書名	なかごおりいせきぐん 中郡遺跡群							
副書名	南九州西回り自動車道建設（出水阿久根道路）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	公益財團法人鹿児島県文化振興財團埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第1集							
編集者名	長野慎一 寺原徹 森幸一郎 黒木梨絵							
編集機関	公益財團法人鹿児島県文化振興財團埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原柵の森2番1号 TEL 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576							
発行年月	2014年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市長村 遺跡番号	北緯	東經	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因	
中部遺跡群	鹿児島県 出水市 野田町 下名	462080	48-1	130° 16° 15'	32° 04° 09°	本調査 2009.05.08 ~ 2010.03.19  2012.07.02 ~ 2012.12.21	16,100 4,810	南九州西回り自動車道建設に伴う記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主要な遺構			主要な遺物	特記事項	
中部遺跡群	散布地	旧石器時代	縄群1基			ナイフ形石器、台形石器、チップはか		
	散布地	縄文時代 早期	土坑 6基 集石 11基 落とし穴状遺構 5基 横軸内縄集中 3基			石坂式土器、中原式土器、押型文土器、塞ノ神式土器、石鏃、磨製石斧、打製石斧、石斧未製品、磨石・敲石、石皿はか		
	散布地	縄文時代 前期～晩期				轟式土器、沈線文土器、入佐式土器、黒川式土器ほか		
	散布地	弥生時代 古墳時代				弥生土器、成川式土器、古式土師器、須恵器ほか		
	散布地	古代	土坑 1基			土師器、植葉型黒色土器、須恵器、布目瓦はか		
	集落	中世	掘立柱建物跡 5基 堅穴建物跡 5基 堅穴状遺構 1基 土坑 20基 土坑状遺構 7基 大型土坑状遺構 3基 堀跡 2条 溝状遺構 12条 杭列跡 1条 造状遺構 1条			土師器、須恵器、瓦質土器、瓦、白磁、青磁、青白磁、青白磁龍首注水、中国陶器、国産陶器、滑石製石鍋、滑石製品、輪羽口、砥石、鉄製品、木製品、杭ほか		
	散布地	近世	帶状硬化面 2基 溝状遺構 3条			陶器類、寛永通寶ほか		
			中都遺跡群は、旧石器時代～近世にかけての複合遺跡である。特に中世では、鳥津氏初代忠久の居館跡とされる「屋地の館跡」に比定される遺跡である。発掘調査では、旧石器～近世にかけての遺構・遺物が検出された。旧石器時代は、石器製作の痕跡が認められないことから、短期間の農場として、何度かこの地が利用されたと思われる。縄文時代は、早期を中心とする土器が認められ、主に八代海沿岸や中九州地域に分布を持つ中原式土器や押型文土器群で構成される。また、集石遺構や土坑、落とし穴状遺構が検出されている。					
要約			弥生・古墳時代では、在地土器のほか、肥後地城の弥生終末期土器や古式土師器が出土している。古代では、土師器の甕・壺・壺が一括して埋納された土坑が出土している。また、在地系の土師器・須恵器のほかに畿内系の植葉型黒色土器や瓦等が出土している。					
			中世では、堀跡や掘立柱建物跡、堅穴建物跡等の遺構が検出されている。出土した貿易陶器の中には、青白磁の龍首注水等の稀少な資料もあり、遺構を含めて、本遺跡の性格を示す重要な成果品として注目される。また、低湿地では、杭跡が検出され、木製品も多く出土している。					
			近世では、溝状遺構等が検出され、肥前系等の陶器器類が出土している。					



### 中都遺跡群遺跡位置図 (1:25,000)

## 例　言

- 1 本書は、南九州西回り自動車道出水阿久根道路建設に伴う中郡遺跡群の発掘調査報告書である。
- 2 本道跡は、鹿児島県出水市野田町に所在する。
- 3 中郡遺跡群は、平成 18 年度に鹿児島県文化財課が実施した分布調査で発見された道跡である。
- 4 発掘調査は、国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」）が実施した。
- 5 発掘調査事業は、平成 21 年度と平成 24 年度に実施し、平成 21 年度は埋文センターが実施し、平成 24 年度は民間へ委託し、発掘調査を実施した。
- 6 整理・報告書作成事業は、平成 23～24 年に埋文センターで実施し、平成 25 年は公益財團法人鹿児島県文化振興財團埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 7 掲載遺物番号は通し番号であり、本文、挿図、表、図版の遺物番号は一致する。
- 8 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 9 本書で用いたレベル数値は、「水準点 KBM. 3」を基準とした。  
「KBM. 3」の標高は H = 21.085m である。
- 10 物注記等で用いた道跡記号は「ナカゴ」である。
- 11 本書で使用した方位は、全て世界測地系に基づく座標北である。
- 12 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、調査担当者が行った。また、空中写真撮影は平成 21 年度調査では（有）ふじたに委託し、平成 24 年度調査では新和技術コンサルタント株式会社が行った。
- 13 遺構図、遺物分布図の作成及びトレースは、森幸一郎がデータ処理班及びデジタルトレース班の協力を得て行った。
- 14 出土遺物の実測・トレースは、長野眞一、寺原　徹、黒木梨絵、森が整理作業員の協力を得て行った。また、遺物実測の一部を（株）九州文化財研究所に委託し、長野が監修した。
- 15 出土遺物の写真撮影は、埋文センターの協力を得て吉岡康弘が行った。
- 16 本報告書に係る自然科学分析は、放射性炭素年代測定を（株）加速器分析研究所・（株）パリノ・サーヴェイ、樹種同定・種実同定を（株）パリノ・サーヴェイ、花粉分析・植物珪酸体分析を（株）古環境研究所に委託した。
- 17 金属器の保存処理は、中村幸一郎が整理作業員の協力を得て行った。
- 18 本書の編集は森・黒木が担当し、執筆者は以下のとおりである。
  - 第1章　長野・森
  - 第2章　長野・森
  - 第3章　第一節　1　長野
  - 2　長野・森・寺原
  - 3　黒木
  - 4　寺原・黒木
  - 5　森・寺原・黒木
  - 6　黒木
- 第4章　（株）加速器分析研究所・（株）パリノ・サーヴェイ・（株）古環境研究所
- 第5章　長野・黒木
- 19 出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用を図る予定である。

# 凡 例

- 1 遺構名については、平成 21 年度調査と平成 24 年度調査成果との混同を避けるため、便宜的に新たな遺構名を付与し、掲載番号とした。下記の対照表を参照されたい。  
なお、図面、遺物、写真等の注記には、調査時の旧遺構名で記載されている。

遺構名新旧対照表

旧遺構名	旧遺構名	調査年度	旧遺構名	旧遺構名	調査年度
遺構	SX0001	H22	土坑12号	SK0006	H21
東(1)号	SX001	H22	土坑12号	SK007	H21
東(2)号	SX002	H22	土坑13号	SK008	H21
東(3)号	SX003	H22	土坑14号	SK002	H21
東(4)号	SX004	H22	土坑15号	SK003	H21
東(5)号	SX005	H22	土坑16号	SK004	H21
東(6)号	SX007	H22	土坑17号	土坑01	H21
東(7)号	東(8)号	H22	土坑18号	土坑02	H21
東(8)号	東(9)号	H22	土坑19号	土坑03	H21
東(9)号	SX002	H22	土坑20号	土坑04	H21
東(10)号	SX003	H22	土坑21号	土坑05	H21
東(11)号	SX005	H22	土坑22号	土坑07	H21
落とし穴状遺構1号	圓文落とし穴1号	H21	土坑23号	SK001	H24
落とし穴状遺構2号	圓文落とし穴2号	H21	土坑24号	SK008	H24
落とし穴状遺構3号	圓文落とし穴3号	H21	土坑25号	SK009	H24
落とし穴状遺構4号	圓文落とし穴4号	H21	土坑26号	SK010	H24
落とし穴状遺構5号	圓文落とし穴5号	H21	土坑27号	SK011	H24
鐵色円錐集巾1号	SX004	H22	土坑民窯1号	SK002	H24
鐵色円錐集巾2号	SX009	H22	土坑民窯2号	SK013	H24
鐵色円錐集巾3号	SX010	H22	土坑民窯3号	SK014	H24
土坑01号	SK001	H22	土坑民窯4号	SK015	H24
土坑02号	SK002	H22	土坑民窯5号	SK016	H24
土坑03号	SK003	H22	土坑民窯6号	SK017	H24
土坑05号	SK005	H22	土坑民窯7号	SK018	H24
土坑06号	SK006	H22	大型土坑遺構1号	落とし込み2	H21
土坑07号	落とし込み1号	H22	大型土坑遺構2号	落とし込み2	H21
土坑08号	SK001	H22	大型土坑遺構3号	大型土坑	H21
土坑09号	SK002	H22	落とし跡1号	P00	H21
土坑10号	SK003	H22	落とし跡2号	P136	H21
			獨立立柱遺物1号	離21遺物	H21
					木材出土状況
					H24

## 2 陶磁器の分類および編年は、以下の文献を参考した。

上田秀夫 1982 「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』2, pp.55-70.

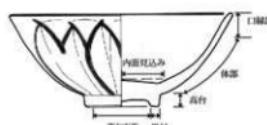
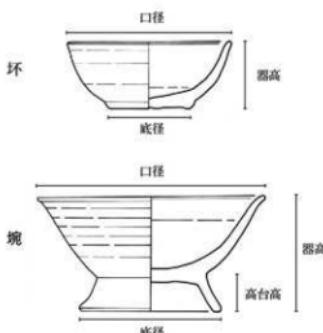
小野正敏 1982 「15~16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』2, pp.71-87.

太宰府市教育委員会編 2000 「太宰府系坊跡 XV-陶磁器分類編」太宰府市の文化財第49集.

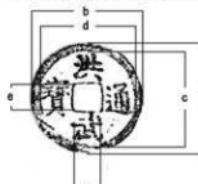
森田 勉 1982 「14~16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』2, pp.10-33.

## 3 土師器の法量は以下のように計測した。

## 4 本書で用いる陶磁器の部位名称は以下の通りである。



## 5 古錢は以下の箇所を計測した。 アルファベットは観察表と対応する。



## 目 次

卷頭カラー  
序 文  
報告書抄録  
例言・凡例

第1章 発掘調査の経過.....	1
第1節 調査に至るまでの経過.....	1
第2節 分布調査.....	1
第3節 本調査.....	1
第4節 調査の経過.....	2
第5節 整理・報告書作成業務.....	2
第2章 遺跡の位置と環境.....	4
第1節 地理的環境.....	4
第2節 歴史的環境.....	4

第3章 調査の方法と成果.....	10
第1節 調査の方法.....	10
第2節 層序.....	11
第3節 調査の成果.....	18
1 旧石器時代の調査.....	18
2 縄文時代の調査.....	21
3 弥生・古墳時代の調査.....	63
4 古代の調査.....	66
5 中世の調査.....	71
6 近世の調査.....	145
観察表.....	147
第4章 自然科学分析.....	164
第5章 総括.....	191
写真図版.....	195

## 挿 図 目 次

第 1 図 周辺遺跡位置図 .....	7
第 2 図 木牛札城跡採集遺物（1） .....	8
第 3 図 木牛札城跡採集遺物（2） .....	9
第 4 図 グリッド配置図・トレンチ配置図 .....	10
第 5 図 基本層序 .....	12
第 6 図 土層断面図（1） .....	12
第 7 図 土層断面図（2） .....	13
第 8 図 土層断面図（3） .....	14
第 9 図 土層断面図（4） .....	15
第 10 図 土層断面図（5） .....	16
第 11 図 土層断面図（6） .....	17
第 12 図 旧石器時代遺構配置図・遺物分布図 .....	18
第 13 図 總群 .....	18
第 14 図 旧石器時代出土遺物 .....	20
第 15 図 縄文時代遺構配置図（C～E - 14～16区） .....	21
第 16 図 縄文時代遺構配置図（B～E - 23～28区） .....	22
第 17 図 集石 10号 .....	23
第 18 図 集石 9号（1） .....	24
第 19 図 集石 9号（2） .....	25
第 20 図 集石 1号・4号 .....	26
第 21 図 集石 2号 .....	27
第 22 図 集石 3号・6号・11号 .....	28
第 23 図 集石 7号 .....	29
第 24 図 集石 5号・8号 .....	30
第 25 図 土坑 3号・2号 .....	30
第 26 図 土坑 1・4・5号 .....	32
第 27 図 土坑 6号及び出土遺物 .....	33

第 28 図 落とし穴状遺構 1～5号 .....	34
第 29 図 橫転内縫集中 1・3号 .....	35
第 30 図 縄文時代の土器（1） .....	37
第 31 図 縄文時代の土器（2） .....	38
第 32 図 縄文時代の土器（3） .....	40
第 33 図 縄文時代の土器（4） .....	41
第 34 図 縄文時代の土器（5） .....	42
第 35 図 縄文時代の土器（6） .....	44
第 36 図 縄文時代の土器（7） .....	45
第 37 図 縄文時代の土器（8） .....	46
第 38 図 縄文時代遺物分布図（A～E - 22～28区周辺） .....	47
第 39 図 旧石器時代の石器 .....	47
第 40 図 縄文時代の石器（1） .....	48
第 41 図 縄文時代の石器（2） .....	49
第 42 図 縄文時代の石器（3） .....	50
第 43 図 縄文時代の石器（4） .....	51
第 44 図 縄文時代の石器（5） .....	52
第 45 図 縄文時代の石器（6） .....	53
第 46 図 縄文時代の石器（7） .....	54
第 47 図 縄文時代の石器（8） .....	55
第 48 図 縄文時代の石器（9） .....	56
第 49 図 縄文時代の石器（10） .....	57
第 50 図 縄文時代の石器（11） .....	58
第 51 図 縄文時代の石器（12） .....	59
第 52 図 縄文時代の石器（13） .....	60
第 53 図 縄文時代の石器（14） .....	61
第 54 図 弥生・古墳時代の遺物 .....	63

第 55 図	古墳時代の遺物（1）	64
第 56 図	古墳時代の遺物（2）	65
第 57 図	古代遺構配置図	66
第 58 図	土坑 7 号・埋納土器	67
第 59 図	古代の遺物（1）	69
第 60 図	古代の遺物（2）	70
第 61 図	D・E-4・5 区遺構配置図	72
第 62 図	D・E-4・5 区出土遺物	72
第 63 図	掘立柱建物跡 1 号	73
第 64 図	土坑 8・10・11 号	73
第 65 図	土坑 9 号及び出土遺物	74
第 66 図	土坑 15・16 号及び出土遺物	75
第 67 図	土坑 12・13・14 号	76
第 68 図	堅穴建物跡 1 号及び出土遺物	78
第 69 図	C～E-12～16 区遺構配置図	79
第 70 図	堅穴建物跡 2 号及び出土遺物	81
第 71 図	堅穴建物跡 3 号	82
第 72 図	堅穴建物跡 3 号出土遺物	83
第 73 図	堅穴建物跡 4 号及び出土遺物	84
第 74 図	堅穴建物跡 5 号及び出土遺物	85
第 75 図	堅穴状遺構及び出土遺物	86
第 76 図	掘立柱建物跡 4・3 号	87
第 77 図	掘立柱建物跡 2・5 号及び出土遺物	88
第 78 図	中世の柱穴跡位置図	89
第 79 図	柱穴跡 1・2 号及び出土遺物	89
第 80 図	土坑 19・18・17・20 号及び出土遺物	91
第 81 図	土坑 22・21 号及び出土遺物	92
第 82 図	大型土坑状遺構 1・2 号及び出土遺物	93
第 83 図	大型土坑状遺構 3 号及び出土遺物	94
第 84 図	堀跡 1 号土層断面図	96
第 85 図	堀跡 1 号出土遺物	97
第 86 図	堀跡 2 号土層断面図	98
第 87 図	堀跡 2 号出土遺物（1）	99
第 88 図	堀跡 2 号出土遺物（2）	100
第 89 図	溝状遺構 1・2 号及び出土遺物	102
第 90 図	B～E-22～25 区遺構配置図	105
第 91 図	土坑 23～27 号	107
第 92 図	溝 5・6・8 号および出土遺物	108
第 93 図	溝 7・9・13・15 号及び出土遺物	109
第 94 図	溝状遺構断面図	110
第 95 図	低湿地遺構配置図	111
第 96 図	杭列跡	112
第 97 図	杭列跡出土木製品（1）	113
第 98 図	杭列跡出土木製品（2）	114
第 99 図	土坑状遺構 1 号	115
第 100 図	土坑状遺構 2 号及び出土木製品	116
第 101 図	土坑状遺構 3～7 号	117
第 102 図	木材出土状況	118
第 103 図	低湿地 出土木製品（1）	120
第 104 図	低湿地 出土木製品（2）	121
第 105 図	低湿地 出土木製品（3）	122
第 106 図	D・E-4・5 区出土遺物（1）	124
第 107 図	D・E-4・5 区出土遺物（2）	125
第 108 図	D・E-4・5 区出土遺物（3）	126
第 109 図	D・E-4・5 区出土遺物（4）	127
第 110 図	D・E-4・5 区出土遺物（5）	128
第 111 図	D・E-4・5 区出土遺物（6）	129
第 112 図	D・E-4・5 区出土遺物（7）	130
第 113 図	D・E-4・5 区出土遺物（8）	131
第 114 図	B～E-11～17 区出土遺物（1）	131
第 115 図	B～E-11～17 区出土遺物（2）	132
第 116 図	B～E-11～17 区出土遺物（3）	133
第 117 図	B～E-11～17 区出土遺物（4）	134
第 118 図	B～E-11～17 区出土遺物（5）	135
第 119 図	C～E-18～25 区出土遺物（1）	137
第 120 図	C～E-18～25 区出土遺物（2）	138
第 121 図	C～E-18～25 区出土遺物（3）	139
第 122 図	C～E-18～25 区出土遺物（4）	140
第 123 図	C～E-18～25 区出土遺物（5）	142
第 124 図	B・C-26～28 区出土遺物	143
第 125 図	その他出土遺物	143
第 126 図	鉄製品	144
第 127 図	近世出土遺物（1）	145
第 128 図	近世出土遺物（2）	146
第 129 図	年代測定結果	165
第 130 図	年代測定結果	167
第 131 図	樹種同定 木材（1）	170
第 132 図	樹種同定 木材（2）	171
第 133 図	種実遺体	174
第 134 図	D-21 区における花粉ダイヤグラム	178
第 135 図	D-21 区における花粉分類解析ダイヤグラム	178
第 136 図	C-23 区における花粉ダイヤグラム	179
第 137 図	中都遺跡群における植生・環境・農耕	179
第 138 図	中都遺跡群の花粉・寄生虫卵	180
第 139 図	D-21 区における植物珪酸体分析結果	184
第 140 図	C-23 区における植物珪酸体分析結果	184
第 141 図	中都遺跡群の植物珪酸体（プラント・オバール）	185
第 142 図	中都遺跡群の種実（1）	189
第 143 図	中都遺跡群の種実（2）	190
第 144 図	中都遺跡群と堀跡との関係	192
第 145 図	屋地形略図との対応関係	193

## 表 目 次

第 1 表	周辺遺跡地名	6
第 2 表	旧石器時代の遺物観察表	147
第 3 表	縄文時代の遺物観察表	147
第 4 表	弥生・古墳時代の遺物観察表	149
第 5 表	古代の遺構内出土遺物観察表	149
第 6 表	古代の遺物観察表	149
第 7 表	中世の遺構内出土遺物観察表(1)	150
第 8 表	中世の遺構内出土遺物観察表(2)	152
第 9 表	中世の遺構内出土遺物観察表(3)	152
第 10 表	中世の遺構内出土遺物観察表(4)	152
第 11 表	中世の遺構内出土遺物観察表(5)	152
第 12 表	中世の遺構内出土遺物観察表(6)	153
第 13 表	中世の遺物観察表(1)	153
第 14 表	中世の遺物観察表(2)	154
第 15 表	中世の遺物観察表(3)	157
第 16 表	中世の遺物観察表(4)	162
第 17 表	中世の遺物観察表(5)	162
第 18 表	中世の遺物観察表(6)	162
第 19 表	中世の遺物観察表(7)	163
第 20 表	中世の遺物観察表(8)	163
第 21 表	近世の遺物観察表	163
第 22 表	放射性炭素年代測定結果(1)	164
第 23 表	放射性炭素年代測定結果(2)	165
第 24 表	放射性炭素年代測定結果	166
第 25 表	樹種同定結果	167
第 26 表	種実同定結果(1)	168
第 27 表	種実同定結果(2)	169
第 28 表	中都遺跡群における花粉分析結果	177
第 29 表	中都遺跡群における植物珪酸体分析結果	183
第 30 表	中都遺跡群における種実同定結果	186
第 31 表	中都遺跡群出土オムギ炭化稟実の計測値	187

## 図 版 目 次

図版1	中都遺跡群遠景
図版2	土層堆積状況、Ⅵ層遺物出土状況、櫛群
図版3	集石10・9号検出状況、集石10号掘り込み、集石9号掘り込み、集石9号と横軸
図版4	集石1号、集石2号、集石6号、集石11号、土坑3号、土坑2号
図版5	土坑4号、土坑6号、土坑5号、落とし穴状遺構1号、落とし穴状遺構2号、落とし穴状遺構3号、落とし穴状遺構4号
図版6	横軸内櫛集中、谷地形の基盤襷、調査終了
図版7	調査区と周辺地形、土坑7号
図版8	中世の造成、掘立柱建物跡1号、土坑10号、土坑9号
図版9	土坑12・13・14号、土坑9号・8号、土坑15号土師器出土状況、調査風景、C-E-12~16区近景
図版10	C-E-12~16区中世の遺構、C-D-15・16区中世遺構検出状況、竪穴建物跡1号
図版11	竪穴建物跡2号・3号
図版12	竪穴建物跡4号・5号
図版13	竪穴状遺構、中世の調査状況、掘立柱建物跡3号、掘立柱建物跡2号、土坑17号、土坑22号
図版14	大型土坑状遺構2号、大型土坑状遺構1号、大型土坑状遺構3号、堀跡1号、堀跡2号、溝状遺構1号、溝状遺構3号
図版15	土坑23号、土坑26号、土坑24号、土坑27号、土坑28号
図版16	溝状遺構13号・7号、溝状遺構7号埋土堆積状況
図版17	溝状遺構5号・6号、8号、9号、10号、11号
図版18	道状遺構、C-22区谷状地形、Ⅹ層上面横軸の様子
図版19	低湿地近景、調査区近景
図版20	低湿地の調査状況
図版21	杭列跡、杭出土状況
図版22	土坑状遺構2号、土坑状遺構2号・1号、自然遺物出土状況、土坑状遺構6・7号、竹を用いた遺構、木製柵出土状況
図版23	旧石器・縄文時代の遺物
図版24	縄文時代の遺物(1)
図版25	縄文時代の遺物(2)
図版26	縄文時代の遺物(3)
図版27	弥生・古墳時代・古代の遺物
図版28	古代・中世の遺物
図版29	中世の遺物(1)
図版30	中世の遺物(2)
図版31	中世の遺物(3)
図版32	中世の遺物(4)
図版33	中世の遺物(5)
図版34	中世・近世の遺物

## 第1章 発掘調査の経過

### 第1節 調査に至るまでの経過

国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所（以下、「鹿児島国道事務所」）は、「南九州西回り自動車道出水阿久根道路建設」の施工計画に基づき、事業区内における埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育庁文化財課（以下、「県文化財課」）に照合した。

これを受けて、県文化財課は平成18年度に阿久根～野田IC間の分布調査を実施し、中郡遺跡群等6遺跡の存在を確認した。

この分布調査の結果を受けて、鹿児島国道事務所、県文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、「埋文センター」）で協議を行い、埋蔵文化財の保護と事業推進を図ることとなり、中郡遺跡群の発掘調査を実施することとした。

本遺跡の調査対象面積は21,000m<sup>2</sup>であるが、用地取得等の関係から平成21年度に16,100m<sup>2</sup>、平成24年度に4,810m<sup>2</sup>を調査することとした。

平成21年度と平成24年度の本調査は、埋文センターが実施した。平成24年度の本調査では、作業の効率化等を目的として、「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査（民間委託）実施要項」に基づき、新和技術コンサルタント株式会社へ発掘業務委託を行っている。

各年度の本調査期間は、平成21年5月8日～平成22年3月19日(179日)、平成24年7月2日～12月21日(95日)である。

報告書作成作業は、平成23年度～平成25年度に実施した。平成23年度・平成24年度は、埋文センターが実施した。平成25年度は、県文化財課から委託を受けた公益財団法人鹿児島県文化振興財團埋蔵文化財調査センター（以下、「埋文調査センター」）が実施した。

### 第2節 分布調査

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

課長 中尾 理

主任文化財主事兼

埋蔵文化財係長 青崎 和憲

調査担当 鹿児島県教育庁文化財課

文化財主事 堂込 秀人

鹿児島県立埋蔵文化財センター

主任文化財主事 宮田 栄二

立会者 九州地方整備局鹿児島国道事務所

調査課計画係 祝迫 龍一

### 第3節 本調査

本調査は平成21年5月8日～平成22年3月19日と、平成24年7月2日～12月21日の期間に実施した。調査組織については、以下のとおりである。

#### 調査体制

##### 平成21年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局 鹿児島国道事務所	山下 吉美
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所 長	齊藤 守重
調査企画者	次長兼総務課長 次長兼南の繩文調査室長 調査第二課長 主任文化財主事兼	青崎 和憲 彌榮 久志
調査担当	調査第二課第二調査係長 文化財主事 文化財主事 文化財調査員	富田 逸郎 中原 一成 富山 孝一 花田 宽典
調査事務	総務係長 主査	紙屋 伸一 鳥越 寛晴
調査指導	鹿児島国際大学短期大学部 教 授 黎明館	三木 絢
	主任学芸員兼学芸調査係長	栗林 文夫

##### 平成24年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局 鹿児島国道事務所	寺田 仁志
調査主体	鹿児島県教育委員会	新小田 稔
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所 長	井ノ上秀文
調査企画者	次長兼総務課長 次長兼南の繩文調査室長 調査第二課長 主任文化財主事兼	富田 逸郎
調査担当者	調査第二課第二調査係長 文化財研究員	鶴田 静彦 森 幸一郎
調査事務	主幹兼総務係長 主 事	大園 祥子 池之上勝太

#### 発掘調査業務委託

発掘調査の実施にあたり、埋文センターは「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査（民間委託）実施要項」に基づき、新和技術コンサルタント株式会社へ発掘調査の委託を行った。委託の内容は以下のとおりである。

委託先 新和技術コンサルタント株式会社

委託期間 平成 24 年 6 月 8 日～平成 25 年 1 月 31 日  
委託内容 発掘調査業務 1 式  
測量業務 1 式  
土工業務 1 式  
検 査 中間検査 平成 24 年 10 月 12 日  
完成検査 平成 25 年 1 月 15 日（実地検査）  
平成 25 年 1 月 16 日（成果物検査）  
なお、調査委託期間中は埋文センター職員が常駐監理して、発掘調査の統括及び指揮・運営を行った。

#### 第4節 調査の経過

調査の経過については、日誌抄を月ごとに集約して記載する。

##### 平成 21 年度

5月 先行トレンチ調査  
8日 調査開始、ガイダンス  
6月 先行トレンチ調査  
7月 先行トレンチ調査、C～E-13～17区包含層掘削、土坑・堅穴建物跡・溝状遺構・柱穴の調査  
8月 D-5・6区の包含層掘削及び遺構調査、C～E-13～17区包含層掘削及び遺構精査、土坑・土坑墓・堅穴建物跡・溝状遺構・柱穴の調査  
20日 臨時職員健康診断  
9月 C～E-13～17区包含層掘削及び遺構精査、土坑・土坑墓・堅穴建物跡・溝状遺構・柱穴の調査  
2～7日 調査事務所等移設  
10月 C～E-13～17区包含層掘削及び遺構精査、土坑・土坑墓・堅穴建物跡・溝状遺構・柱穴・集石の調査  
11月 C～E-13～16区・B・C-26～28区包含層掘削及び遺構精査、土坑・土坑墓・堅穴建物跡・溝状遺構・堀跡・掘立柱建物跡・柱穴・集石の調査  
7日 現地説明会実施（参加者 265 名）  
20日 阿久根市郷土会来路  
12月 C～E-13～16区・B・C-26～28区包含層掘削及び遺構精査、C-26区・E-18・19区・B・C-28～30区先行トレンチ調査、土坑・土坑墓・堅穴建物跡・溝状遺構・堀跡・掘立柱建物跡・柱穴・集石の調査  
1月 C～E-13～16区・E-18・19区・B・C-26～28区包含層掘削及び遺構精査、B・C-28～30区先行トレンチ調査、土坑・土坑墓・堅穴建物跡・溝状遺構・柱穴・集石の調査  
8日 東和幸氏来路（黎明館）  
20日 中村和美文化財主事指導（県文化財課）  
2月 C～E-13～16区包含層掘削及び遺構精査、B・C-20～22区低湿地の調査、土坑・堅穴建物跡・溝状遺構・堀跡・掘立柱建物跡・柱穴・集石の調査

2～3日 県外調査（東京・千葉・神奈川）

3日 三木清氏調査指導  
18日 空中写真撮影  
3月 B・C-20～22区低湿地の調査  
10日 栗林文夫氏調査指導  
19日 調査終了

##### 平成 24 年度

6月 発掘調査業務委託入札  
12日 発掘調査業務委託業務開始  
27日 着工前測量  
7月 C・D-23～25区の包含層掘削及び遺構精査、溝状遺構調査  
2日 発掘調査開始、ガイダンス  
20～23日 立木伐採（D-24・25区、D・E-20・21区）  
8月 C・D-23～25区、D・E-20～22区の包含層掘削前及び遺構精査、集石・溝状遺構の調査、地形測量、土層実測、遺物点上げ  
7日 文化財課長他 2 名現地観察  
10日 救急救命講習実施  
9月 C・D-22～24区、E-21・22区の包含層掘削及び遺構精査、集石・土坑の調査、地形測量、土層実測、遺物点上げ  
10月 C-25区、C・D-23・24区の包含層掘削及び遺構精査、D・E-20～23区の低湿地の調査、溝状遺構・土坑の調査、地形測量、遺物点上げ  
12日 発掘調査業務委託に係る中間検査実施  
23日 ツル飛来  
11月 D・E-20・21区低湿地の調査、D-24区旧石器時代ナイフ形石器文化期のブロックの調査、C-20～22区・B-23～25区の包含層掘削及び遺構精査、土坑・溝状遺構の調査、地形測量  
12月 D・E-20・21区低湿地の調査、D-24区旧石器時代ナイフ形石器文化期のブロックの調査、C・D-22区・B-25・26区の包含層掘削及び遺構精査、集石・土坑・杭列・道路状遺構の調査、地形測量、土層実測、遺物点上げ 17・19日 岩崎新輔氏来路（出水市教育委員会）  
21日 発掘調査終了  
1月 15・16日 発掘調査業務委託に係る完成検査実施

#### 第5節 整理・報告書作成業務

##### 1 整理・報告書作成作業の組織

本報告書作成に伴う整理・報告書作成作業は、平成 23 年度から平成 25 年度にかけて実施した。平成 23 年度及び平成 24 年度の整理作業では、主に平成 21 年度の本調査で出土した遺物の洗浄・注記・接合、実測作業及び図面整理等を埋文センター西回り整理作業所で実施した。

平成 25 年度の整理作業は、埋文センターの国事業に係る発掘調査業務が、埋文調査センターへ移管されたことに伴い、県文化財課からの委託を受けた埋文調査センターが実施した。期間は、平成 25 年 4 月～平成 26 年 3 月で、埋文調査センター第二整理作業所で行った。

整理・報告書作成に係る組織は、以下のとおりである。

#### 平成 23 年度（平成 23 年 8 月～平成 24 年 3 月）

調査主体 鹿児島県教育委員会

作業統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 寺田 仁志

作成企画 次長兼総務課長 田中 明成

次長兼南の郷文調査室長 井ノ上秀文

調査第二課長 富田 逸郎

主任文化財主事 兼 調査第二課第二調査係長 鶴田 静彦

作成担当 文化財主事 吉岡 康弘

事務担当 総務係長 大園 祥子

主査 岡村 信吾

#### 平成 24 年度（平成 24 年 4 月～平成 25 年 3 月）

調査主体 鹿児島県教育委員会

作業統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 寺田 仁志

作成企画 次長兼総務課長 田中 明成

次長兼南の郷文調査室長 井ノ上秀文

調査第二課長 富田 逸郎

主任文化財主事 兼 調査第二課第二調査係長 鶴田 静彦

作成担当 調査第二課長 富田 逸郎

文化財研究員 森 幸一郎

文化財調査員 黒木 梨絵

事務担当 総務係長 大園 祥子

主査 池之上勝太

#### 平成 25 年度（平成 25 年 4 月～平成 26 年 3 月）

調査主体 鹿児島県教育委員会

作業統括 公益財団法人鹿児島県文化振興財團

埋蔵文化財調査センター

センター長 富田 逸郎

作成企画 総務課長兼総務係長 山方 直幸

調査課長 鶴田 静彦

調査第二係長 寺原 徹

作成担当 調査第二係長 寺原 徹

文化財専門員 長野 真一

文化財調査員 黒木 梨絵

事務担当 総務課長兼総務係長 山方 直幸

主査 岡村 信吾

企画委員 事業推進員 川崎 麻衣

文化財専門員 森 幸一郎

整理指導 青山学院大学教授 手塚 直樹

#### 報告書作成指導委員会

平成 25 年 11 月 27 日(水) 調査課長ほか 6 名

報告書作成検討委員会

平成 25 年 11 月 29 日(金) センター長ほか 5 名

#### 2 整理作業の経過

整理作業の経過は以下のとおりである。

#### 平成 23 年度

8 月 原稿執筆、図面整理、遺物洗浄・注記

9 月 原稿執筆、図面整理、遺物選別

10 月 原稿執筆、図面整理、遺物洗浄・注記

11 月 原稿執筆、図面整理、遺物洗浄・注記・接合

12 月 遺物接合、土器実測

1 月 遺物注記、遺物実測

2 月 遺物注記、遺物実測、土器拓本

3 月 遺物トレイス

#### 平成 24 年度

4 月 遺物注記、図面整理

5 月 遺物洗浄・注記、図面整理

6 月 図面整理、データ整理

7 月 図面整理、データ整理、遺物分類・選別

8 月 図面整理、データ整理、石器分類

9 月 図面整理、データ整理、石器分類

10 月 遺物分類、遺物接合

11 月 遺物接合、自然科学分析委託

12 月 遺物接合、土器実測

1 月 土器実測・拓本、遺物洗浄

2 月 遺物洗浄・注記・接合

3 月 土器実測・拓本

#### 平成 25 年度

4 月 遺物選別、図面整理、遺構図トレイス、原稿執筆

5 月 遺物接合・復元、図面整理、遺構図トレイス、分布図作成、原稿執筆、石器実測委託

6 月 遺物選別・接合・復元、図面整理、遺構図トレイス、原稿執筆

7 月 遺物洗浄・拓本、遺構図トレイス、原稿執筆

年代測定及び樹種及び種実同定分析委託

8 月 遺物実測・拓本、遺構図トレイス、原稿執筆、樹種及び種実同定分析再委託

9 月 遺物実測・拓本・トレイス、遺構図トレイス、レイアウト、原稿執筆

10 月 遺物実測・トレイス、遺構図トレイス、レイアウト、原稿執筆

11 月 遺物実測・トレイス、レイアウト、原稿執筆、観察表作成

12 月 遺物レイアウト、原稿執筆、観察表作成、写真撮影、入札

1 月 校正、遺物・図面等の整理、収納作業

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

中都遺跡群は、鹿児島県出水市野田町下名に所在し、東側を流れる野田川と西側を流れる岩下川（西目川）に挟まれた標高20m程の台地先端部に立地している。その野田町は出水市の西端にあり、町の中央部を東西に走る国道504号を境に南側を上名地区、北側を下名地区と区分される。特に上名地区は、島津藩の外城支配構造を示す、麓景観を良く残している。

現野田町は、平成18年旧出水市と旧高尾野町の合併により、出水市に編入された市の西端の町である。出水市は、八代海に北面する出水平野とそれを取り囲む矢筈岳と紫尾山で構成し、東に矢筈岳、南には紫尾山の山並みが並ぶ。その矢筈岳は熊本県との県境及び伊佐市と、紫尾山はさつま町や阿久根市と行政区画をなす。なお、矢筈岳は標高687mの旧期火山で、頂上は離岳と雄岳に分かれ、この雄岳の頂上が箭の筈のように見えることが命名の由来とされる。九州山地に属する紫尾山は標高1067m、山肌に懸かる紫雲がその由来とされ、頂上には上宮権現社が、山麓には紫尾山裕院神輿寺と紫尾山三所権現が建立され、別名上宮山とも呼ばれている。そして、矢筈岳には輝石安山岩、紫尾山には花崗閃緑岩とホルンフェルスが露出し、これらが石器の石材として供給されている。また、出水平野は紫尾山を起点とした扇状地で、そこを流れる米ノ津川や高尾野川、野田川は上流域では段丘を下流域では冲積平野が形成される。そして、豊富な伏流水は、扇端部各所で豊かな湧水として露出し、集落形成を促してきた。また、河口周辺では八代海の遠浅の地勢を活かし、藩政時代から干拓事業が盛んに行われてきた。なお、この一帯は、国の天然記念物のツル越冬地でもあるとともに、冬の干潟の海苔養殖場、クマ海老漁のかタウタセ船の帆を張る姿は、冬の風物詩として知られている。また、海に面した緩斜面は、柑橘ブランドの“出水ミカン”的生産地として発展してきている。

### 第2節 歴史的環境

出水市の基礎的遺跡台帳は、昭和36年の鹿児島県教育委員会の遺跡地名表作成事業を担当した池水寛治によって作成された。

野田町では、大畠遺跡、亀井山城、新城と発掘調査事例は少ないが、本遺跡の周辺すなわち、野田川流域の遺跡分布からは、台地や流域沿いに広がる水田が重要な生産地であり、それを取り囲むように生活が展開したことなどが看取られる。一方、八代海に直結する丘陵先端部には江内貝塚、高尾野川下流域の台地端部には莊貝塚と縄文時代の希少な生活痕跡も残されている。

特に、本遺跡は『野田町郷土史』に記す「屋地は鎌倉時代の初期、島津氏の始祖忠久が薩摩大隅の守護職に任命されたとき、その統治の根拠地として、木牟礼城を築き、ここに館を置き以後数代の居宅としたところ」の「屋地の居館跡」に該当すること、即ち、島津家発祥の地論争の有力な候補地であることから、注目を集める調査となつた。この「屋地」について、三国名勝圖絵では「木牟礼城址の辰巳、五町半にあり、周囲十八町四十六間、南北五町余、東西二から三町余に亘て広狭あり、平地より高きこと丈余にして、外面は今昔田地に接するといえども、その形成为木牟礼城に統き云々」と、その詳細を記述している。さらに郷土史では、星形跡やその一角にある島津家初代忠久を祀る竜尾神社等は、応永二十九年の島津總州家の滅亡以後、大いに荒廃が進んだこと、さらに農地化や生活道路整備、宅地造成、特に近年の土砂採掘によって、その榮華の址や地勢の変化が急速に進んだことを記録している。

また、郷土史の「屋地屋形略図」からは、現存する竜尾神社や熊野神社、屋形内外や神社周辺を取り囲む堀跡が鳥瞰でき、また、金剛寺跡、東門、西門、水之手口、西前寺跡の伝承地も記される。そして、今回の調査範囲、すなわち路線は、東から金剛園、岡畑、大園の小字を通過している。なお、竜尾神社の他、近くに熊野神社があり、その神社の南側には、建久五年（1194年）、榮西禪師を開山の祖とする感応寺の五重塔には、島津家初代から五代が祀られている。なお、木牟礼城については、本遺跡の北側に独立丘陵が想定されていたが、シラス採取によりそのほとんどが破壊され消滅するに至っている。この木牟礼城跡をはじめ、周辺には最初期の城跡とされる亀ヶ岡城や亀井山城が残されている。なお、昭和49年、この木牟礼城跡から吉留秀敏により大量の遺物が採取され保管されていてことから、それらを資料化し、掲載することにより本遺跡群の解明の手がかりとすることとした。

野田町に於ける旧石器時代の石器群としては、本遺跡が初見となる。出水市上場遺跡は、旧石器時代の標識遺跡で、周辺には大久保遺跡、狸山遺跡、郷田遺跡等の遺跡群が密集する。隣接する伊佐市日東は黒曜石の原産地遺跡で、旧石器時代から縄文時代を通じて大量の黒曜石が供給され、県境の水俣市石坂川には石飛分岐遺跡も所在する。この上場遺跡は、池水寛治が出水高校考古学部を指揮して調査を行った本県初の旧石器時代の遺跡であり、その調査は昭和40年の1次調査から昭和50年の5次調査まで行われた。第2層にアカホヤ火山灰、第5層にA Tが堆積し、その間に爪形文土器や細石刃文化、ナ

イフ形石器文化が重複して残され、最下層石器群は後期旧石器時代初頭の可能性が指摘され、近年改めて再評価されている。

縄文時代以降は平野部の利用が高くなる傾向が見られ、江内貝塚もその一つで、江内中学校裏手の丘陵先端部にある縄文時代中～後期の貝塚で、昭和36年の池水の調査と平成3年の調査からは、春日式土器や阿高式土器、骨製釣針や鯨の椎間板が出土している。また、タマキガイ製貝輪は製品として持ち込まれ、良質の黒曜石は西北九州から運ばれており、海を介して遠隔地との深い関わりを見てとることができる。庄貝塚は轟式土器の貝塚で、昭和43年の池水の調査から昭和63年までの間に4次の調査が行われている。第1次調査では、貝塚の北端と轟式土器を主体とすることを明らかにし、BP5,496 ± 60 の放射性炭素年代測定値を得ている。第2次調査は台地の東側を調査し、第3次・第4次調査では、第1次調査と重複する地点の調査を行い、緩斜面に点在する貝層からなる貝塚であることを明らかとし、貝層からはイノシシ、シカ、キジなどの動物骨とともに、有明海沿岸特有の双角状石器をはじめ、楔形石器等が多量に出土している。

出土貝塚は出水市上知識尾崎に所在し、海岸から約4km内陸の台地の縁辺部に立地する。大正9年、山崎五十鈴が調査結果を『考古学雑誌』に発表し、同年、長谷部言人・濱田耕作、昭和29年には山内清男ほかが調査している。それらの結果、縄文時代中期の埋葬人骨が発見され、河口は出土式土器の存在を指摘して縄文時代後期とした。平成8年～11年、出水市教育委員会は範囲確認調査を行い、長さ100m、幅30m、面積3,000m<sup>2</sup>程度であることを明らかにした。

沖田岩戸遺跡は昭和48年と49年、隣接する大坪遺跡は平成10年と11年、前者は岩戸川河川改修、後者は九州新幹線鹿児島ルート建設に伴って発掘調査が行われた。縄文時代後期から晩期の遺跡で、いずれも米ノ津川右岸の沖積地に立地している。大坪遺跡の上加世田式土器と入佐式土器から成る37基の玉壺は特徴的で、管玉や小玉等の玉造跡が確認され、両土器群は分布域が異なり且つ玉類の石材及び仕上げ技術に差が認められるところ。ちなみに、上加世田式土器の玉類は透明感のある良質な石材を使用し薄手で規格性があるのに対し、入佐式土器の玉類は濃い緑色の石材を使用し大きさや形にバリエーションを持つとされる。

近くでは、縄文時代晩期から弥生時代初頭の下終追跡跡や中里遺跡、柿内遺跡、沖田岩戸遺跡等が知られる。下終追跡では、大量の組織痕灰土器が出土しており、その高度な編み技術に着目した、尾閻清子による編布の復元も注目される。

弥生時代の調査や古墳時代の大規模集落の調査は行われていないが、古墳時代になると地下式板石積石室墓の

分布域であり、短甲や金環を出土した溝下古墳群や堂前古墳群が知られる。

8世紀になると、「出水」は文字資料の中に出現する。「薩摩国正税帳」の残書に、出水郡の酒や穀物などの収納や支出に関する事や国司に関わるとされる記述が確認されている。出水が明記されているのは、平安時代初期の『続日本記』で、宝亀9年(778年)11月の条に、遣唐使が薩摩國出水郡に漂着したとされる。

10世紀の『和名類聚抄』では、薩摩國が13郡35郷から構成され、和泉郡は5郷で構成されることを記している。その中の山内郷が、現在の野田や高尾野に当たるとされる。平安時代には山門院が設置され、山内郷は和泉郡から独立し莊園となる。12世紀には、鎌倉幕府により鳥津莊が成立し山門院は消滅する。

建久8年(1197年)の『薩摩國田帳』に記される大宰府天満宮の別当寺の安楽寺領老松莊は、莊地区に所在していたとされ、他の薩摩国内の安楽寺領と異なり、地頭が置かれておらず、在地領主が居ない安楽寺の一円支配であったと考えられている。なお、2012年に報告した外島遺跡からは、中世の方形堅穴建物や掘立柱建物跡が発見されていることから、老松莊の一部もしくは隣接地として関連の深い遺跡である。

1392年に南北朝の統一後、島津氏は薩摩絶州家と大隅奥州家の間で内部抗争が起き、1430年に絶州家の久林を殺害した忠国は、弟の用久に薩摩家を興させ出水地方を支配させる。その後、戦国期を通して、出水地方では農臣秀吉による薩摩家改易まで薩摩島津家の支配が続くこととなる。秀吉の死後、出水は島津本家の領地となり、江戸幕府が崩壊するまで島津藩の外城としてその支配が継続した。それらは、「龍」と称され、出水の「龍」は最大規模であり、龍を構成する武家集落は現在も引き継がれ、平成7年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

昭和18年には、大野原の台地に出水基地飛行場が建設され、海軍航空隊が設置された。出水基地はその後、昭和20年に特攻隊の基地となり、200名以上の隊員が出撃したが、同年の空襲により基地は壊滅する。雲の墓標は、その悲しい歴史を伝えている。

#### 木牟礼城跡採集資料（第2・3図）

昨年3月逝去了吉留秀敏氏が採集し、保管している木牟礼城跡関連資料が存在することが判明した。

木牟礼城跡については、本遺跡群及び創生期の島津氏と密接に関わる城跡で、国道3号を境に、南に本遺跡群を含む屋地屋形跡があり、北に木牟礼城跡が位置している。しかし、現状は、「木牟礼城跡」の石碑とそれらを伝える案内板が、その城跡の一部とされる土壇状に取り残された高台に残るのみである。

第1表 周辺遺跡地名

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	番号	遺跡名	所在地	地形	時代
1	竹林城跡	高尾野町江内木本丸	台地	中世	40	莊上	出水市莊下	台地	中世
2	川骨	高尾野町江内	台地	縄文、古墳	41	莊上Ⅱ	出水市莊下	台地	古代
3	木本丸	高尾野町木本丸	台地	弥生	42	田瀬	出水市莊下	畠状地絆造	縄文、古墳
4	木本丸城跡	高尾野町江内高崎	台地	中世	43	原ノ内	出水市莊下	畠状地	平安、中世
5	東差跡	野田町下名原地	台地	古墳～中世	44	下高尾野	高尾野町下高尾野	台地	弥生
6	中林	野田町下名中林	丘陵地	中世	45	外晶	出水市莊下	台地	古墳～中世
7	北山田	野田町下名	台地	近世	46	宮田	出水市莊下	畠状地絆造	平安、中世
8	六枝	野田町下名六枝	丘陵地	中世、近世	47	松ヶ角	高尾野町朝笠本笠木	台地	古代
9	中部	野田町下名中部	台地	弥生	48	小村	莊上	畠状地	平安、中世
10	木本丸城跡群	野田町下名瀬木はか	丘陵地	中世	49	松ヶ野	高尾野町下高尾野	台地	縄文、古墳、中世
11	大園	野田町下名大園	台地	中世	50	出し道	高尾野町唐笠木	台地	縄文、中世
12	山内寺跡	野田町下名中部	台地	築久7年	51	源詠詩	高尾野町唐笠木	台地	縄文、中世
13	木ノ上城跡	野田町下名中郡	丘陵地	中世	52	牧光寺	高尾野町下高尾野放光寺	畠状地	縄文～古墳、中世
14	前上城跡	野田町下名中部	丘陵地	中世	53	波瀬野(高尾野)	高尾野町下高尾野新城	河岸段丘	中世
15	感恩寺跡	野田町下名八幡	台地	中世	54	船追	高尾野町下高尾野高松	台地	縄文～弥生
16	大嵐	野田町下名瀬木大嵐	台地	縄文、中世	55	源詠詩	高尾野町唐笠木	台地	縄文～弥生
17	龍之城跡	野田町下名瀬木之城	丘陵地	中世	56	横馬場	高尾野町旁引・唐笠木	台地	縄文～弥生
18	松ヶ道八	野田町下名松ヶ道	丘陵地	縄文、近世	57	上石坂	高尾野町下高尾野上石坂	丘陵地	近世
19	野田島	野田町下名多田園	台地	縄文～中世	58	榮引道跡群	高尾野町下高尾野・榮引	台地	縄文～弥生
20	春ノ谷	野田町下名下多園	台地	古墳～中世	59	斧田	高尾野町下高尾野斧田	台地	古代、近世
21	松ヶ道日	野田町下名松ヶ道	丘陵地	中世、近世	60	木道	高尾野町下高尾野木道	台地	縄文、古墳、近世
22	桜ヶ城跡	野田町下名瀬木城	丘陵地	中世	61	道上	高尾野町下高尾野道上	台地	近世
23	茅道	野田町下名茅道	丘陵地	縄文	62	水天原	高尾野町下高尾野水天原	台地	古墳、近世
24	城内日坂	野田町下名城内	山腹斜面	縄文、中世	63	木城跡	高尾野町下高尾野高城	台地	中世
25	龜井川城跡	野田町下名本城	丘陵地	中世	64	高尾野他跡	高尾野町下高尾野内ノ下	山腹斜面	近世
26	新城跡・野田	野田町下名城跡	丘陵地	中世	65	達具塚	高尾野町下高尾野達具塚	台地	古墳、近世
27	上名道跡群	野田町下名	丘陵地	中世	66	段の原	高尾野町下高尾野段の原	山腹斜面	縄文、近世
28	下名道跡群	野田町下名	丘陵地	縄文～中世	67	青木	野田町上名青木	沖積地	縄文、古代、近世
29	湯ノ谷	野田町下名湯ノ谷	丘陵地	縄文、古墳	68	上平田	野田町上名上平田	沖積地	古代、中世、近世
30	藤原	野田町下名藤原	台地	縄文、近世	69	受口A	野田町上名	丘陵地	縄文
31	莊日城	出水市莊下	台地	縄文(原)、古代、中世	70	受口B	野田町上名	丘陵地	縄文、近世
32	莊下	出水市莊下	台地	縄文、古代、中世	71	大角鹿塚	野田町上名	丘陵地	近世
33	西下	出水市莊下	畠状地絆造	古代、中世	72	田舎丸	野田町下名	丘陵地	縄文
34	寺ノ下	出水市莊下	畠状地絆造	古代、中世	73	野田川舟	野田町下名	丘陵地	古墳、中世
35	京半卓	野田町下名	丘陵地	古代～中世	74	櫻木	高尾野町江内	台地	古墳
36	六田多	野田町下名六田多	丘陵地	古墳、中世	75	源詠道	高尾野町江角南方	丘陵地	縄文
37	涼森	野田町下名涼森	台地	江戸	76	源詠詩	高尾野町江角南方	丘陵地	古墳
38	丸尾	出水市莊下	畠状地絆造	縄文、中世	77	上冷筋	高尾野町上冷筋	山腹斜面	縄文
39	桑水流	出水市莊下	畠状地絆造	古代、中世	78	上段	高尾野町江内	山腹斜面	中世

昭和62年刊行の「鹿児島県の中世城館跡」では、木本半城跡は島津初代守護職の忠久の家臣の本田真貞が築城し、守護所としたとされる。その存続期間は文治二(1186)年～永享二(1430)年とされる。その間、文永十一(1274)年異國警固で下向した三代久経は、当地を居城として領国支配を行ったとされる。その後五代貞久、六代師久と敵対する和泉一族との攻防や、薩摩國の守護職の總州家師久と大隅國守護職奥州氏久の長い勢力争いが続く事となり、その間木本半城が中心的舞台として存在したと考えられる。

吉留氏による採取は昭和49年と記録されていることから、それ以前から木本半城跡の破壊行為は始まっていたこととなる。城の破壊がどこまで遡るか現状では明らかでないが、總州家の衰落以後荒廃が進み、戦後の食糧難を乗り越えるための農地の拡大や農地整備事業の推進。延いては近年の宅地開発に伴い、城の破壊が進んだものと思われる。

吉留氏の採取していた遺物の水洗いを行い、遺物へ「吉ドメキノムレ 1974」と注記し、遺物の散逸防止に対処した。その後、復元接合を試み、必要に応じて図化に努

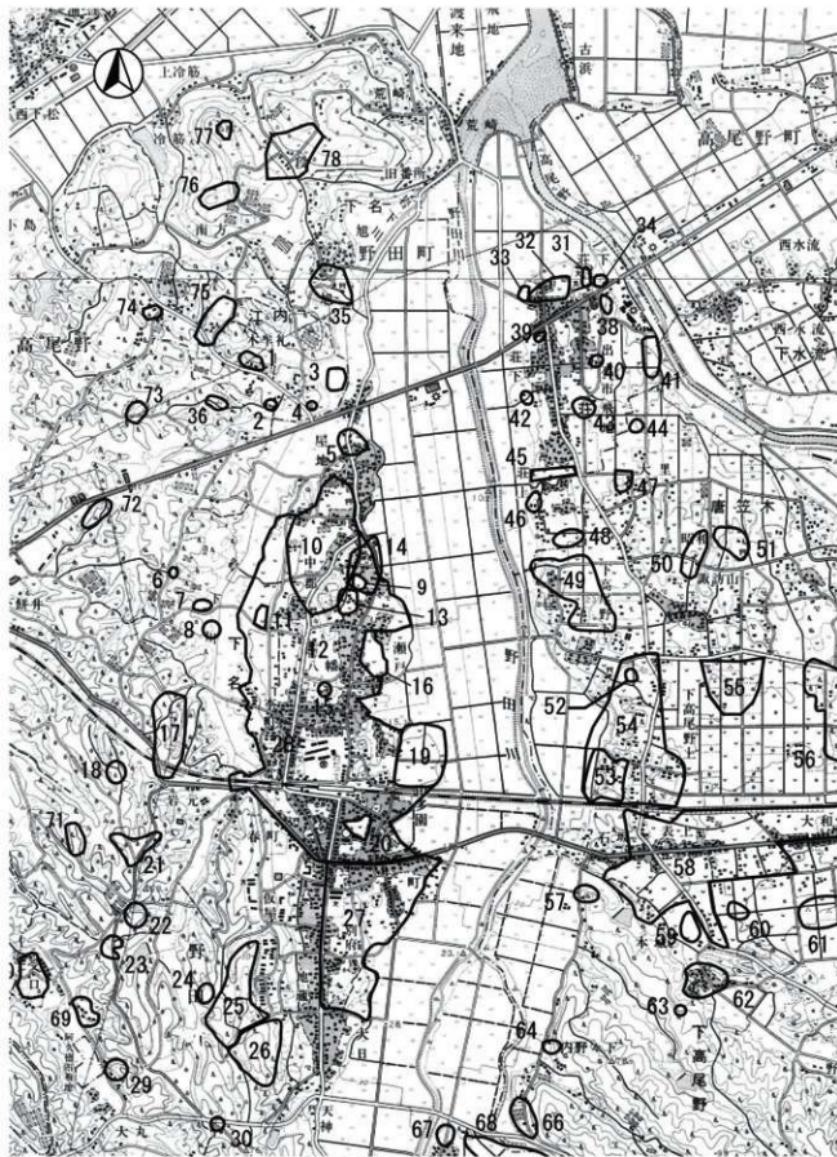
め、第2・3図に示した。以下、資料を紹介する。

1は簡式で精円形の窓と接地面中央部がドーム状に抉られた脚台で、円形に仕上げた接地面の径は3.5cmで、縄文時代後期に比定される熊本県菊池市天城遺跡の出土品に酷似する。

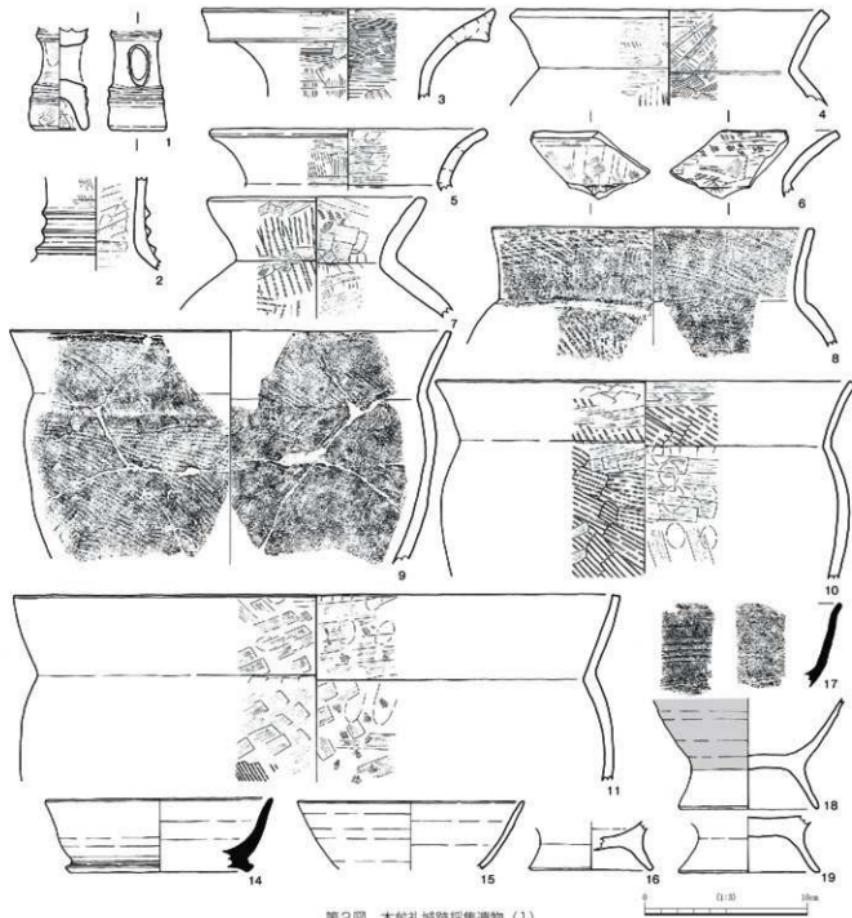
2は弥生時代中期の袋口縁壺の頭部の突部と見られ、内外面ともに丁寧にナデで仕上げている。外面の三角突部の接合の横ナデは最終段階で行い、輝石や石英等に加え黒色鉱物が特徴的な胎土である。3は肥後系弥生土器の口縁部で、復元口径17.8cmで、内面は横方向のハケメ。外面はナデ仕上げで、胎土粒子は細かく輝石の混入が目立つ。なお、類似品が中都遺跡群で出土している。

4・5・7は内面の屈折が明瞭に残るもので、古墳時代の長胴壺の口縁部で、中津式土器段階に該当する。

5の口縁部外面は縦方向にハケメで調整した後、横方向にナデで仕上げる。7の復元口径13.0cmで、縦じて器壁は厚く、口部唇は尖り気味に丸く仕上げる。外表面は縦方向のハケメ仕上げで、にぶい黄澄の色調に極わずかであるが金雲母を含む。4の復元口径19.7cmで、器壁は薄く、内面にはハケメを残すが、外面は横にナデで仕上



第1図 周辺遭跡位置図(1:25,000)



第2図 木牟礼城跡探集遺物(1)

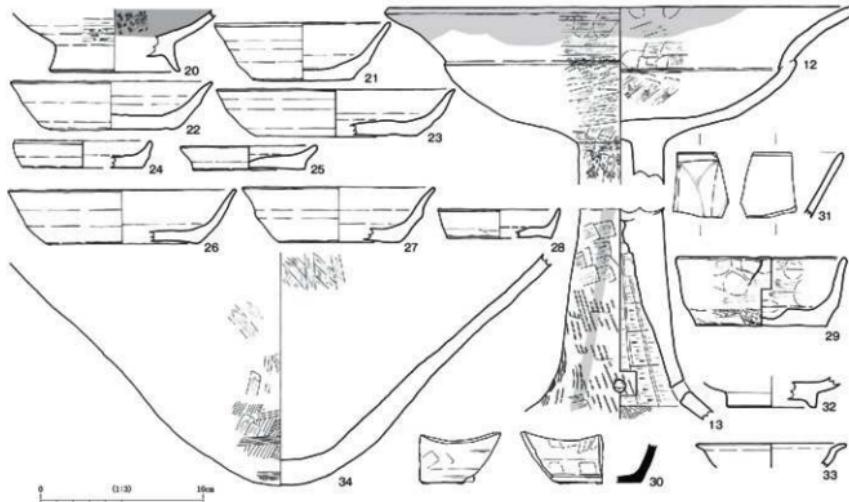
げる。4も6に酷似する資料であるが、内面調整が特に丁寧で、横にナデで仕上げ、器壁もより薄い。頭部の屈折や口唇部の平坦な作りも酷似している。

8の復元口径は20.0cmで、口縁部が直に立ち上がり、頭部に明瞭な段を有し、窓の最大幅が胴部に設けられる。なお、口縁部内面はハケメ調整されるが、器面には叩き痕らしき痕跡が残される器壁の薄い仕上がりを成す。

9・10はいずれも口唇部は狭いが平坦面を成し、器壁は薄く、内面の屈折を明瞭に残す度で、これらの特徴から中津野式土器（中村直子編年表5型式、芝原遺跡4：

発1類）に該当する。10では26.0cm、9では27.2cmの口径が復元される。11は淡黄色、9・10は浅黄橙色を呈し、10の口縁部内面は斜め方向のハケメそれ以下はナデ調整。外面では緩やかな弧状の短いハケメ調整を重ね、口縁部はナデで仕上げる。9はハケメ調整痕を明瞭に残す。11は、胎土及び焼成等の類似性から、34と同一個体と判断される。

12と13は同時期の特徴を備えた高杯で、中村直子編年表の高杯2型式で、復元口径28.8cmで杯部は途中で大きく屈折し外反する。内面は丁寧なナデ仕上げが残され



第3図 木牟礼城跡探集遺物(2)

るが、外面は粗いヘラケグリで残される。13の裾部には円形の透かしも見られる。

14は復元口径14.0cm、底径11.0cm、高さ4.5cmの須恵器壺で、高台接地面と口唇部が摩耗し、特に高台部が著しい。製作時期は8世紀後半～9世紀前半と判断される。17は9世紀前半の須恵器壺で、傾きについては疑問も残る。

16は底径7.6cmの土師器壺で9世紀代と判断される。底径8.4cmの18は、胴部と高台部の縫合部に煤状炭化物が残される。なお、18は逆台形の壺部と、総じて造りがシャープであることや直線的に立ち上がる形状から、底径8.6cmの19も高い高台の特徴から9世紀中頃～後半と判断される。

21は口径10.8cm、底径6.2cm、高さ3.6cmのヘラ切りで、口径が大きくなり特徴から10世紀頃。20は内外ともミガキで、内面は黒色に仕上げたいわゆる内黒土器壺で、高台径8.0cmで、高く丁寧な作りから10世紀代、23の切り離しは糸切りで、口径14.6cm、底径10.0cm、高さ29cmで、口径が大きい特徴から12世紀後半と判断される。22は口径12.9cm、底径8.0cm、高さ3.0cmと、口径が大きく13世紀代の特徴を有し、24の口径も13世紀と見られ、底部が厚く、体部が直に立ち上がる特徴が見られる。なお、口径8.4cm、底径7.2cm、高さ1.7cmとなる。

26は口径14.0cm、底径9.2cm、高さ3.3cm、25は口径8.4m、底径7.0cm、高さ1.5cmで、その口径の比率から13世紀と判断される。27は口径11.8cm、底径7.6cm、高

さ3.4cmから13世紀後半から14世紀前半に、29は全体的にひずむことから断定はしにくいが、口径等は14世紀的な特徴と言える。なお、口径10.5cm、底径8.0cm、高さ4.3cmとなる。28も体部が直に立ち上がることや口径から14世紀で、口径7.4cm、底径6.4cm、高さ18cmとなる。

30は内側にも釉がかかっており、自然釉であれば須恵器と認定できるが、陶器の可能性も残される。

31・32は龍泉窯系碗II類で、31はオリーブがかかった灰色で、32の内底から疊付は露胎とする。

以上が、今回資料化したもので、本遺跡の屋地屋形跡との関連資料としては、22～26等が12世紀後半から13世紀に帰属する可能性があることから、それらの関係性を示す該当資料として検討できそうである。

古くは繩文時代後期に始まり、弥生時代中期頃には北部九州との関連性が読み取れ、古墳時代には在土地土器の遺物量が増加し、丸底壺からは肥後地城との交流の痕跡が読み取れる。その後、9世紀から10世紀の土師器も確実に存在することから、野田川の下流域のこの一帯が、新たな時代のそして北薩摩の拠点として、木牟礼城跡に繋がる素地が徐々に整備され、中世武士団の基地としてこの地が存在した可能性は高い。

遺物の回収に努めた、吉留氏に心から謝意を表する。

### 第3章 調査の方法と成果

#### 第1節 調査の方法

##### 1 発掘調査の方法（第4図）

平成21年度 調査グリッドは、センター杭No353（X=-202,378.664, Y=-69,153.856）とセンター杭No354（X=-102,386.489, Y=-69,172.262）を結ぶ線を基準として、南側から北側へA～F、東側から西側へ1～30の20 m × 20 mのグリッドを設定した。

調査は、任意に設定した先行トレンチによる調査から開始し、遺構・遺物が存在し、それらの広がりが予測される部分については、これを拡張する方法を採用了。その結果、D～E区を中心とする500m<sup>2</sup>（小字金剛園）、C～E-13～17区及びB～E-18～25区の4,772m<sup>2</sup>（小字岡畑）、B・C-26～28区の838m<sup>2</sup>（小字大園）に遺構及び遺物包含層が存在することが確認された。また、調査時には、便宜的に各調査区の小字名を用い、D-5区周辺を「金剛園地区」、C～E-13～17区及びB～E-18～25区の4,772m<sup>2</sup>を「岡畑地区」、B・C-26～28区の838m<sup>2</sup>を「大園地区」と呼称した。

表土除去等は重機（バックホウ）を使用し、遺物・遺構等の検出や精査は人力で行った。なお、本調査は、II層（中世）及びIV層・V層（縄文時代早期）を対象とした。また第2節で詳述するが、層堆積は全体的に不安定であり、さらに調査区内に小規模な谷や低湿地、堀跡などが存在し、地形が起伏に富んでいたため、地點によって土層堆積状況の異なる様相が確認された。

包含層から出土した遺物の取り上げは、遺構に関わらないと判断されるものについては、層ごとのグリッドごとに一括で取り上げることを基本とした。B・C-26～28区のIV層・V層出土の遺物については、平板または、トータルステーションによる点上げを行った。

包含層掘削後、層堆積の状況に応じて、IV～VI層の上

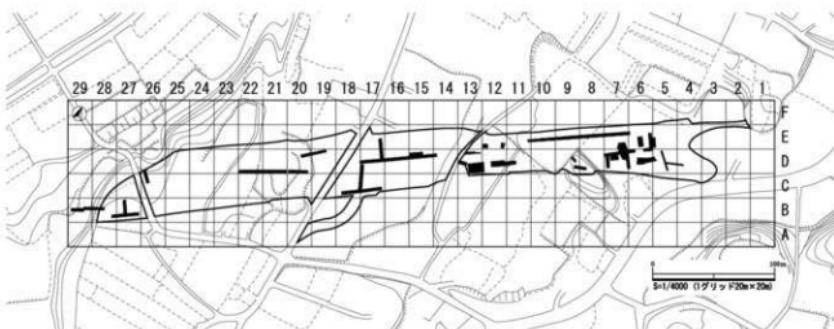
面において遺構の精査を実施した。一部包含層（II層・IV層・V層）の残存しない地点でも遺構の残存が確認された。したがって、シラス（VI層）まで削平を受けている地点においても遺構の検出を試みた。

また、C-20～22区の低湿地の調査では、中世に該当すると想定されるII層（平成24年度調査の低II層に相当）が検出されるぎりぎりまで重機（バックホウ）での掘削を行った。II層の掘削は人力で行い、シラス（VI層）上面での測量を実施した。

旧石器時代の遺物包含層の有無を確認するために、層堆積が比較的良好な地点を選んでトレンチを設定し、VI～V層まで掘り下げを行ったが、包含層及び遺物は確認されなかった。

平成24年度 B-23・24区、C-23～26区、D-20～25区及びE-20～24区を対象とし、平成21年度に設定したグリッドを踏襲し調査を行った。B～E-23区より西側の丘陵部の調査では、重機による表土除去後に、人力による縄文時代早期の包含層IV・V層の掘削及び遺構の精査を行った。また、C・D-24区では、旧石器時代のナイフ形石器文化期に該当する遺物がVI層中より出土した。傾斜地の底付近では、中世に該当するII層の堆積が確認された。

遺物の取り上げ方法は、IV層、V層及びVI層出土の遺物については、トータルステーションによる点上げを基本とした。D-20～22区を中心とする低湿地の調査では、平成21年度の調査と同じく、低II層の上面ぎりぎりまで重機による掘削を行った。低II層の調査は、1グリッドを2 m × 2 mの小グリッドに細分し、小グリッドごとの人力による掘削を行った。出土した遺物は、層位別に小グリッドごとに取り上げた。また、低II層の1 m × 1 mを1箇所、50cm × 50cmを3カ所、



第4図 グリッド配置図・トレンチ配置図

上から5cmごとにサンプリングを行い、フローテーションで、微細な有機遺物の検出を試みた。なお、低湿地で出土した自然遺物については現地での洗浄を行い、人為的な加工痕等の有無を判断し、選別を行った。

## 2 遺構の認定と調査方法

平成21年度 検出された遺構については、遺構の種類ごとに検出された順で遺構名と遺構番号を付与した。また、調査の過程で遺構ではないと判断されたものについては欠番とした。

遺構は、概ね2m四方以上のもので、床面が平坦などを堅穴建物跡・堅穴状遺構と認定した。概ね2mに満たないもののや、2mを超えるものであっても床面が平坦では無いものについては土坑として取扱った。なお、土坑のなかで土坑墓と判断されるものもある。50cmに満たないものについては柱穴と判断した。掘立柱建物跡の柱穴については、構成する柱穴には建物ごとに柱穴番号を与えた。礫がまとまって検出されたものについては、集石とした。堀跡と溝状遺構については、深さ及び幅で区別した。

平成24年度 検出された遺構については、遺構の種類ごとに検出された順で遺構略号と遺構番号を付与し、その組み合わせを遺構名とした。

遺構は、土坑及び低湿地で検出された土坑状の凹みについてはSKの略号を用いた。礫がまとまって検出されたものについては、礫群若しくは集石としSXの略号を用いた。なお、地層の横軸内に礫がまとまって検出される事例が見られたが、それについてもSXとした。幅50cm～150cm程度で、細長く帯状に検出されたもので、特に硬化面等が認められたものについては道路状遺構としてSFとした。それ以外のものについては、溝状遺構としSDの略号を用いた。杭列はSAとした。

調査方法 遺構は、検出状況の写真撮影・実測を実施した後に、土坑については半裁、堅穴建物跡・堅穴状遺構については土層観察用のベルトを十字に設定し、4分の1区画ずつ掘り下げた。遺構の性格・状況に応じて出土遺物の記録作成や取り上げ、土層堆積状況の記録等を行った。遺構の認定については、埋土の状況や床面の状態、遺物出土状況等を基に判断した。

遺物の取り上げは、各時代を共通して行い、土器の小破片については、掘り下げ時に、グリッドごとに一括で取り上げた。大型の土器片や石器類については検出面での遺物出土状況を観察し、遺構の検出を行った後、遺構に関係の無いと判断されるものについてはグリッドごとに一括で取り上げを行った。

## 3 整理作業の方法

遺物の水洗いは平成23年度及び平成24年度に行い、土器や陶磁器、礫石器に関してはブラシで水洗いを行い、調片石器は超音波洗浄機を用いた。

注記は、注記号「ナカゴ」を頭に、「区」、「層」、「取り上げ番号」の順番で記入し、遺構出土の遺物については、「ナカゴ」に統いて「遺構名」、「取り上げ番号」を記入した。なお、土器の爪先大の小破片や摩滅の激しいものは注記を省略した。

遺物の接合は、土器類、陶磁器類を中心に行った。まず、土器類と陶磁器類の抽出・分類を行い、各種類ごとに同一遺構内、同一調査区内での接合作業を行い、徐々に接合範囲を広げ、文様や胎土が特徴的なものに際しては適宜抽出して接合を行った。

## 4 出土遺物の分類

中郡遺跡群では、現地で大まかな分類を行い、整理作業の段階で詳細な時代・時期の判断を行った。分類は各時代・時期に選別した後に行なった。分類の視点・基準は時代・時期ごとに異なり、各節に詳しい。

### 第2節 層序（第5～11図）

基本層序は第5図のように整理した。遺跡が層状地に立地するという地形的特徴や、島津總州家の滅亡以後、屋形の荒廃が多いに進んだこと、さらに近年の農地転用や生活道路整備、宅地造成、特に近年の土砂採掘によって、土層の堆積は悪い。また、遺跡内での地形に起伏が多く、一部には湧水のある低湿地も存在することから、調査区内での層堆積は一様ではない。

丘陵部の基本層序 表土は、丘陵部では10～30cm程度の堆積だが、堀跡や傾斜地では20～40cm程度の堆積が認められた。II層は茶褐色～黒褐色で、中世の遺物包含層もしくは造成土である。丘陵部での残存状態は悪く、堀跡や傾斜地の底付近に良好に堆積していた。丘陵部の比較的平坦な場所では、極暗褐色の砂質土（IIa層）であるのに対し、堀跡等の低い場所では色調が濃くなるとともに粒が細かくなり、IIb層は黒褐色、IIc層は黒色でシルト質を呈する。なお、この差異における時期差は確認できなかった。

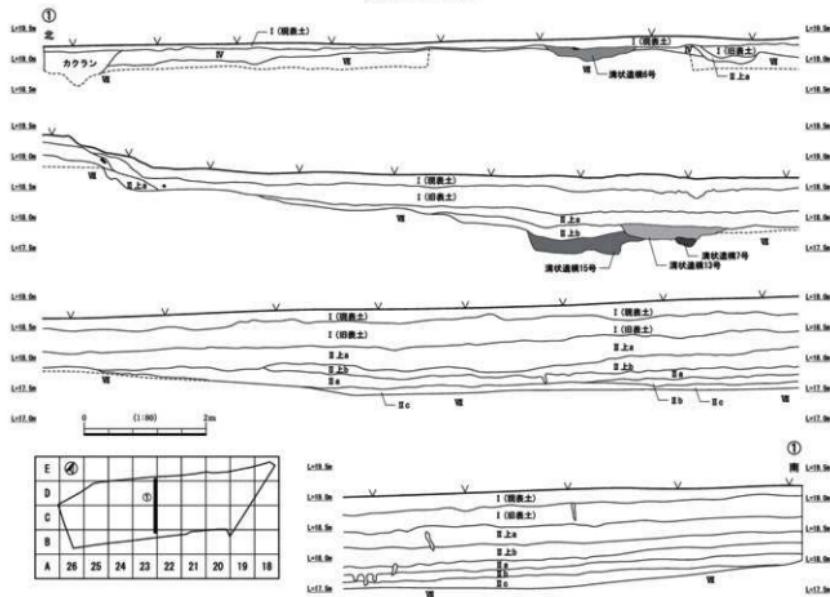
II上層は、傾斜地での堆積が認められた。表土又はII層と区別するために平成24年度調査時にII上層と新たに設定した。色調は褐色～暗褐色で、やや粗粒な砂質土である。層中の遺物や礫などの混入物は少なく、水平に近い堆積を示す。近世から近代にかけての畠跡（造成）と考えられる。III層は赤褐色土で乾燥性の高い土質で、点在する黄橙色のバミスはアカホヤ火山灰起源の可能性が高い。

IV層は褐色土で、ローム質でⅢ層からの漸位性も認められる。縄文時代早期の遺物包含層である。V層は暗茶褐色土で粘性が強く、乾燥に伴い硬化的傾向が見られた。台地中央部では比較的安定した堆積が見られたが、縁辺部では希薄な堆積状態や粘性が弱くなる傾向や、IV層との色調区分が難しい場面もあった。同じく、縄文時代早期の遺物包含層である。VI層は黄褐色土で、入戸火碎石堆積物の再堆積層である。性質がV層と類似しており、区別が難しい。一部で旧石器時代のナイフ形石器文化期の遺物が出土した。VII層はシラスである。

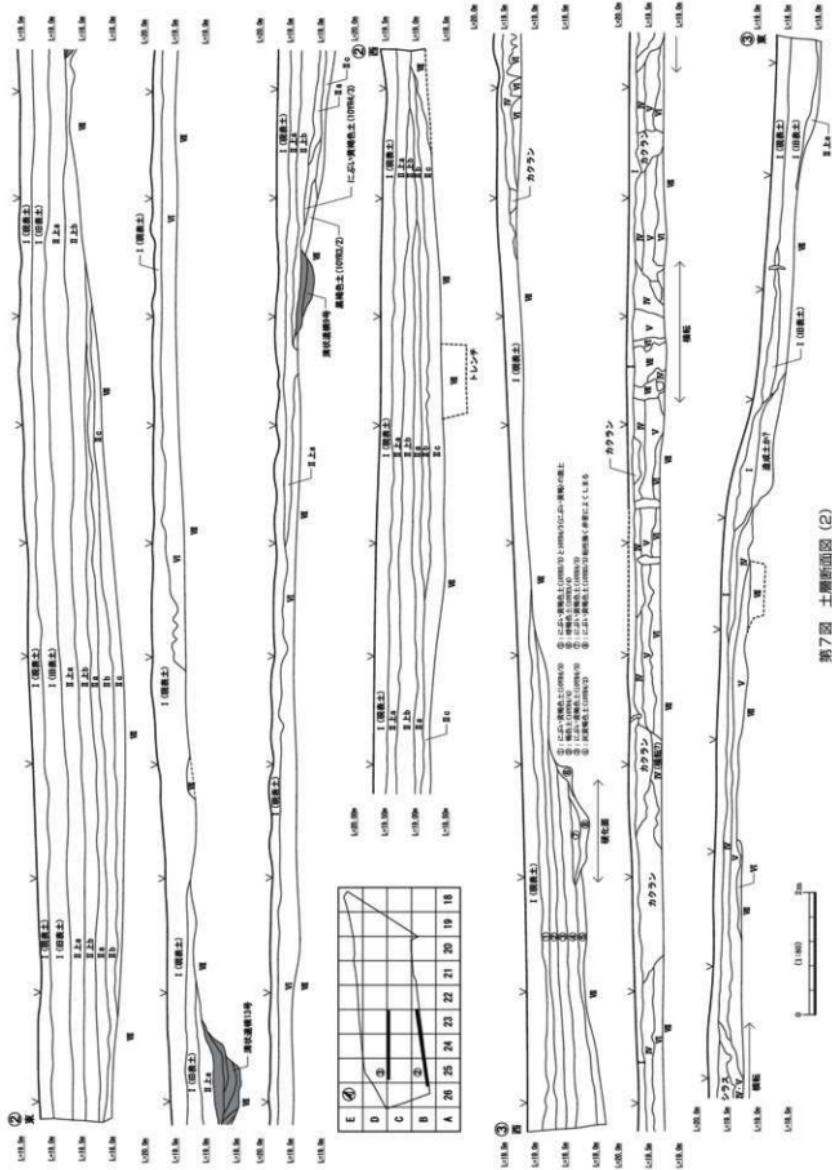
**低湿地の基本層序** 表土から深さ100~120cm程度にかけて、近世から現代に至るまでの水田跡が、10面以上確認された。低Ⅱ層は古代から中世にかけて堆積した土壤である。基本的にⅡ層と成因を同じにすると考えられる。粘性が強く、しまりが良く、下層になるほどグライ化が進行している。色調をもとに上層からa~d層に細分した。低Ⅱa層は灰褐色を呈する。低Ⅱb層はやや暗い灰色を呈する。低Ⅱc層は暗灰色を呈する。低Ⅱd層は黒色で、グライ化が進んでいる。すり鉢状の地形の底の一部に堆積する。VII層はシラスである。また、VII層と低Ⅱ層の境層から湧水が見られた。



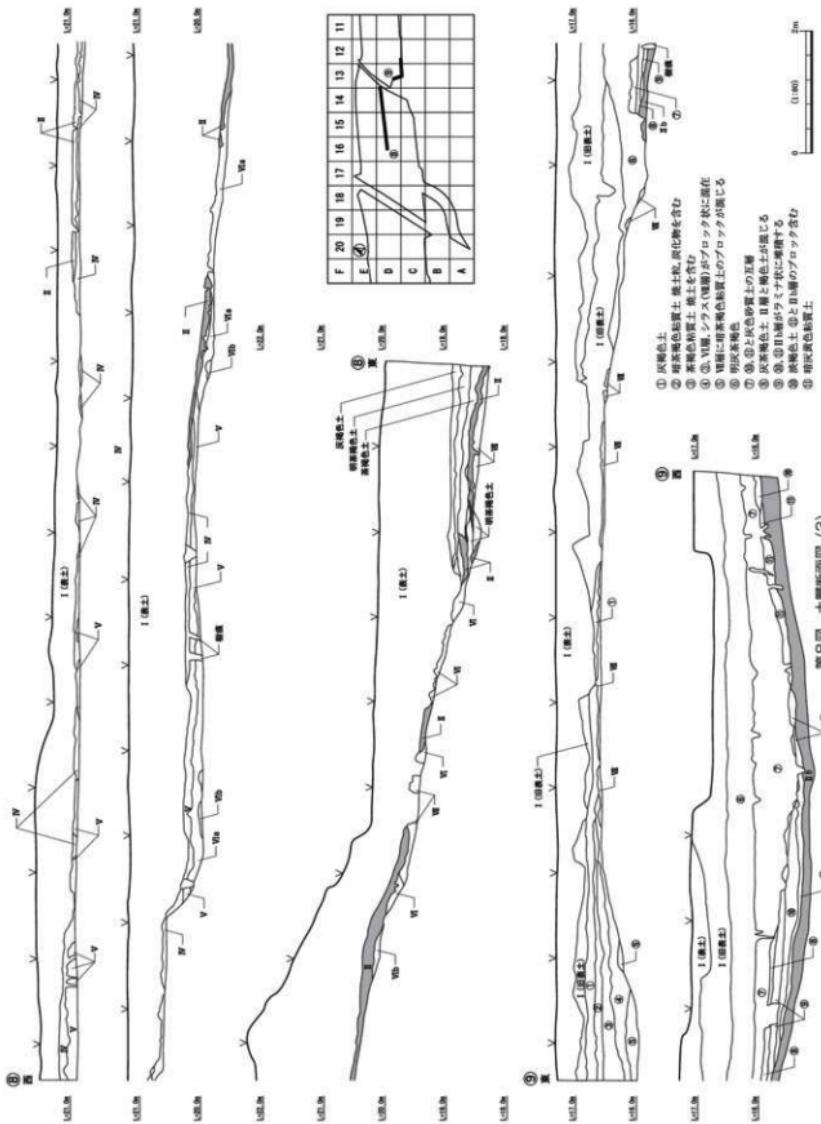
第5図 基本層序



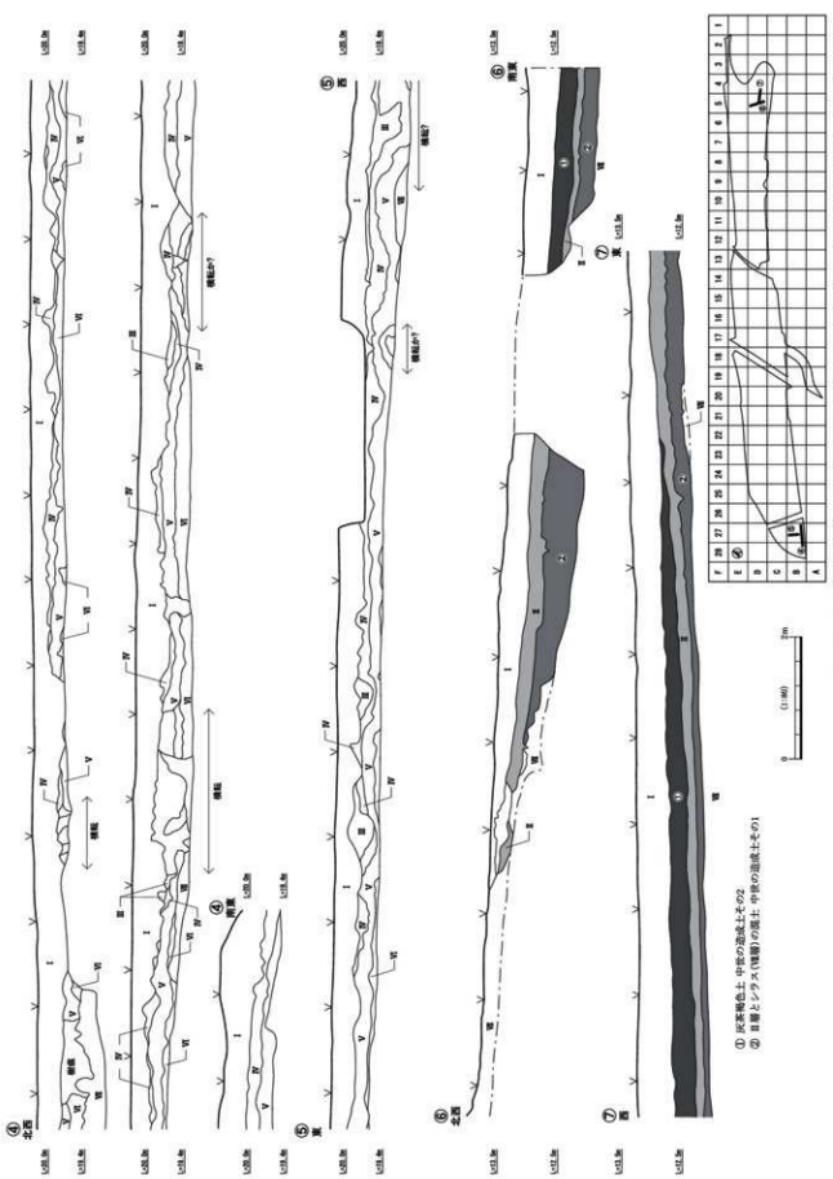
第6図 土層断面図(1)



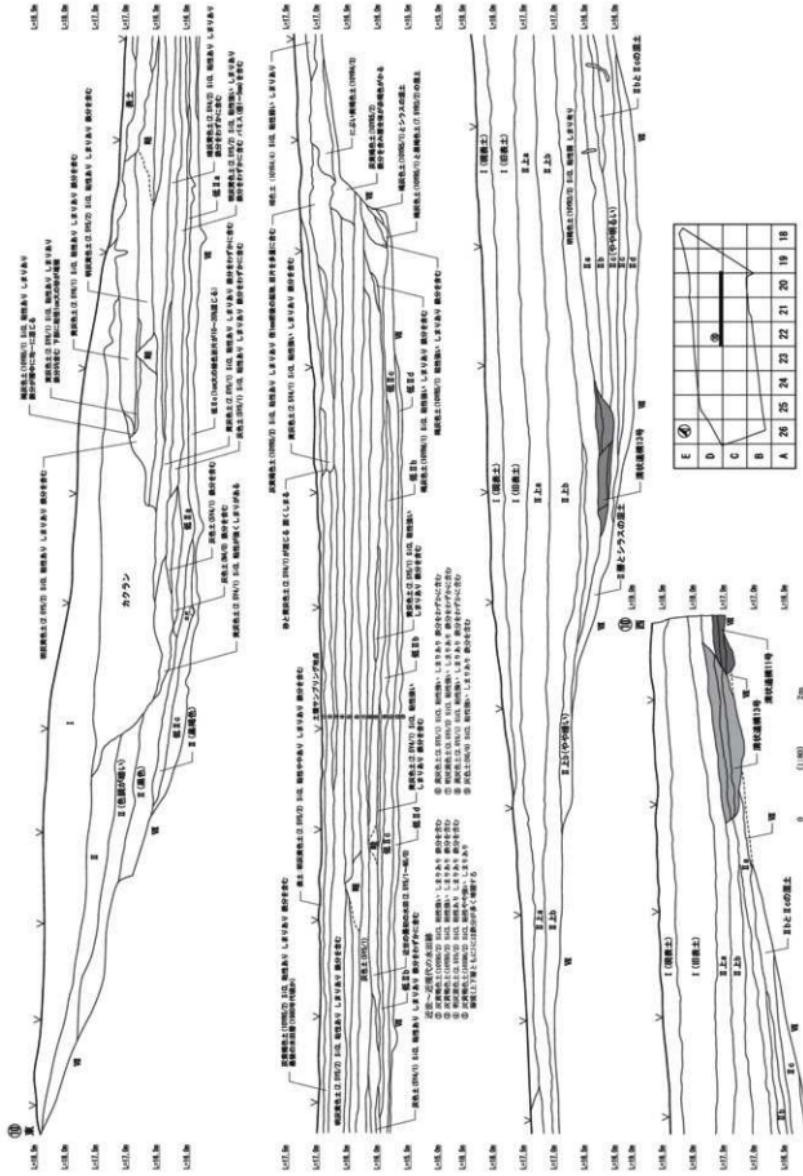
第7圖 土層斷面圖 (2)



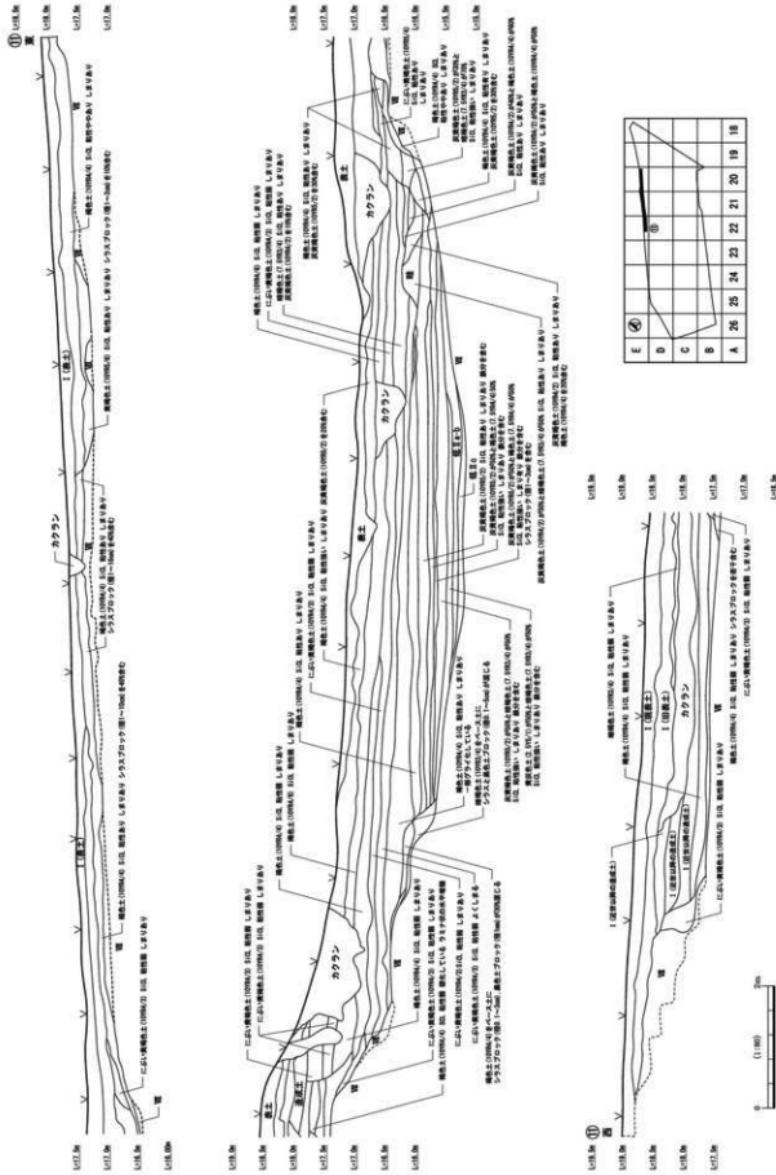
第8図 土管断面図(3)



第9図 土壌断面図(4)



第10図 土管断面図(5)



### 第3節 調査の成果

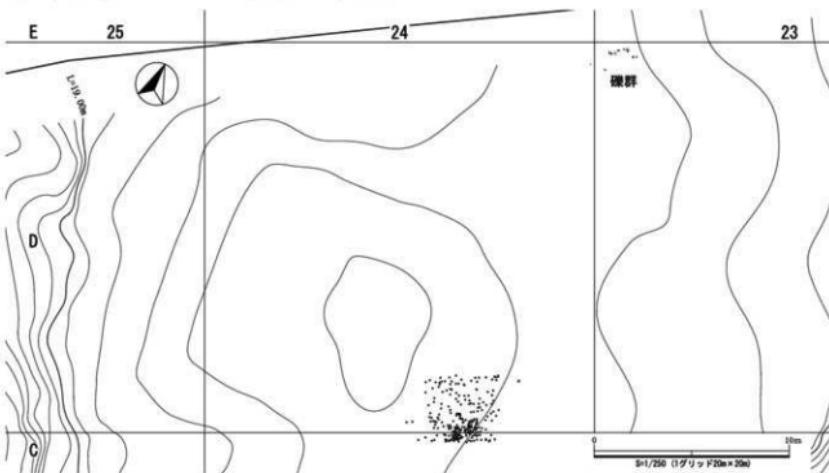
#### 1 旧石器時代の調査

##### (1) 遺構 (第12図・13図)

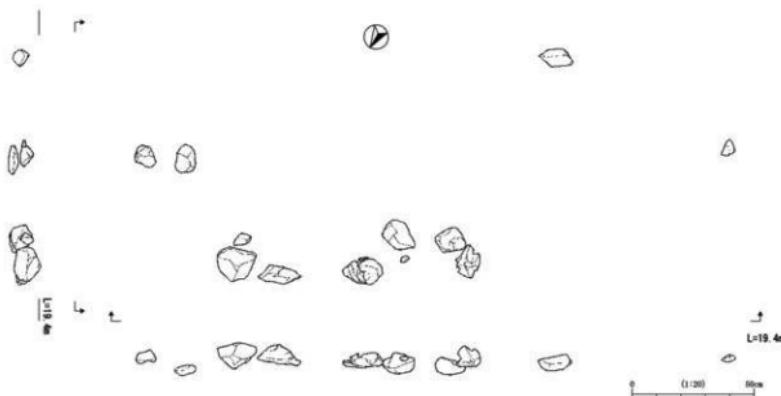
礫群はD-24区と接するD-23区の西側隅で検出されたものである。この一帯は、西側が南北方向のグリッド線に、東側が南北から北東方向に大きく傾斜する台地面を形成している。

礫群は、第13図で示したように、10cm～20cm程の10点程の礫が100cm×150cm程の範囲に散在している状況で、礫の検出レベルからは人為的掘り込み等の痕跡

は確認されていない。礫は砂岩が中心で、被熱痕等はなく、周囲からの炭化物等の出土も確認できなかった。なお、これまで知られている礫群の形態と比較すると集中度に欠け、礫群としての中心的位置の把握が明確でない等の課題が残されるが、元来これらを包括する層に礫が存在しないことも一因とし、礫群として取り扱うこととした。また、本報告書で旧石器時代の石器として取り扱った13点の2点がC-24区とD-24区から出土していることも補強要因である。



第12図 旧石器時代遺構配置図・遺物分布図



第13図 矶群

## (2) 旧石器時代の遺物 (第14図1~12, 第39図13)

V層、V層、IV層、II層及び表土からの採取品から抽出した石器で、跡跡内での石器製作痕や意図的な製品の集中等は把握されていない。

1は搔器である。D-24区V層出土で、ほぼ全周に腹面方向からの急角度の刃部を持つ。腹面右側縁と打点方向には、逆方向の角度の浅い剥離痕も残される。日東産黒曜石が使用される。

2はB-27区IV層出土で、やや厚手の剥片の先端部に腹面方向からの急角度の刃部を持つことから搔器と認定した。しかし、両側縁の形状及び二次加工から小型二側縁加工ナイフ形石器のリダクションの可能性も想定できる。使用される黒曜石は、3同様不純物を含まない良質なもので、産地は腰岳と推定される。なお、腹面には擦痕と見られる線状痕が観察される。

3は切出型ナイフ形石器である。V層出土で、小型の不定形剥片を素材とする。両側縁に急峻な角度の二次加工が見られる。また、先端部腹面に使用によると見られる刃こぼれ痕も確認できる。使用される黒曜石は不純物を含まない良質なもので、色調等から産地は桑ノ木津留と推定される。

4は角錐状石器である。C-24区出土で、中央部が稜の高い断面三角形を成し、腹面から急角度の剥離加工等から角錐状石器の中央部と判断したもので、先端部と基部を欠損する。なお、稜上方向からの調整剥離も確認できる。日東産黒曜石を使用する。

5はナイフ形石器である。B-27区の表層採集品で、8と同種と見られる。刃部は主軸に対し直行することから狹義の狸谷型ナイフ形石器からは外れるが、素材剥片が横長であることや短辺側の基部を内湾状に形成することから、基本的には同時期の石器と判断される。刃部右側の先端部を一部欠損し、両側縁の刃潰し加工は腹面側からを基本とするが、左側縁では背面からも実施している。また、腹面にも3回の細かな平坦加工が見られる。使用石材は、灰黒色の黒曜石で、上牛鼻産の可能性が高い。

6・7は台形石器である。6はB-25区で採取されたもので長さ3.5cm、刃幅2.2cmである。左側縁には腹面からの刃潰し加工が集中する。なお、右側縁は素材剥片の打面である先行する剥離面をそのまま使用するが、背面を薄くするための横方向からの平坦な調整剥離を加えている。刃部の微細剥離痕は使用痕の可能性もある。基部の破損は新しいもので、上牛鼻産黒曜石を使用する。

7は、C-26区II層出土の黒色で扁平なチャートを素材としている。左側縁は打面部を除去するようや大きめの腹面からの剥離が見られ、右側縁は背面の棱線に沿って微細且つ平坦剥離が見られる。なお、刃部の小剥離は使用による刃こぼれ痕と見られる。

8・9は切出型ナイフ形石器である。8は、B-27区IV層出土で、刃部は欠損するが切出型ナイフ形石器の基部と見られ、両側縁に腹面方向からの急峻な角度の二次加工が見られる。なお、背面方向とは打点方向が異なるが、最終的には分厚な横長剥片を使用している。刃部は大きく欠損するが、左側縁は直線的に伸び、右側基部は深く抉られることから、背部長軸と刃部が斜めに4交差する特徴からは、切出型状の基部加工ナイフ形石器の可能性が高い。黒曜石は透明性のない漆黒で、上牛鼻産を使用する。

9はD-15区IV層出土で、基本形状は切出型ナイフ形石器である。左側縁の背部には急峻な刃潰しの二次加工が認められ、基部から右側縁は先行する剥離面と回数の二次加工が認められる。なお、刃部両先端部に腹面からの二次加工は、尖頭部の強化を意識したものと判断している。素材剥片は分厚い打面部を持つ横長の不定形剥片で、使用された黒曜石は不純物等の特徴から日東産と見られる。

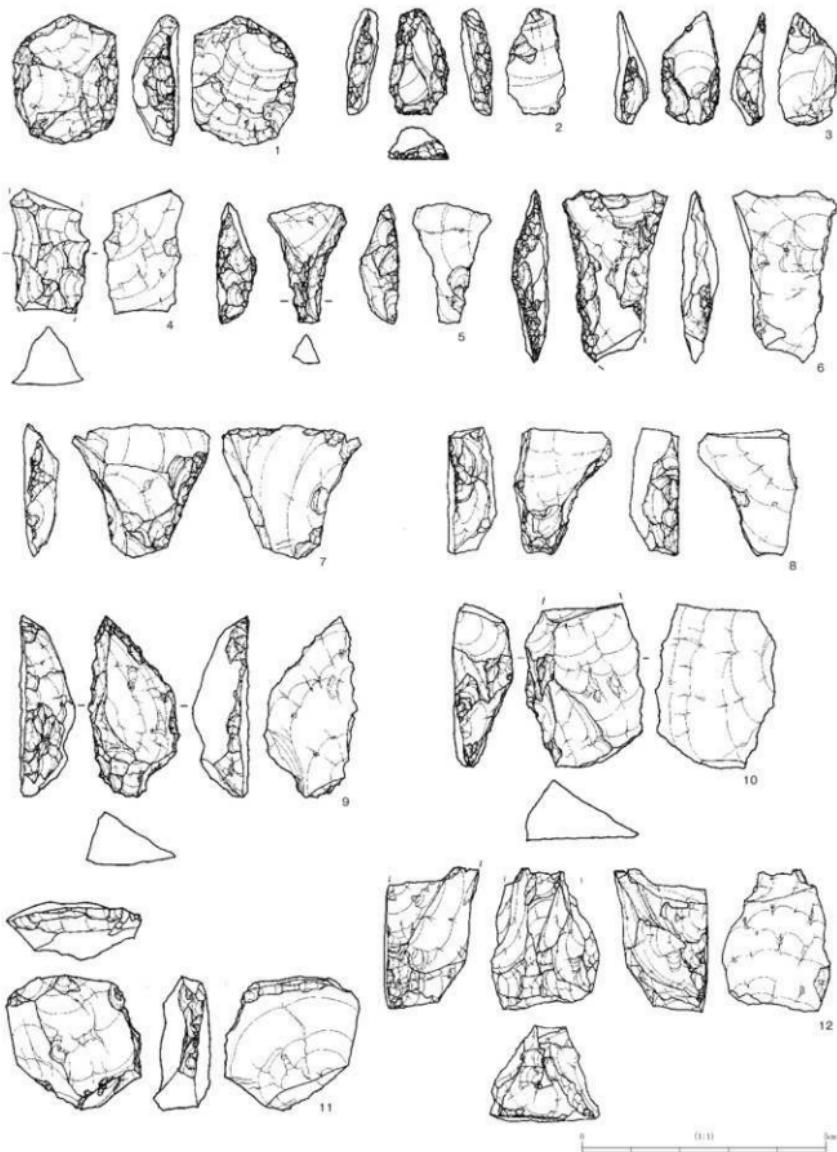
10~12は剥片である。10は、B-27区V層出土で、横長の不定形剥片の打面部に腹面方向から二次加工を施した剥片で、素材剥片の打点部は除去される。先端部が欠損することから、一側縁加工ナイフ形石器の可能性も検討される。剥片の形状からは翼状剥片の感もあり、先の9と類似した剥離の存在が予測される。なお、黒曜石は不純物及び構造紋等の特徴から日東産と見られる。

11はB-28区V層出土で、不定形剥片の端部に3枚の横状剥離痕を持つもので、彫器の可能性が示唆される。なお、横状剥離と交差する右側縁には腹面方向からの二次加工が多数見られる。使用石材は濃灰色のチャートである。

12はC-27区IV層出土で、角錐状石器や三稜尖頭器を意識して図化したが、腹面からの剥離角度が深いことや加撃回数が少ないと見られ、器種認定が難しい。なお、打面は全て除去されていると判断している。使用石材は日東産黒曜石と見られる。

13はB-27区V層出土で、最終剥離面が明確でないが、不定形剥片剥出目的の石核と見られる。なお、図示していないが右側縁部中央と裏面下半が先行する大剥離面に相当することから、素材礫を4分割以上して使用している。黒曜石は不純物等の特徴から日東産と見られる。

なお、本遺跡内で採取されている石器の大部分がC-D-24区とB-27-C-27区の2ヶ所に集中することとなる。加えて、それぞれの石器が完成した石器に限られる事、剥片・碎片等の石器製作を示す痕跡が確認されていないことから、短時間の野営地として利用されたと解釈される。また、V層で示した175(第41図)もこの時期のナイフ形石器の先端部の可能性もある。



第14図 旧石器時代出土遺物

## 2 繩文時代の調査

### (1) 遺構調査の概要

縄文時代の調査は、C-E-14~16区周辺とB-D-23~28区周辺で行った。調査は、平成21年度にC-E-14~16区とB-C-27~28区を行い、平成24年度にB-D-23~26区を行った。

C-E-14~16区周辺では、縄文時代の遺物包含層であるIV層及びV層の堆積は確認されなかったが、集石2基及び落とし穴状遺構5基が検出された。

B-D-23~28区周辺では、B-C-25~26区の谷地形を挟んだ東西の丘陵部にIV層及びV層が比較的良好に残存しており、縄文時代早期の遺構・遺物が検出された。検出された遺構は集石9基、土坑6基である。また、B-D-23~26区では、地層の横転が多く確認されたが、その横転内に礫を伴う事例が数例みられた。遺構ではないが、併せて本節で報告したい。

### (2) 集石

検出面において複数の礫がある程度のまとまりをもつて散布しているものを集石とした。集石は、礫検出後、記録作成及び礫の観察を行い、掘り込みの有無の確認を行った。必要に応じて断ち割り等を行い、掘り込みの確認や掘り込みと礫の関係の観察を行った。

掘り込みを伴うと想定されるものが5基検出されたが、掘り込み内に礫を伴わない、あるいは伴っても数個程度というものばかりであった。

また、B-C-25~26区の谷状地形では、地山に礫が混入しており、傾斜に沿ってある程度のまとまりを持って検出された。それらの礫とB-C-27~28区の集石は、礫の材質・形状・焼成痕の有無により区別を行っている。なお、平成21年度調査の集石については、立面図は1面の作成とした。また、一部記録に不備があつたため、立面図を掲載していないものもある。

### 集石10号(第17図)

検出状況 集石10号は、D-24区のIV層をやや掘り下げた面で、100cm×80cm程度の範囲に礫が密集し、その周辺250cm四方に礫が散在する状況で検出された。

構成礫 集石の構成礫は、砂岩、凝灰岩、安山岩及び頁岩等である。一部に赤色化しているものが見られるが被熱痕跡の無いものが大半を占める。重量250~500グラム程度の他の集石と比較して大型の礫が多く、特に主体部の礫は大型の凝灰岩や頁岩が多く、大きいもので重量が2,000グラムを超えるものも存在する。

掘り込み 検出状況の記録作成後、北東側1/4を断ち割り、掘り込みの確認を行った。その結果、IV層からVI、VII層の漸移層に至るすり鉢状の掘り込みが確認された。埋土はIV層よりもやや明るいシルト質の褐色土であった。

掘り込み内に礫は見られず、また、焼けた痕跡も確認できなかった。

### 集石9号(第18, 19図)

検出状況 D-24区で、集石10号と同じくIV層をやや掘り下げた面で検出された。300cm×270cm程度の範囲に礫が散在する。集石9号の東側には地層横転が見られ、集石9号も一部横転に巻き込まれている。

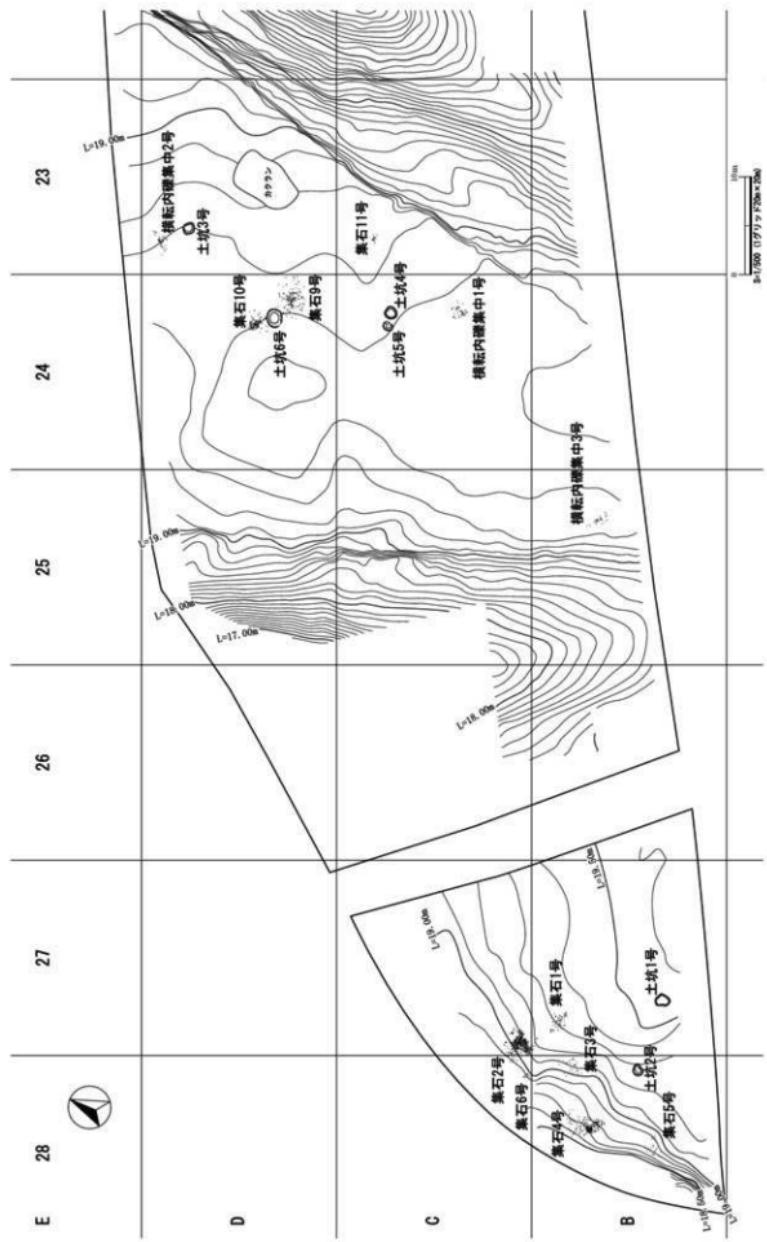
構成礫 集石の構成礫は、安山岩が多く、他に砂岩や頁岩等が見られた。集石10号で多く見られた凝灰岩は少ない。また、集石10号と比較して構成礫は小さく、重量100グラム以下のものが大半を占め、大きなものでも重量1,000グラム程度である。被熱痕跡が観察され、破碎しているものも多い。

地層横転との関係 検出状況の記録作成後、掘り込みの有無及び東側の地層横転との関係を確認するために、北東側1/4の断ち割りを行った。その結果、集石9号形成後に地層の横転があり、それに集石9号の東側の礫が巻き込まれていることが想定された。

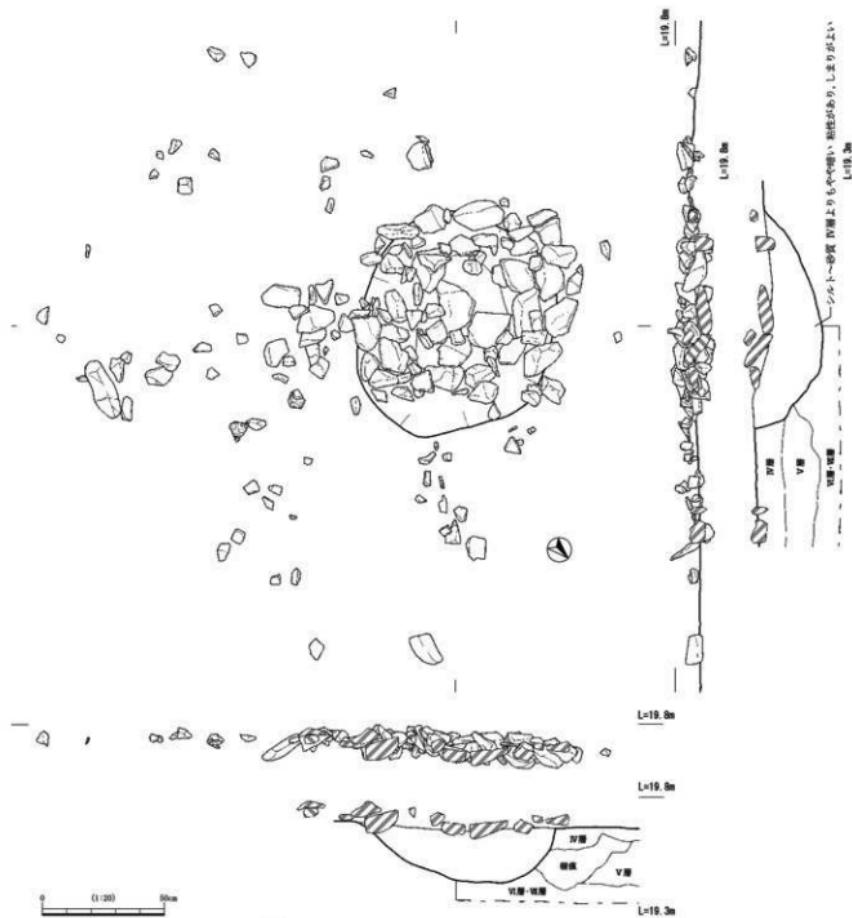
掘り込み 断面の観察の結果、すり鉢状の掘り込みと考えられる堆積状況が見られたため、床面及び壁面を追いかけて掘り込みの検出を行った。掘り込みの平面形は円形で、断面形はすり鉢状を呈する。ただし、上述の地層横転や樹根が見られることから、集石9号に本来的に伴う



第15図 縄文時代遺構配置図(C-E-14~16区)



第16図 繁文時代遺跡配置図 (B-E-23~23~28区)



第17図 集石 10号

ものではない可能性も存在する。

#### 集石 1号 (第 20 図)

検出状況 B-27 区, VI 層上面で検出された。

形状・規模 280cm × 210cm の範囲に礫が散布する。なお、集石に伴う遺物は出土していない。

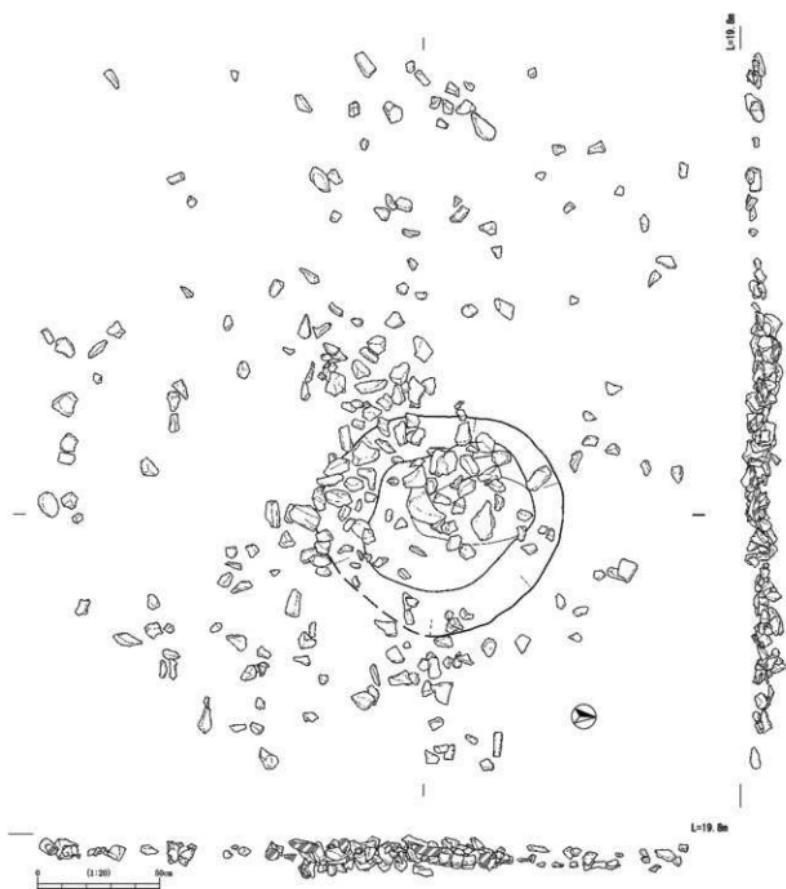
掘り込み 磨取り上げ後、掘り込みの確認を行ったところ、中央部に周辺よりやや黒褐色を呈する埋土を有する

径 100cm の円形で、検出面からの深さ 20cm の掘り込みを検出した。なお、礫は掘り込みの床面より浮いた状態で出土している。

#### 集石 4号 (第 20 図)

検出状況 B-28 区の地形が西側へ傾斜する VI 層上面で検出された。礫も、地形の傾斜に沿って検出された。

形状・規模 405cm × 300cm の範囲に礫が散布し、掘り



第18図 集石9号 (1)

込みが確認された範囲にはやや集中する。遺物は出土していない。立面図は掲載していないが、調査時に礫にはレベル差が見られた。

**掘り込み** 径70cm程度の平面形が不整形な掘り込みを検出した。礫との関係は不明である。

#### 集石2号 (第21図)

**検出状況** C-27区の地形が北西方向へ傾斜するⅦ層上面で検出された。

**形状・規模** 200cm×200cm程度の範囲に礫が密集し、そ

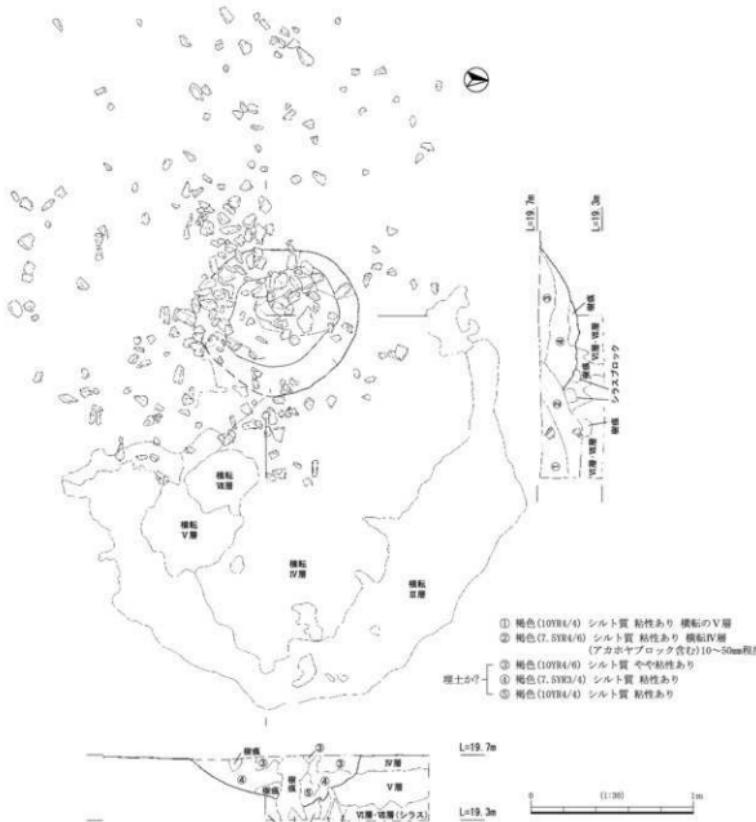
の周囲にも礫が散在する。遺物の出土はない。礫は傾斜に沿って散布しているため、礫間にレベル差がみられる。

**掘り込み** 矽の集中している部分の下で127cm×110cmの掘り込みを検出した。検出面からの深さは48cmである。矽は掘り込みの床面では検出されていない。

#### 集石3号 (第22図)

**検出状況** B-28区、Ⅷ層上面で検出された。B-C-27・28区で検出された集石6基のはば中央に位置する。

**形状・規模** 304cm×223cmの範囲に矽が散在する。掘り



第19図 集石9号(2)

込みは確認できなかった。また、遺物は出土していない。

#### 集石6号(第22図)

**検出状況** C-28区の地形が西へ傾斜するVII層上面で検出された。北東に集石2号が隣接する。

**形状・規模** 88cm×68cmの範囲に礫が密集する。掘り込みは確認されなかった。遺物は出土していない。

#### 集石11号(第22図)

**検出状況** C-23区のV層をやや掘り下げた面で、礫が110cm×80cm程度の範囲に散在する状況で検出された。検出面は集石9号及び集石10号よりも下面となる。

なお、掘り込みは確認できなかった。

**構成礫** 構成礫は、安山岩が多く、他に頁岩や凝灰岩がみられた。また、礫に被熱痕跡は認められなかった。

#### 集石7号(第23図)

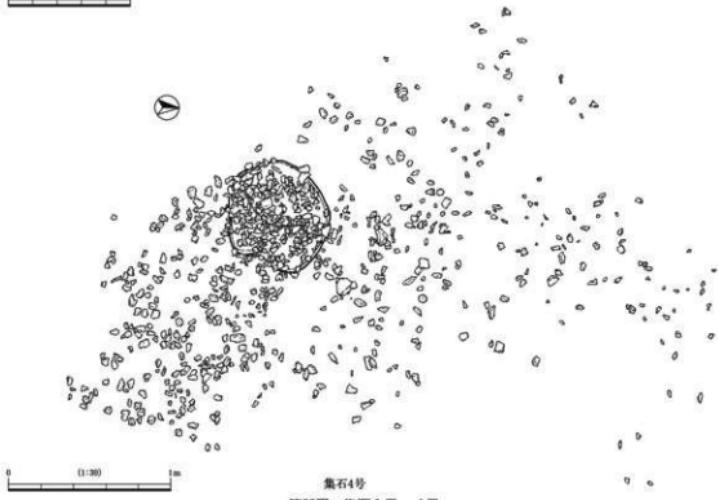
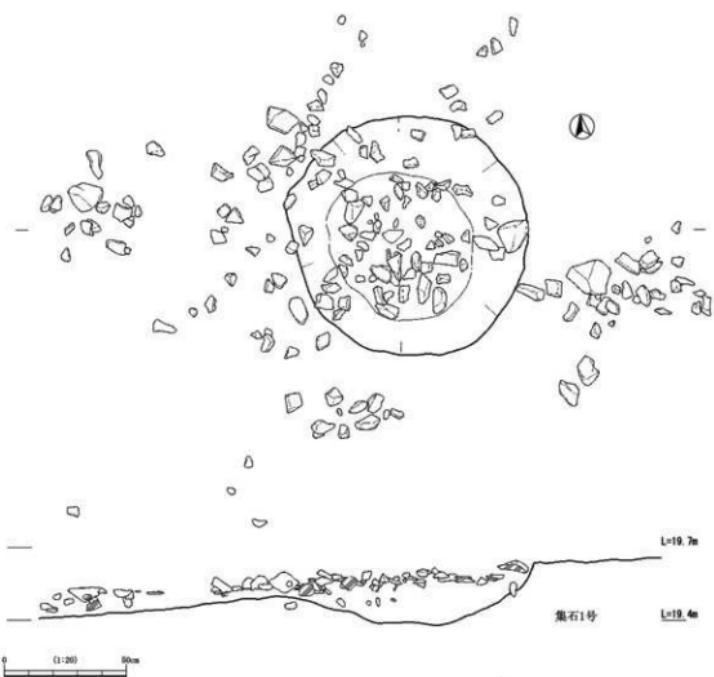
**検出状況** D-16区、VII層上面で検出された。

**形状・規模** 200cm×130cmの範囲に礫が集中し、その周囲にも礫が散在する。遺物は出土していない。

#### 集石5号(第24図)

**検出状況** B-28区、VII層上面で検出された。

**形状・規模** 224cm×190cmの範囲に礫が散在する。



第20图 集石1号·4号

遺物は出土していない。

#### 集石8号(第24図)

検出状況 D-16区、V

層上面で検出された。

形状・規模 80cm×75cm

程度の範囲に礫が集中し、その周囲にも礫が散在する。遺物は出土していない。

#### (3) 土坑

土坑は、埋土がIV層もしくはV層と非常に類似しており、検出が困難であった。

周辺と比較して遺物や礫が集中する箇所や、色調が周囲より暗く微細な炭化物を含む土等が見られた場合、平面的な精査又はサブトレーンチにより掘り込みの確認等を行った。また、必要に応じて断ち割りを行い、逆茂木痕跡の有無の確認を行った。

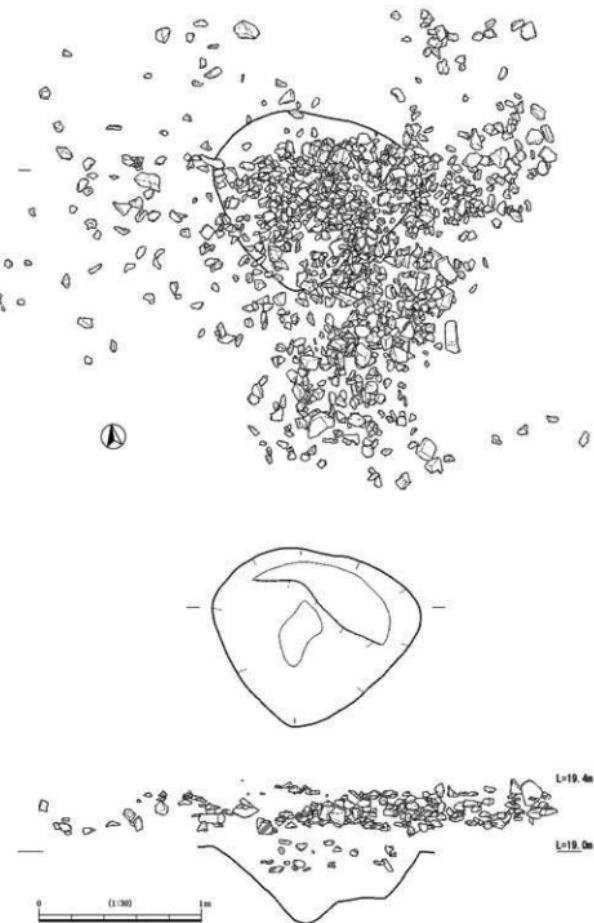
#### 土坑3号(第25図)

検出状況 土坑3号は、D

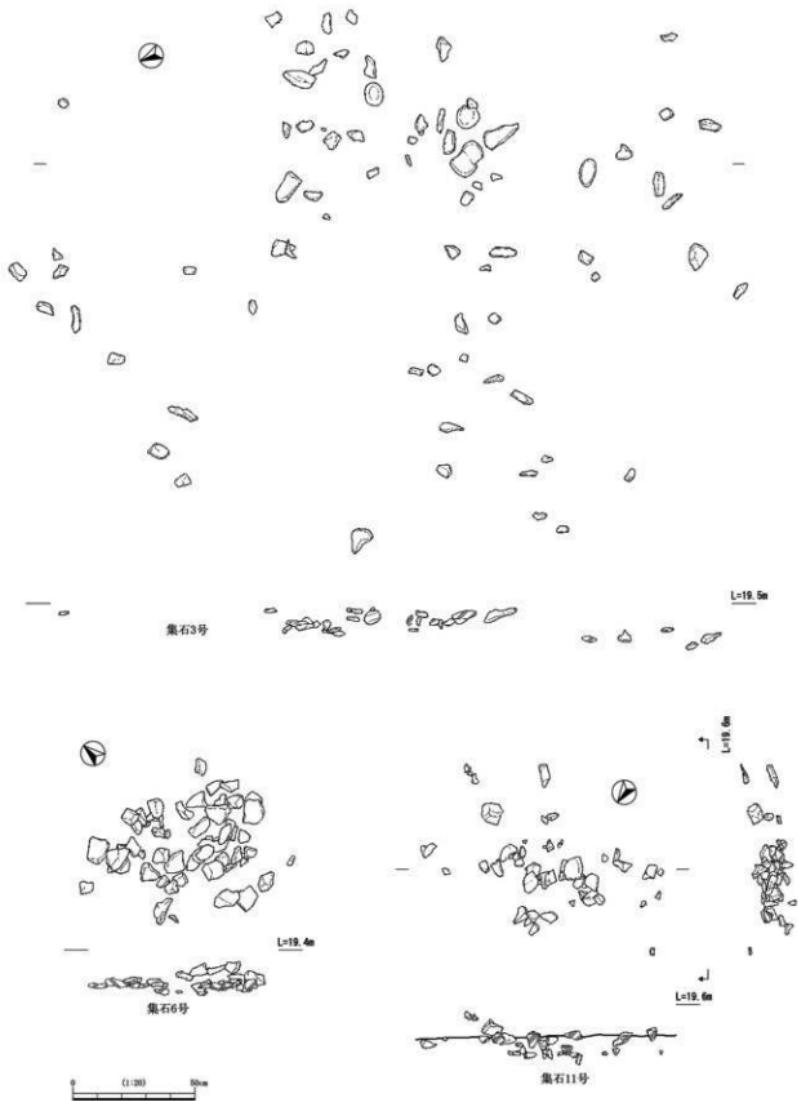
-23区のIV層をやや掘り下げた面で検出された。IV層掘削時に、扁平な砂岩が立位で検出されたため、周辺での遺構の精査を行ったところ、周辺よりもやや色調の暗い土の堆積が確認された。調査は、土坑の中央附近から掘り下げを行い、床面及び壁面の検出を試みた。埋土が検出面の色調と似ていたため、主軸に沿ってサブトレーンチを設定し、掘り込みの確認を行った。

形状・規模 規模は長軸

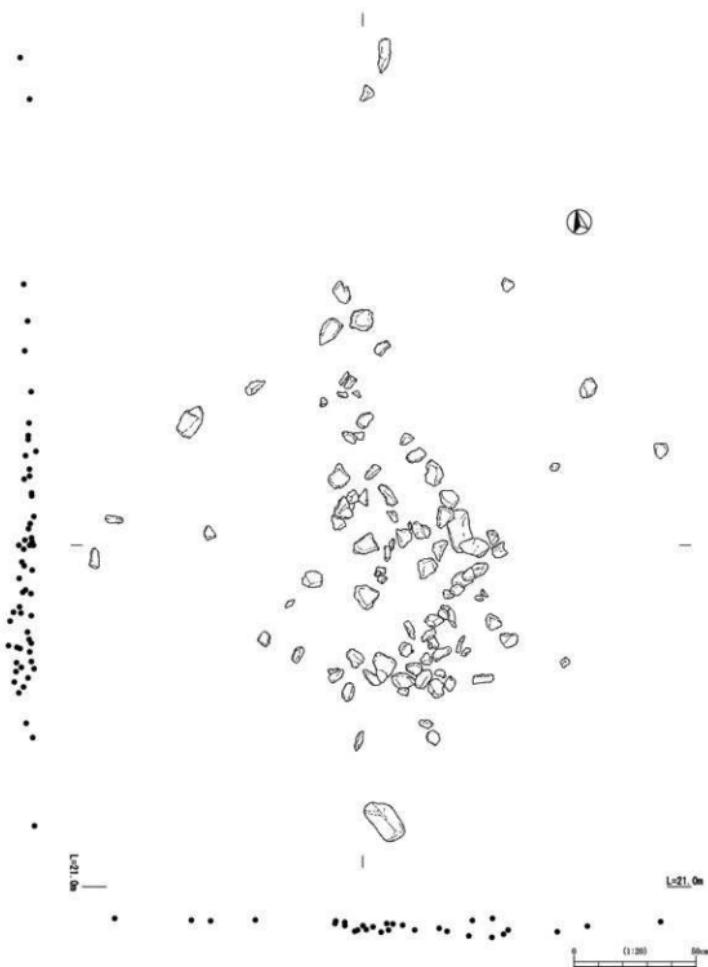
130cm、短軸11cmで、平面形は略円形である。掘り込みは、IV層からVI層の上面まで至る。検出面からの深さは18cmで、断面形は、床面は平坦で、壁面はやや外



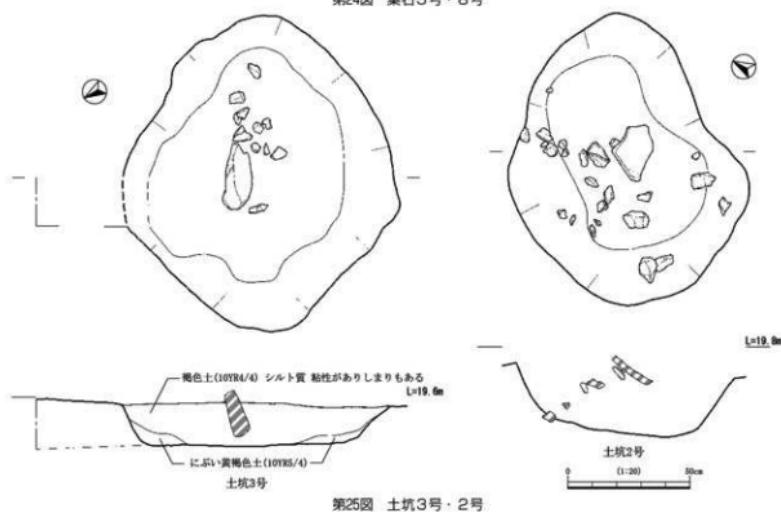
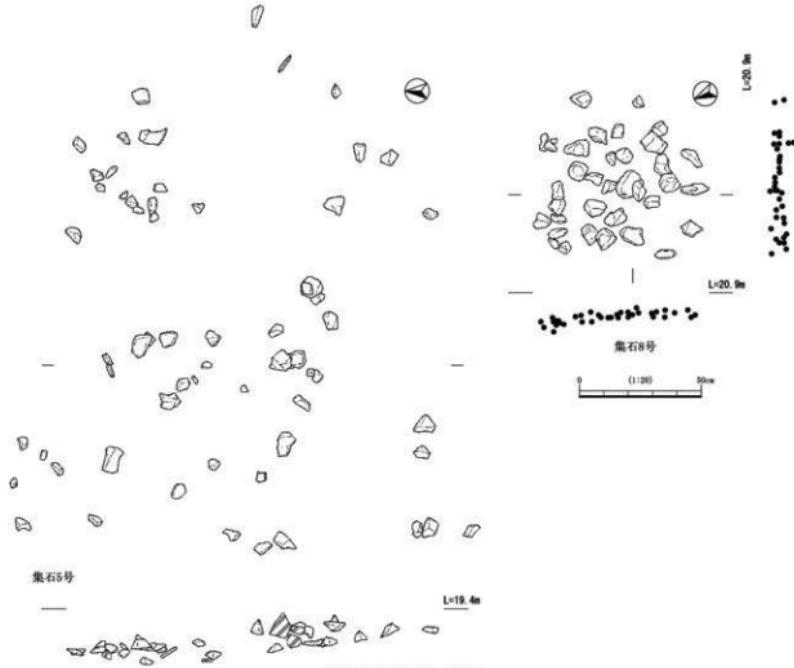
第21図 集石2号



第22图 集石3号·6号·11号



第23図 集石7号



傾し立ち上がる。

**埋土** 埋土は、褐色土で土坑4号に類似するが、黒褐色のブロックを含む点で異なる。埋土中には、上記の扁平な砂岩の他に小砾が11点含まれていた。

#### 土坑2号(第25図)

**検出状況** B-28区のⅣ層で検出された。B・C-27・28区の集石6基の東側に位置する。

**形状・規模** 平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長軸117cm、短軸89cmである。検出面からの深さは30cmである。断面形は床面がほぼ平坦で、壁面はやや外傾する。

**埋土** 埋土は茶褐色土である。また、土坑の中央部を主として、埋土中に礫が混入している。

#### 土坑1号(第26図)

**検出状況** B-27区で、検出された。

**形状・規模** 平面形は不定形を呈する。規模は、長軸146cm、短軸110cmである。検出面からの深さは24cmである。断面形は、床面がほぼ平坦で、壁面はわずかに外傾し立ち上がる。

**礫の状況** 磚は一部が床面から検出されている。

#### 土坑4号(第26図)

**検出状況** C-24区のⅣ層掘削中に検出された。土坑3号と同様に、周囲と比較して色調が暗く粘性のある土が円形に検出された。また、固化はしていないが、検出面付近に礫が数点みられた。

**形状・規模** 規模は長軸118cm、短軸115cmで、平面形は略円形である。掘り込みは、Ⅳ層から一部Ⅶ層にまで至り、検出面からの深さは19cmである。断面形は、床面が平坦で、壁面は八の字状に立ち上がり、すり鉢状を呈する。

**埋土** 埋土は、微細な炭化物をわずかに含む黄褐色土及び明褐色土がレンズ状に堆積する。埋土中に遺物は含まれなかつた。

#### 土坑5号(第26図)

**検出状況** 土坑5号は、C-24区で検出された。東側に土坑4号が位置する。土坑5号は平面的な遺構精査では確認できず、土坑4号を断ち切った際のトレーナーの西壁で掘り込みが確認された。したがって、遺構の東側は消滅している。

**形状・規模** 規模は長軸100cm、残存する短軸65cmで、平面形は東西方向に潰れた楕円形である。掘り込みは、Ⅳ層からⅦ層にまで至り、検出面からの深さは27cmである。断面形はすり鉢状を呈する。

**埋土** 埋土は、土坑4号と同じく微細な炭化物を含む黄褐色土及び明褐色土がレンズ状に堆積する。また、埋土中に遺物は含まれなかつた。

#### 土坑6号(第27図)

**検出状況** D-24区のV層上面で検出された。検出面付近では、周辺と比較して土器や礫がある程度まとめて散布していた。遺物取り上げ後、遺構の精査を行ったところ周囲より色調の暗いシミ状の広がりが確認されたため、サブトレーナーを設定し、掘り込み等の確認を行った。

**形状・規模** 規模は長軸182cm、短軸151cmで、平面形は楕円形である。検出面からの深さは25cm程度で、断面形は、床面は平坦で、壁面は八の字状に立ち上がる。

**埋土** 埋土は、微細な炭化物を含む褐色土及び暗褐色土が北東方向から流れ込んで堆積した状況が確認された。

**遺物** 埋土から土器が3点出土し、そのうち1点を報告する。1063は、(5) 遺物で示す分類の3類(中原式土器)に相当する。胴部片で、外面ともに丁寧なナデ調整が施される。胎土には角閃石や小砾が多く含まれる。

#### (4) 落とし穴状遺構

落とし穴状遺構は、C-16区で1基、D-15区で2基、D-16区で1基、E-15区で1基を検出した。一般的な土坑とは逆茂木痕跡の有無で区別している。全て中央に1本の逆茂木を有するタイプで、平面形は1号と5号が略円形、2号~4号が略円形を呈する。調査は、まず半截し、その状態での記録を作成し、その後断ち切りを行い、スライスすることで逆茂木痕跡の把握を行った。

#### 落とし穴状遺構1号(第28図)

**検出状況** D-16区のⅦ層上面で検出した。

**形状・規模** 平面形は略円形を呈する。規模は、長軸105cm、短軸69cmである。検出面からの深さは72cmである。断面形は床面がほぼ水平で、壁面はやや外傾し、立ち上がる。中央部に径15cmの逆茂木の痕跡が残る。

**埋土** 埋土はV層で、逆茂木痕跡には黄色のバミスを含んだ乳白色土が堆積する。

#### 落とし穴状遺構4号(第28図)

**検出状況** D-15区のⅦ層上面で検出した。

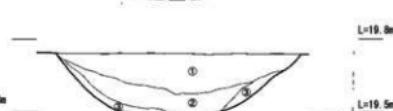
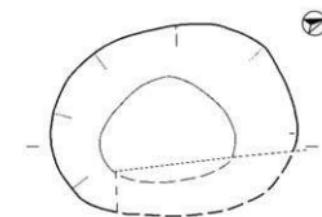
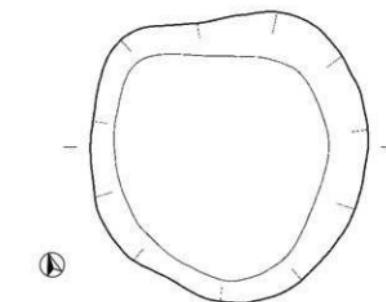
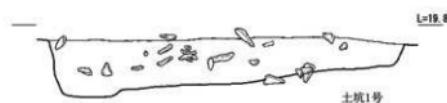
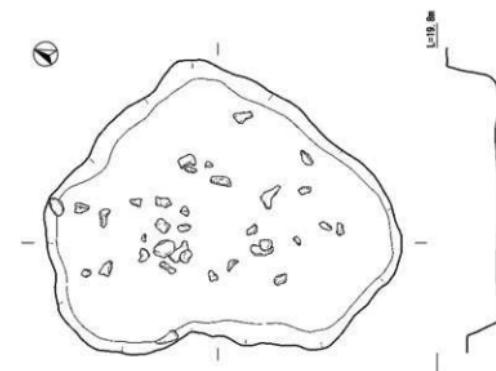
**形状・規模** 平面形は略円形を呈する。規模は、長軸120cm、短軸111cmである。検出面からの深さは57cmである。断面形は、床面がほぼ水平で、壁面はやや外傾する。中央部に径15cmの逆茂木の痕跡が残る。

**埋土** 埋土はV層の暗茶褐色土である。

#### 落とし穴状遺構3号(第28図)

**検出状況** C-16区のⅦ層上面で検出した。

**形状・規模** 平面形は略円形を呈する。規模は、長軸137cm、短軸126cmである。検出面からの深さは90cmである。断面形は、床面がほぼ水平で、壁面はやや外傾し立ち上



- ① 黄褐色土(10YR5/4) シルト質 黄褐色バニスをごく少含む  
無機鉱化物を含む よくしまる
- ② 明褐色土(7.5YR6/4) シルト質 黄褐色鉱化物をごく少含む ①よりはしまらない
- ③ にじみ黄褐色土(10YR5/4) シルト質 一部に暗褐色ブロック混じる (V層)
- ④ にじみ黄褐色土(10YR4/3) シルト質 中や粉性あり (V層)
- ⑤ 暗色土(10YR4/4) シルト質 やや粘性あり よくしまる 一部に暗褐色ブロック入る

土坑5号

- ① 黄褐色土(10YR5/4) シルト質 黄褐色バニスをごく少含む (IV層ベース) よくしまる
- ② 明褐色土(7.5YR6/4) シルト質 黄褐色鉱化物をごく少含む ①よりはしまらない
- ③ にじみ黄褐色土(10YR5/4) シルト質 一部に暗褐色ブロック混じる (V層)
- ④ にじみ黄褐色土(10YR4/3) シルト質 中や粉性あり (V層)
- ⑤ 暗色土(10YR4/4) シルト質 やや粘性あり よくしまる 一部に暗褐色ブロック入る

土坑4号



第26図 土坑1・4・5号

がり、上部でラッパ状に開く。中央部に径10cmの逆茂木の痕跡が残る。

埋土 V層を基調とする。

#### 落とし穴状遺構2号（第28図）

検出状況 D-15区のⅦ層上面で検出した。

形状・規模 平面形は略円形を呈する。規模は、長軸132cm、短軸120cmであり、検出面からの深さは90cmである。断面形は、床面はほぼ水平で、壁面はやや外傾する。中央部に径23cmの逆茂木の痕跡が残る。

埋土 埋土はV層をベースとし、一部にVI層がブロック状に混じる。逆茂木痕跡には黄褐色土が堆積する。

#### 落とし穴状遺構5号（第28図）

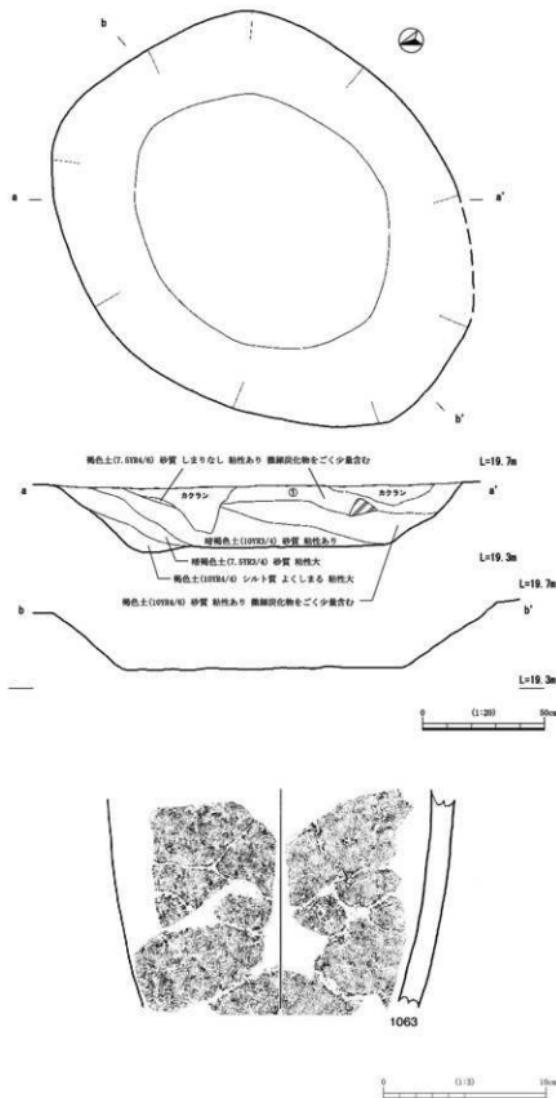
検出状況 E-15区のⅦ層上面で検出した。地山が削平されているため、残存状況は悪い。

形状・規模 平面形は略円形を呈する。規模は、長軸150cm、短軸107cmであり、検出面からの深さは72cmである。断面形は、床面はほぼ水平で、壁面は垂直に立ち上がる。中央部に径27cmの逆茂木の痕跡が残る。

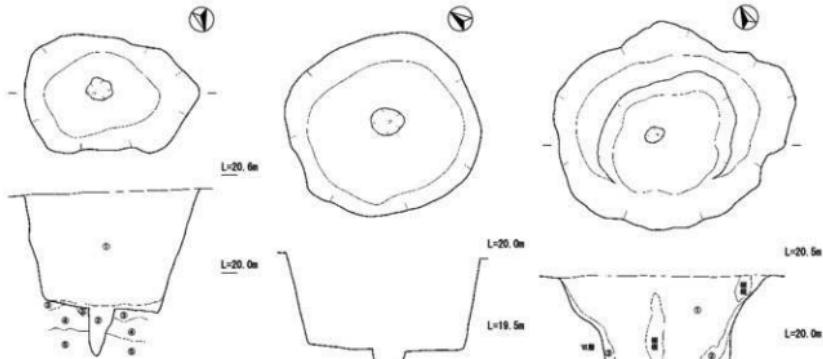
埋土 埋土は、V層をベースとする暗茶褐色土～灰黄色土がレンズ状堆積を呈する。

#### 地層横転内の砾の集中について (第29図)

横転内礫集中1号、横転内礫集中2号及び横転内礫集中3号は、地層の横転内に砾が集中して検出された。これらの砾は、いわゆる集石なのか、もともと散在していた砾が地層の横転に巻き込まれたものなのか、或いは、地層横転後のある時期に自然に散布したものなのかは判断できなかった。



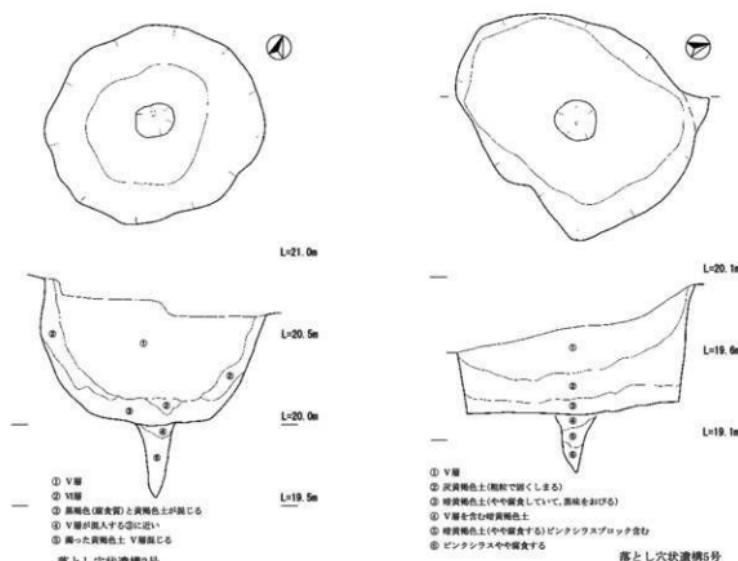
第27図 土坑6号及び出土遺物



落とし穴状造構1号

落とし穴状造構4号

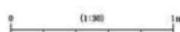
落とし穴状造構3号



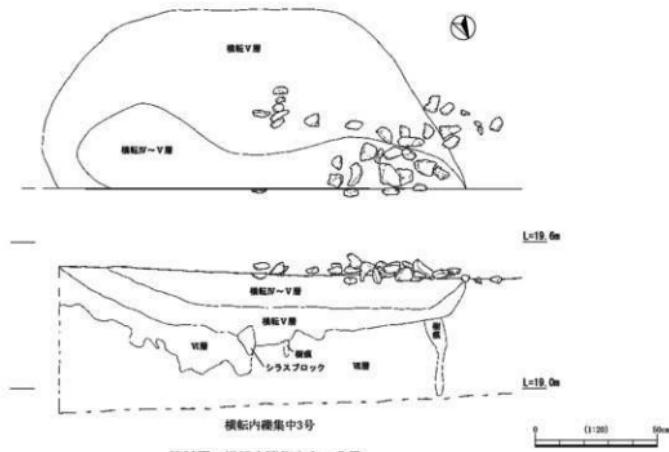
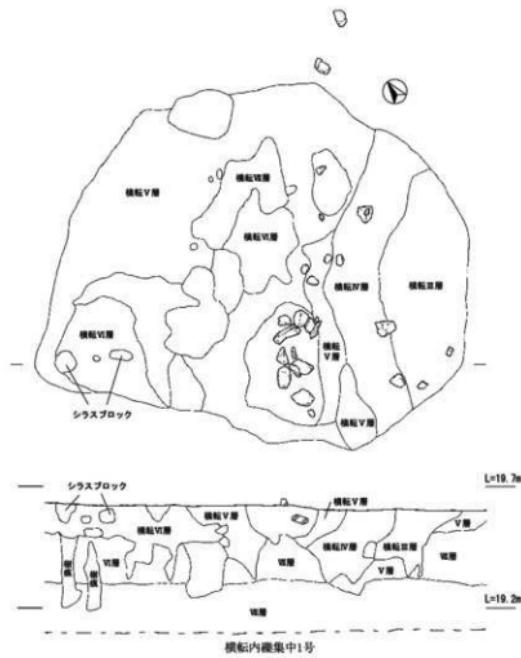
落とし穴状造構2号

落とし穴状造構5号

落とし穴状造構5号



第28図 落とし穴状造構1～5号



第29図 横転内縫集中1・3号

## (5) 遺物

### ア 土器

縄文時代早期を中心とした土器が出土しており、それらを中心に 14 類に区分した。

#### 1類 加栗山式土器 (第 30 図 14・15)

14 は器壁が薄く、内面整形を縱方向に工具でナデしており、器面には縱方向に貝殻腹縁刺突文を施す。15 も縱方向の貝殻腹縁刺突文が確認できる資料で、14 と同種の円筒形土器の下位に相当すると見られる。

#### 2類 石坂式土器 (第 30 図 16・17)

16 は口縁端部が外反し、口唇部は貝殻腹縁部で横に刻み、外反部には貝殻腹縁刺突文を斜位に施す。胎土に 0.1cm 前後の白色鉱物に加え、0.3 ~ 0.5cm 程の小穢が含まれる。17 の口縁部は直行し、部分的に瘤状にふくらむと見られる。胎土には小穢は認められないが、白色鉱物は多量に含まれる。

#### 3a 類 中原 I 式土器 (第 30 図 18 ~ 20, 23)

18 ~ 20 は「貝殻腹縁による連続刺突文」が、口縁部近くの狭い範囲に施されるもので、これら施文形態から中原 I 式土器として一括した。これらの共通する特徴は施文方向が縱位であることが指摘できる。

18 の口縁部は若干外反する可能性がある。19 の口唇部は平坦面で、口縁部直下に貝殻腹縁部を斜めに平行して刺突し、刺突文間の下位に殼頂部を斜めに刺突する。20 は口唇部が失われるが、貝殻腹縁部をくの字に刺突する。23 は貝殻腹縁を規則的に矢羽根状に刺突したもので、口唇部は丸みを成す。

#### 3b 類 中原 III 式土器 (第 30・31 図, 21・22, 24 ~ 33, 35 ~ 39)

「貝殻腹縁による押引文」が、口縁部から胴部上位に施文されるもので、これらの施文形態から中原 III 式土器とされるものを一括した。いずれも口縁部形状の残される資料で、小破片資料については図化に努めた。

21 の器壁は 0.6cm とやや薄めで、口縁部直下では鋸歯状に押引き、その下位では横方向に直接的に押引き特徴が見られる。22 は横方向に直線的に、24 も横方向の直線的であるが押引き間隔が密に行われる。25 は石英粒や輝石、角閃石を含み、丁寧な内面調整で光沢を帯びる。27 は浅く押引き、28 では口縁部直下 1cm 程の無文帶を残して微細な押引きが施され、器壁も 1.2cm と厚く、口径も大きくなるものと見られる。胎土の輝石と角閃石が特徴的で、0.3 ~ 0.5cm 程の小穢の混入も目立つ。29 は、口縁部がやや内傾する形状が復元される。内面調整は丁寧なナデで、胎土の輝石と角閃石は共通している。なお、26 は内面にも押引文を施すもので、口唇部が尖り気味となり、頗りには若干疑問が残る。

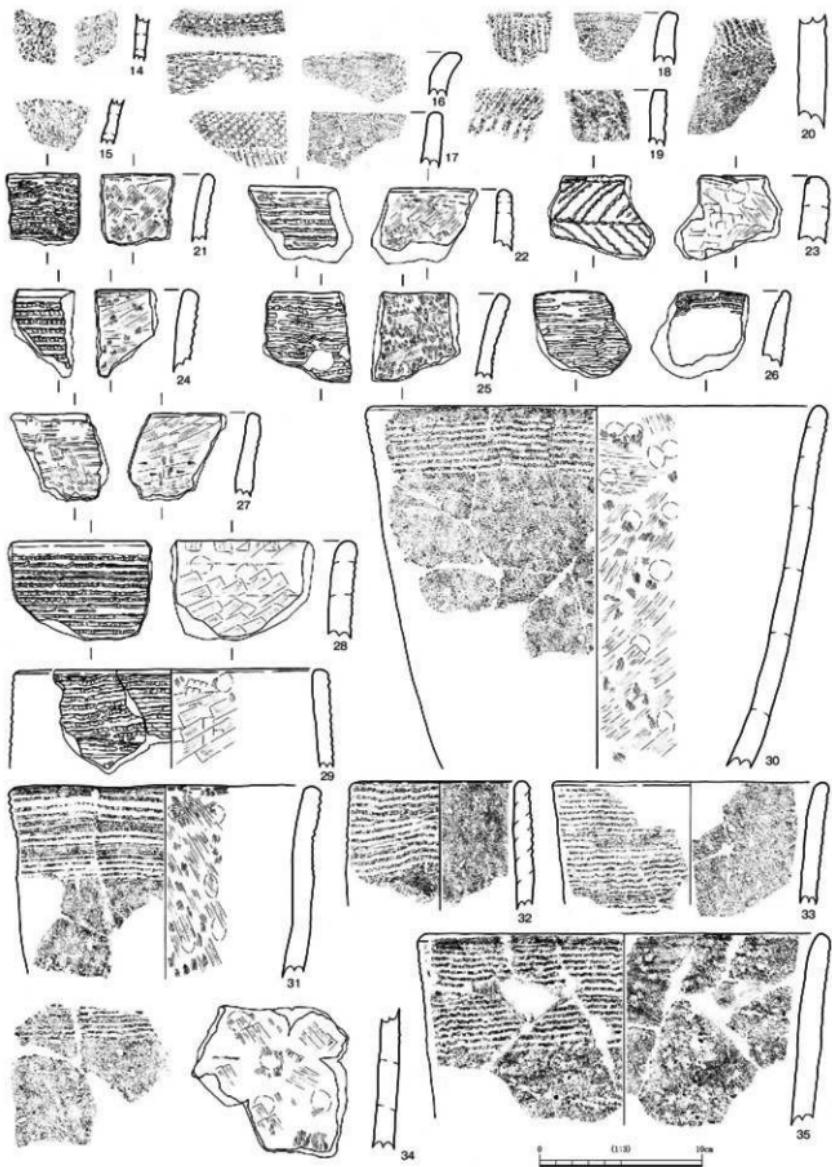
30 は重量感があり、胎土に含む白色鉱物が減少する反面、角閃石が増加する。施文は 8 筋の貝殻腹縁押引文を

口縁部に集中し、外面では工具ナデ、内面では指頭圧痕やミガキ状のナデ等の丁寧な仕上げが見られる。復元口径は 28.6cm で、口径が最大となる形状を示し、輝石や角閃石の増加とともにやや大粒の白色小穢が胎土に含まれているが、底部形状は明らかでない。31 は、器面は橙から明褐色と赤く、白色小穢及び白色鉱物を多量に含み、特に内面はミガキ状のナデで丁寧に仕上げ、部分的には光沢が残されている。押引文は貝殻腹縁を重複する傾向が認められる。32 は 11.5cm と口径は小さく、口唇部は丸い。31 と同様の特徴を持つが、より重量感があり、胎土に含む白色鉱物が減少する反面、角閃石等の黒色鉱物が多い。

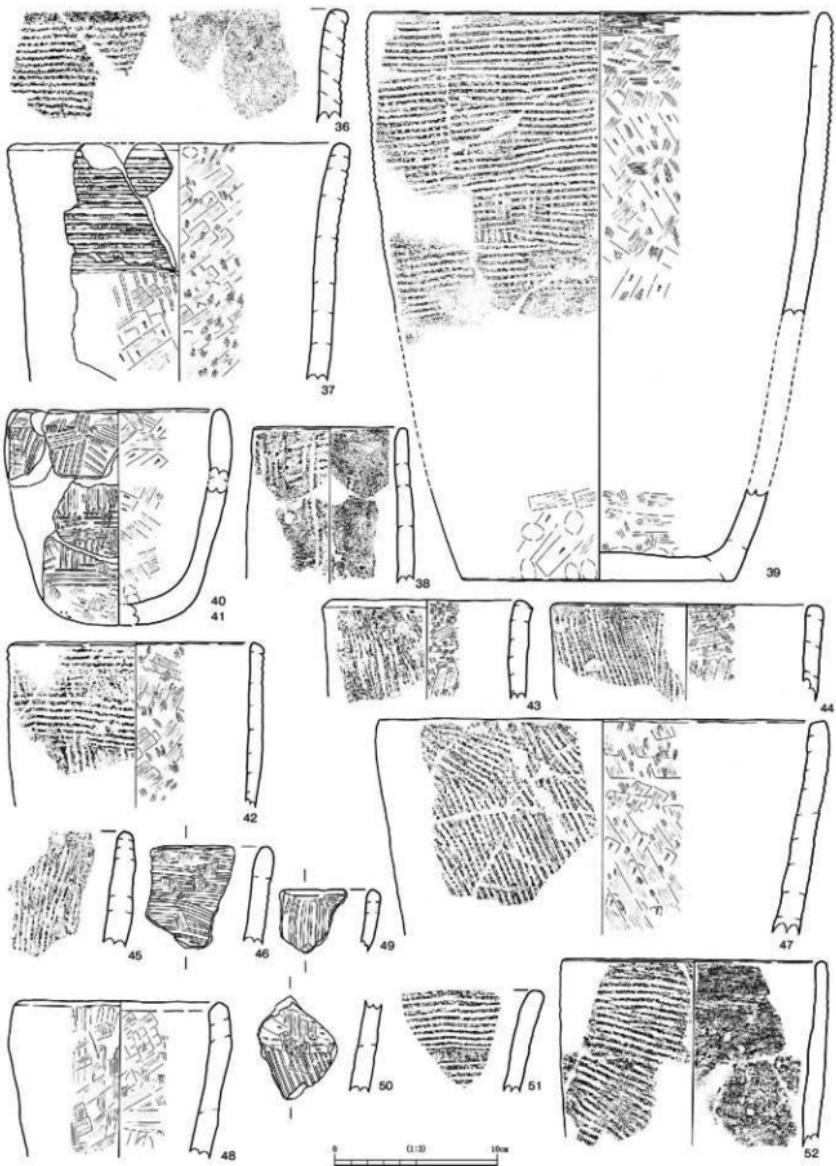
33 の器壁は若干薄く、筋幅が若干狭くなる。34 は胎土等から 31 と同一個体と見られ、内外面共に指頭圧痕やケズリやナデ、ミガキ等の丁寧な調整が見られる。

35 の復元口径は 25.5cm で、器壁は 1.5cm と厚く、含まれる白色鉱物は 0.5cm を超すものも併せて、石英粒が目立つ。36 はやや大振りの傾向が見られ、白色鉱物と角閃石の混入が目立つ。内面調整は横方向の丁寧なナデ仕上げが見られる。37 は石英粒や輝石、角閃石が多量に含まれ、光沢のある器面を呈すが、0.3 ~ 1.0cm 程の小穢が含まれる。38 は円筒形で、口縁部より胴部径が大きい。器壁は厚く、施文帯以外は工具ナデの後、指頭圧痕が残るが、丁寧なナデで器面調整を行う。5 筋の腹縁部を口縁部に平行に横方向に施した後、さらに 2 筋の腹縁で縱方向に 10 分等分したと見られる。輝石や微細な石英粒を中心に、角閃石の含有も目立つ胎土で、一部では光沢を保ち、口縁部を中心に煤状炭化物が付着する。なお、9.5cm の口径が復元でき、類似する 32 では押引文を口縁部に沿って周回するが、38 では横方向の条線状に周回する押引文を直行する条線で部分的に断ち切る。

39 は貝殻腹縁条痕文を広範囲に施したもので、胴部と底部は直接接合していないが、同一個体と判断し、その復元図を試みた。その結果、円形で平坦な接地面の底部から緩やかに開きながら立ち上がる円筒形土器で、底部を 1 とすると、口径と器高は 1.7 : 2.1 の比率となる。具体的な復元では口径 28.8cm、底径 16.8cm、高さ 35.0cm で、器壁の平均値は 1.3cm と厚く、内面は斜めに形成した後、口縁部付近から口唇部にかけては丁寧にナデで、口唇部は丸く仕上げる。胴部上部から口縁部にかけては、6 筋程の貝殻で横方向の条痕文が充填されるが、胴部下位では縱方向の条痕文で横方向の条痕文を重ねた部分も見られ、一見押引文の伝統を繼承している可能性を感じられる。底部は安定した平底で、胴部より小さく準備した平坦な接地面を胴部との間に粘土を織ぎ足し仕上げている。総じて器面は赤く、胎土に含まれる最大 0.3cm 程の白色鉱物や石英粒や輝石、角閃石が印象的で、併せて 37 同様光沢のある器面を呈している。



第30図 縄文時代の土器 (1)



第31図 純文時代の土器 (2)

### 3c類 中原V式土器（第31図40～52）

丸底で「胴部器面の広い範囲に貝殻腹縁による条線文が施される」ものを、中原V式土器とした。

40, 41は石英粒や黒色鉱物を多量に含む胎土で、中には0.5cm程の小礫も認められる。なお、40が41の口縁部の可能性が高いことから、図上復元を試みた。その結果、口径13.0cm、高さ13.3cmの小型の丸底鉢形土器が復元された。器壁は1.3cmと厚く、貝殻腹縁による条線文は緩から斜め方向施文が先行し、胴部下位の横方向はそれらに直行して重ねられる。底部及び内面ともに丁寧にナデで仕上げている。

42では上部に横方向の貝殻腹縁条線文帯を6.0cm程の幅で施す。その下部に縱方向の貝殻腹縁条線文を施すが縱方向が先行する。口径は15.0cmと小振りであるが、器壁は1.0cmと厚い。口唇部は外に傾き、浅黄色の胎土は白色鉱物や赤色粒、角閃石を含み、内面調整は指頭圧痕や丁寧なナデにより仕上げている。43の復元口径は13.0cmと小さく、44は16.6cmとやや大きく、形状は円筒形を呈す。45の口縁部は丸く、やや水平性に欠ける。3点とも縱方向に施文し、43では白色粒の含有が目立つ。47は復元口径27.6cmと最大で、開きながら立ち上がる形状が復元される。器壁も1.4cm程と厚く、小礫や白色鉱物、角閃石の含有が特に目立つ胎土で、内面はナデやミガキで仕上げ、浅黄色の器面を呈している。51, 52は横方向の貝殻腹縁条線文で、52では16.6cm程の口径が復元され、47, 52では明瞭な条痕文が横方向から斜めに施される。48は縱方向の条痕文に工具を縱方向に重ねて、ナデ消しているもので、口縁部はやや内傾気味に立ち上がり、器壁は1.3cmと厚い。

### 4類 下剥峯式土器（第32図53・54）

53は貝殻腹縁部を並行に重ねて刺突（横位の貝殻腹縁刺突文線文）したものである。口唇部は平坦で、器壁は0.9cm程と薄手であるが、粘土帯接合痕が観察できる。54も同類であると考えられる。

### 5類 下管生B式押型文土器（第32～34図）

下管生B式押型文土器に属するもので、格子目押型文をa、梢円押型文をb、山形押型文をcとした。

### 5a類 格子目押型文（第32図55～59）

外面に格子目押型文を持つもので、55, 56が口縁部、57, 58が胴部、59が底部資料である。

55の口縁部の角度については推定の域を出ないが、56では16.4cmの口径が復元でき、口縁部方向に直線的に開きながら立ち上がる形状が想定できる。なお、直接は接合しないが、59の平底が存在する。これは、橙色の器面や胎土等は類似する点が多いことから、同一個体の可能性がある。なお、横位の押型施文と見られ、内面はミガキ状にナデで平滑に仕上げている。57については施文具が明確ではないが、同列に配置した。

### 5b類 棚円押型文（第32図60～74・第33図75～79）

外面及び口縁部周辺に梢円押型文を持つもので、外面には横位施文（60～62）と縱位施文（63・64）がある。口縁内面では、横位施文（63～65、67～70）、原体条痕+梢円横位施文（60, 76）、原体条痕+山形横位施文（61, 73）、無文（62, 66, 71）、原体条痕刺突文（72, 74）が認められる。

60は緩やかに外反する内面に原体施文を施し、61では口縁端部がわずかに外反する内面の狭い範囲に原体施文が見られる。62, 75も胴部下位資料と判断した。62の白色鉱物の含有は少ない。75では輝石類が多く含まれ、縱方向のミガキ状の丁寧なナデで仕上げられている。63は外面が縱位、内面が横位施文で、口縁部が大きく外反する形状で、25.6cm程の口径が復元される。破片資料であるが重量感がある。64は63と形状も同様で非常に類似する。

65の復元口径は36.2cmで、口縁部から肩部に縱位押型文、肩部から胴部に半節繩文を施し、外面施文は2cm幅ほどの間隔で、縦にナデで帶状にナデ消す。68, 69にも同様な手法が見られ、胎土等の特徴から同一個体と思われる。

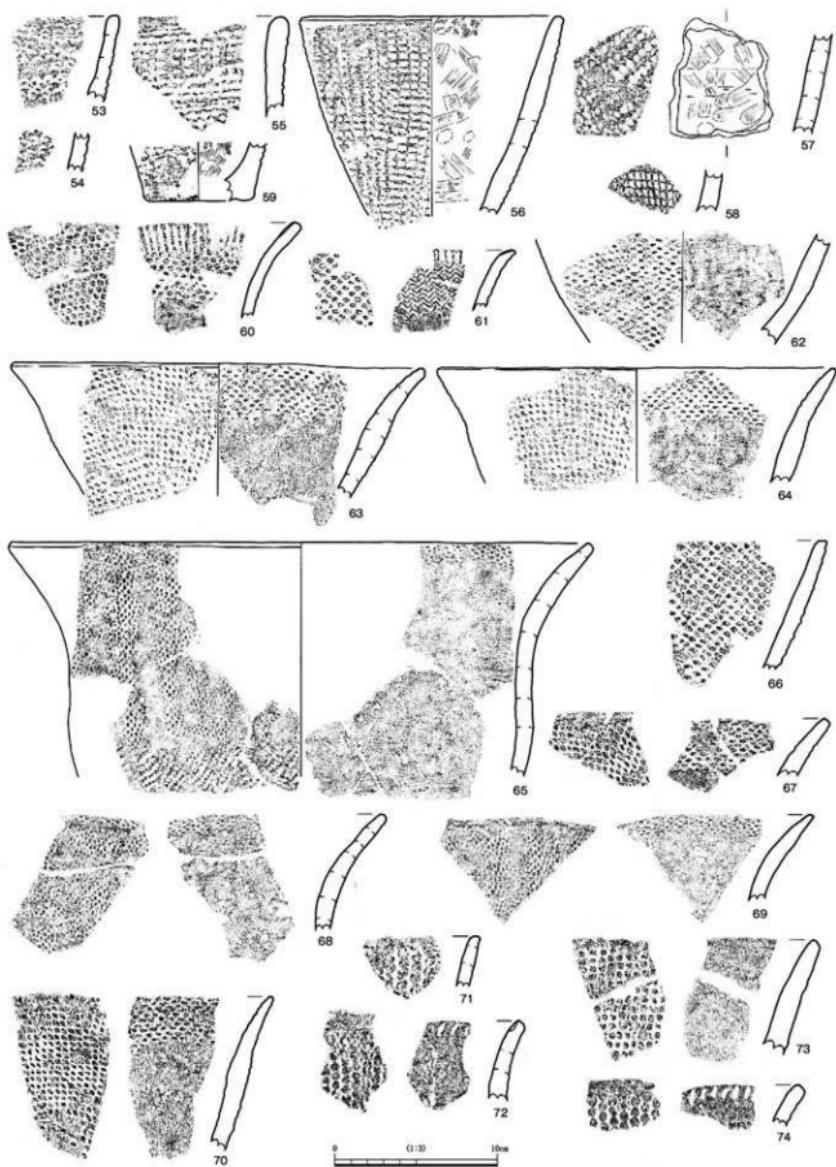
なお、65の梢円押型文は極小で、器面は砂粒の主体の胎土で粗いが、内面調整は丁寧にナデで仕上げている。66は後述の75に近く、梢円間が明瞭で、施文も明瞭に残される。70は、0.3cm前後の大量の石英粒や長石を含む砂質性の高い胎土を使用したもので、器面は他と比較して粗い。72, 74の原体条痕刺突文は内面端部に深く明瞭に刺突する。75, 77は胴部下位で、75の内面調整はヘラ状工具で丁寧なナデ調整を行い、77は横位施文で胎土に含まれる大量の白色鉱物が特徴的である。

78は平底である。79は粘土板の貼り付けによる円盤状の形状を呈す。限られた底部での判断は難しいが、77の胴部下位資料からは、丸底の存在も想定される。

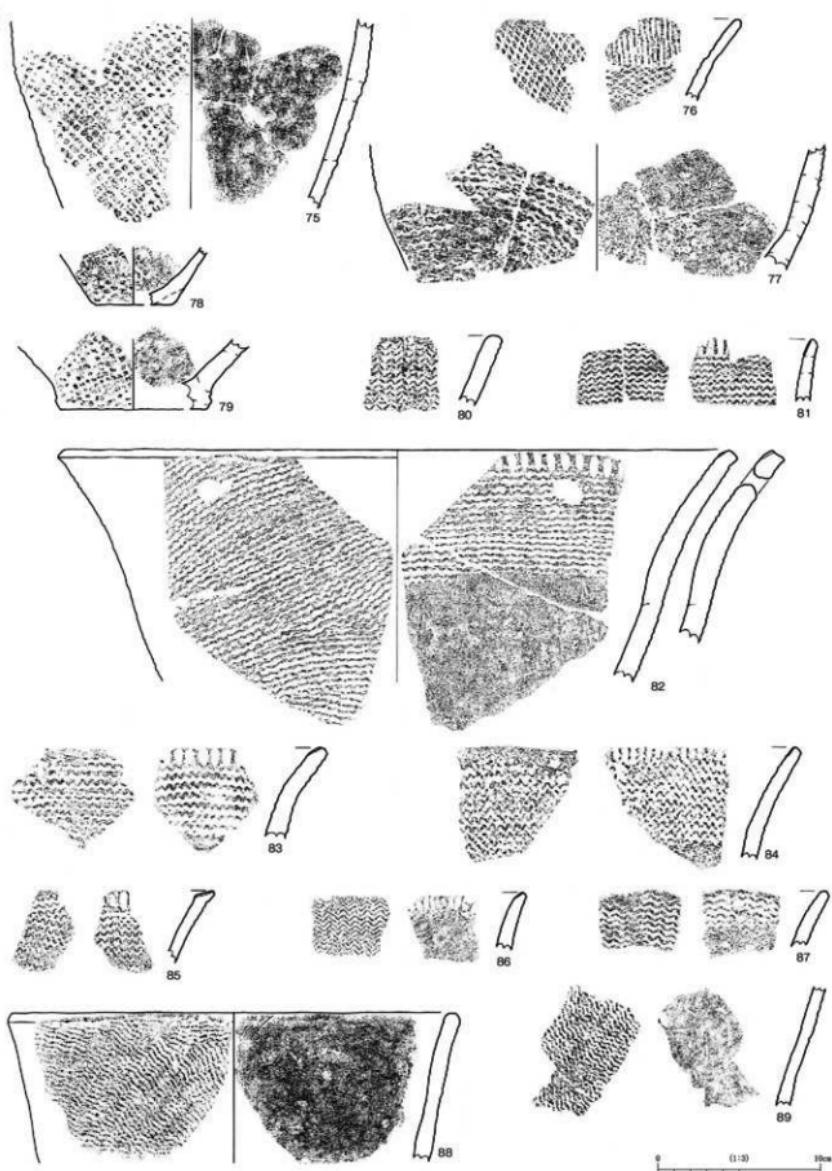
### 5c類 山形押型文（第33・34図80～108）

外面及び口縁部周辺に山形押型文を持つもので、外面には横位施文（80～94）と縱位施文（95～98, 100）があり、99では磨削手法が確認できる。一方、内面には原体条痕（86, 93）や横位施文（87, 101）、原体条痕+山形横位施文を併用したもの（82～85, 95～98, 100, 102）及び無文（88, 94, 105）がある。

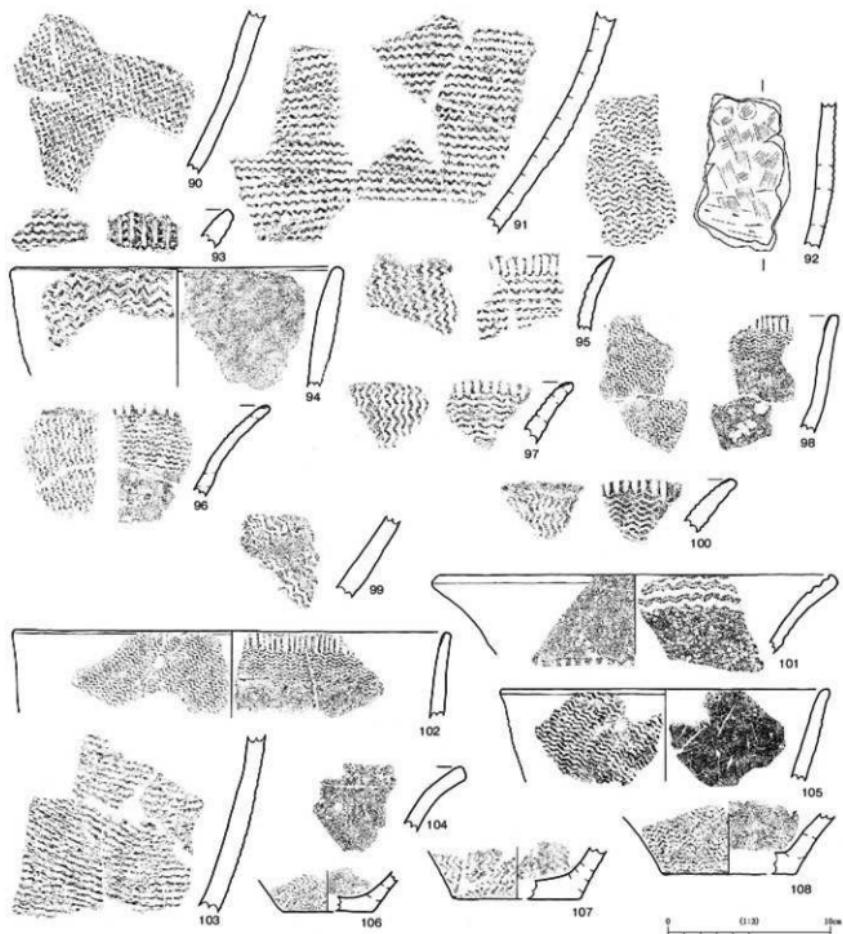
82の復元口径は42.0cm程で、口唇部は平坦になる。器壁は1.5cm、補修孔はそれぞれ内外方向からの回転穿孔で行い、お互いの中心はズレる。内外面ともにぶい黄橙色で、内面は工具で丁寧なナデ調整で、外面上部には煤状の炭化物が残る。83の復元図は提示していないが27.0cm程の口径で、ぶい黄橙の特徴的器面を呈している。なお、91との同一個体の可能性が高く、91の復元からは内径上位が42cm程の大型品と想定される。



第32図 繩文時代の土器 (3)



第33図 純文時代の土器 (4)



第34図 繪文時代の土器(5)

85, 86の原体施文は内面の狭い範囲に施す。92は丁寧な内面調整を示す資料で、ミガキ状のナデで調整を重ねた仕上がりが確認できる。90も石英粒や長石、輝石及び角閃石を多量に含む胎土である。

94の原体は最大規模で、大量に含む白色鉱物と輝石、角閃石を大量に含むため光沢のある器面が特徴である。また黒曜石のチップも胎土中に確認できる。なお、内面は指頭等で横方向に丁寧にナデて仕上げている。ま

た、器壁が厚い。93の内面は横位施文の上位に、原体施文を重ねている。96の口縁部は大きく外反し、器壁も0.8cmと薄く、外面の継位、内面の横位施文とも小型で端正な施文が見られる。石英粒等の輝石を多量に含む胎土を使用する。98の施文具は密で細かいものが用いられ、102と酷似する。なお、102と同一個体の可能性もある。103は天地不明である。101は内面横位施文である。口縁部外面は無文で、屈曲部に連続刺突文が見られる。

胎土には角閃石や黒色鉱物、赤色鉱物が多い。

106～108の3点の底部は全て平底で、106、108は横位施文、107には縦位施文が確認できる。

#### 6類 手向山式土器（第35・36図）

変形燃糸文施文をa類、単節繩文施文をb類とし、手向山式土器の範疇で捉えている。

#### 6a類 変形燃糸文土器（第35図109～122）

109はC-27・28区出土の横位方向の変形燃糸文を施す1個体分の深鉢形土器の胴部資料で、器壁は薄い。にぶい橙色を呈し、外面は丁寧なナデした後に施文し、内面は丁寧なナデで仕上げる。石英粒や黒色鉱物、赤色鉱物を主体とする胎土で、角閃石等の明確な結晶鉱物は認められない。なお、出土位置は異なるが、D-24区出土の110の胎土と酷似する。

110～119はC-24区、D-24区を主体とする一括資料で、一部はV層出土で、122はC-23区V層出土である。器形の特徴は、口唇部には施文を施さず、口縁部は丸みを帯びながら大きく緩やかに外反する。胴部下半で丸みを持ちながら、底部方向に緩やかにすぼまる形状を呈する。110～113は口縁部施文帶から胴部上半にかけては縦位方向に施文し、114～116は横位方向に変形燃糸文を施している。112は特に器壁が薄く、口唇部もやや先細りになり、内面調整も丁寧な横方向にナデで仕上げている。胎土粒子も精緻であり、金雲母を含有するのはこの資料のみである。110、113は胎土や焼成等が酷似するが、施文方向が逆転する。113は、おそらく工具による丁寧な横方向のナデ調整が重ねて行われる。胎土は基本的に精緻で、石英粒や輝石が目立つ。113と115、117、119も石英粒や輝石が胎土に含まれ、0.2cm前後の白色鉱物の混入が特徴である。116も白色鉱物を含むが、若干粒子が小さく、輝石や角閃石が目立つ。122は白色鉱物を含む胎土で、底径13.2cm、底部は上げ底となる。

#### 6b類 繩文土器（第35図123～129）

123は外面が明瞭で無いが、内面に横位の単節繩文を施した口縁部で緩やかに外反する。127は胴部の一部と判断した資料で、単節繩文を縦位から斜め方向へ施文し、最上位で24cm程の径が、126の最大部では26cm程が想定される。

124～127は、色調や内面の丁寧なナデ仕上げ、精緻な胎土などの特徴から、同一個体の可能性が高い。128は多繩文である。129は7類土器に見えるが、沈線状部は後世の傷である。

#### 7類 塞ノ神A式土器（第35・36図130～135）

沈線文間に回転施文した網目状文（130～132）や燃糸文（133）、単節繩文（135）を施した一群である。134も単節繩文の可能性が高いが、沈線文間に充填するものであり、沈線文からはみ出した施文は削り消される。

131はやや太めの燃糸を用いた網目文で、にぶい黄橙

色を呈し、赤みが少ない。器面の一部に煤状炭化物の付着が認められる。130、132は細い燃糸を用いた網目文を施文するもので、白色鉱物の他に0.5～0.6mm程の小礫が含まれる。132は破片上部に刺突文が1条施文されるが、胴部と頸部の境界に相当する可能性もある。134は角閃石等の黒色鉱物を多量に含む胎土で、2条の貝殻腹縁押引文が見られるが部位は明確でない。135の内面調整は粗いケズリやナデで、内外ともに明褐色を呈し、石英粒や長石、輝石、黒色鉱物、さらに0.2～0.3cm程の白色小礫の混入が特徴的である。なお、胴部上部では34cmの径が復元できる。出土点数が少ないので、施文手法にバリエーションがあることは興味深い。

#### 8類 塞ノ神B式土器（第36・37図136～149）

胴部資料を除く全てに貝殻腹縁刺突文と貝殻による沈線文、条痕文が認められる。

136は大型土器で重量がある。口唇端部を連続して刻み、外反する口縁部には14cm程の貝殻腹縁部を単独で口縁部に平行して浅く押引く。砂粒の多い胎土で、器面は粗い。138は内面を丁寧に横方向にナデしている。2筋の貝殻腹縁による押引き状の刺突文を横走させ、口唇部も同一工具で連続して刻まれる。139の復元口径は23.0cmで、頭部屈折部は貝殻腹縁部で深く刻み、口唇部も連続して刻む。また、口縁部と胴部に同一工具でX状の平行沈線文を施している。なお、内面調整は粗いケズリとナデで、胎土に含む砂粒で器面は粗い。140の屈曲は明瞭な稜線を残し、密な貝殻腹縁刺突文が施され、137では凹頂点状の連続刺突文が残される。

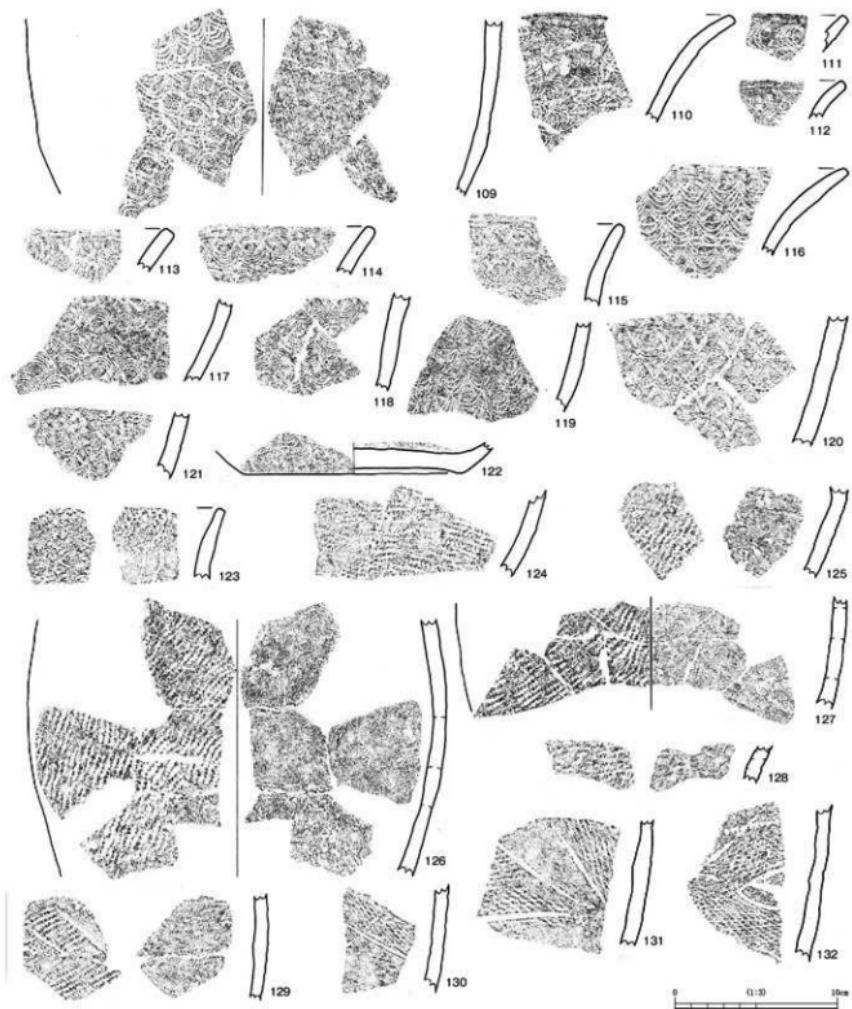
142、146は口唇部が残らないが、口縁部外面に貝殻腹縁による押引文が密に周回する。また、142は1.0cm程の貝殻腹縁部で押引いて口縁部を施文する。146は明瞭な頭部の屈折をなし、0.5～0.6cm程の貝殻腹縁部で押引き施文する。内面は指頭圧痕やミガキ状のナデで丁寧な調整痕を残し、器壁は薄い。141、143～145は胴部資料で、148は胴部と頭部の屈曲部と見られる。また、141、143、144の胴部沈線文は貝殻条痕文を細沈線文で表したと見られ、施文方法は141と143が類似する。144と145は連続する押引文の下位を充填したもので、148同様胴部と頭部の屈曲部に相当する可能性もある。147と149は、先行する平行沈線文間に貝殻条痕文で充填するもので、同一個体の可能性もある。

#### 9類 矢張式土器（第37図150）

150は口縁部である。薄手で内外ともに粗い条痕仕上げの器面に、極細の断面三角の隆起線文が5本以上周回し、口唇部は鋭利なヘラ状工具で深く刻まれる。器壁は0.8cm程と薄く、内面も粗い条痕形成となる。焼成は硬質で、胎土は長石等の白色鉱物が目立つ。

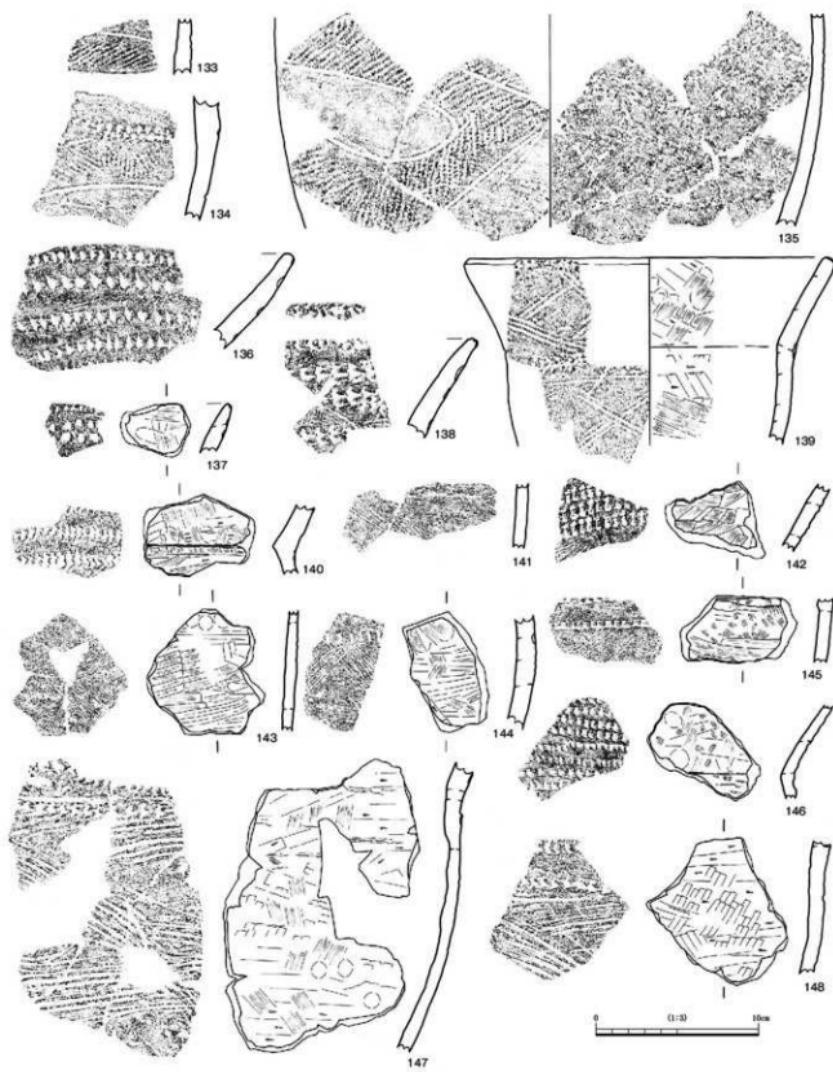
#### 10類 不明土器（第37図151）

151は胎土に多量の滑石が混入する。キャリバー状の

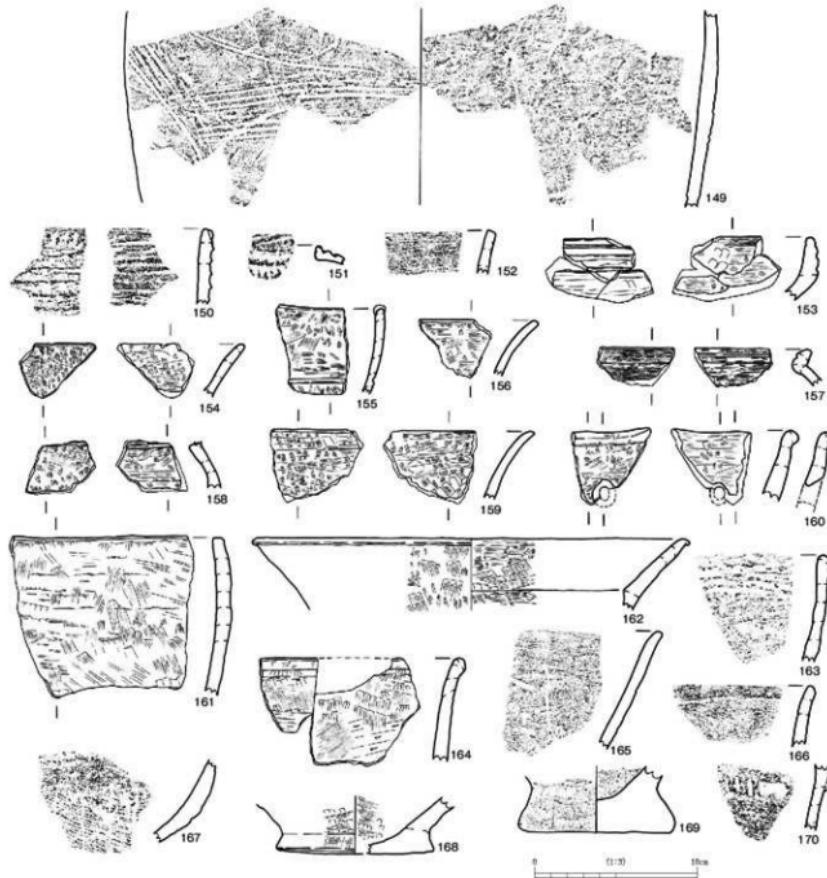


第35図 縄文時代の土器 (6)

6 0 (1:1) 10mm



第36図 繩文時代の土器 (7)



第37図 縄文時代の土器 (B)

形状を想定される。波状口縁を成すと見られ、その狭い平坦な口唇部にも平行沈線文が施される。施文具は貝殻と見られ、口縁部に沿うように横方向に刺突文を連ねている。

#### 11類 沈線文土器 (第37図 152・153)

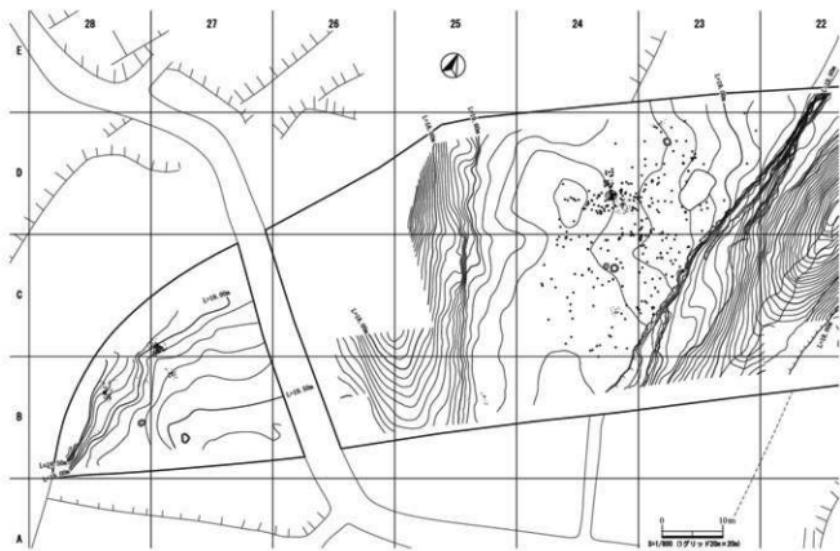
152は平坦な口唇部と直線的に立ち上がる口縁部に沿って、鋭利な工具による平行沈線文が周回する。153は3条の沈線文が周回する口縁部で、器壁の厚さや器面調整から深鉢形土器と見られるが判然としない。

#### 12類 入佐式土器 (第37図 154～156)

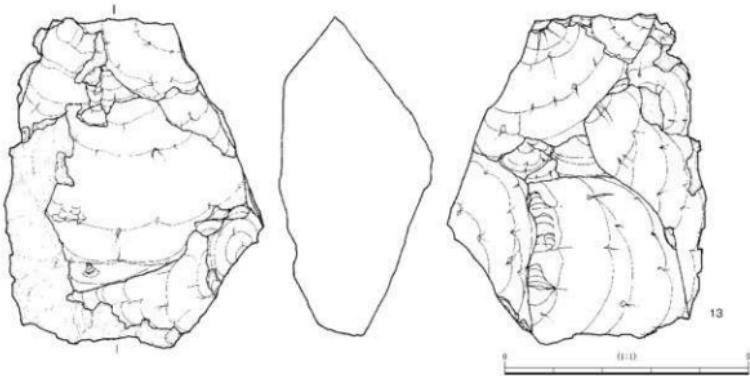
154～156は口縁部が大きく外に開く浅鉢形土器である。154、156の口縁部は直線的であるが、155は波状でやや内済し、胴部との境界に沈線文を残す。いずれも丁寧にミガキで調整される。156は胎土に細粒の金雲母を含んでいる。

#### 13類 黒川式土器 (第37図 157～169)

157は口唇部内側に沈線状の段を持つものである。口縁部は短く外反し、胴部以下は浅鉢形土器で、内外面とともに丁寧なミガキ調整が行われている。158は口縁部が



第38図 縄文時代遺物分布図（A～E - 22～28 区周辺）



第39図 旧石器時代の石器

欠損したものである。

159～161、163、166は鉢形土器である。160は玉縁状の口縁部を持つ鉢形土器で、外面から焼成後穿孔される。161は大型鉢形土器の口縁部で、底部に編布を圧痕する半粗半精製土器と見られる。167はその編布圧痕底部で、内面はミガキ調整で、精製土器の特徴を表している。162は小型の深鉢形土器で、器面調整は粗い。163～166については器形がはっきりしないが、鉢形土器の一部と見られる。168、169は深鉢形土器の底部である。169は平坦な接地面に加え、重量と安定感が備えられている。内面には煤状炭化物が付着する。

#### 14類 刻目突帯文土器(第37図170)

170は、屈曲部に工具による深い刻み目が残される。器種は不明である。

#### イ 石器

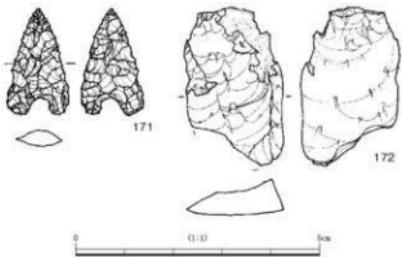
VI層、V層、IV層、III層、II層及び表土採集の区分に準じて取り扱うこととする。また、C・D-23・24区とC・D-27・28区の2つのエリアに集中する傾向があり、いずれも拠点的場所であったと判断される。なお、発掘調査で採取されている石器の中から旧石器時代に帰属すると判断したものについては形式的判断に基づき、一括して旧石器時代の遺物として取り扱っている。

#### (ア) VI層(第40図171・172)

171は石鏃である。D-16区出土の半透明の良質の腰岳産黒曜石を素材とする。右側縫調整が丁寧で直線に近い。明らかに縄文時代層からの落石、混入と見られる。172は剥片である。D-24区出土で、上牛鼻産黒曜石を素材とする。右側縫部上部に縫面を残す。打面が平坦なことから分割縫を素材とした石核の可能性が高く、剥片の先端部は打撃により欠損する。

#### (イ) V層(第41～43図173～195)

173、174は石鏃である。173はチャート製で正三角形



第40図 縄文時代の石器(1)

を成し、174は安山岩製でやや長身で先端部を欠損する。175は、ナイフ形石器の先端部の可能性も考えられる。断面三角形の剥片の右側縫に両面から二次加工を施しているもので、石材に含まれる気泡等の不純物から日東産黒曜石製とみられる。176はいわゆるトロトロ石器で、チャート製である。厚手の二等辺三角形状の剥片を素材としたものである。先頭部も銳利に磨かれ、両側縫部と表裏平坦面の面取りした6面全てに研磨を施している。

177は剥片である。腰岳産の良質な黒曜石を素材とする。打面調整技術の存在が確認できる。178は腰岳産黒曜石の残核と判断した。179～182は剥片である。179は右側縫部に微細剝離痕を持つチャート製である。180は日東産黒曜石を素材とする。181も腰岳産の良質な黒曜石で、ほぼ全周に両面からの微細剝離痕が残される。

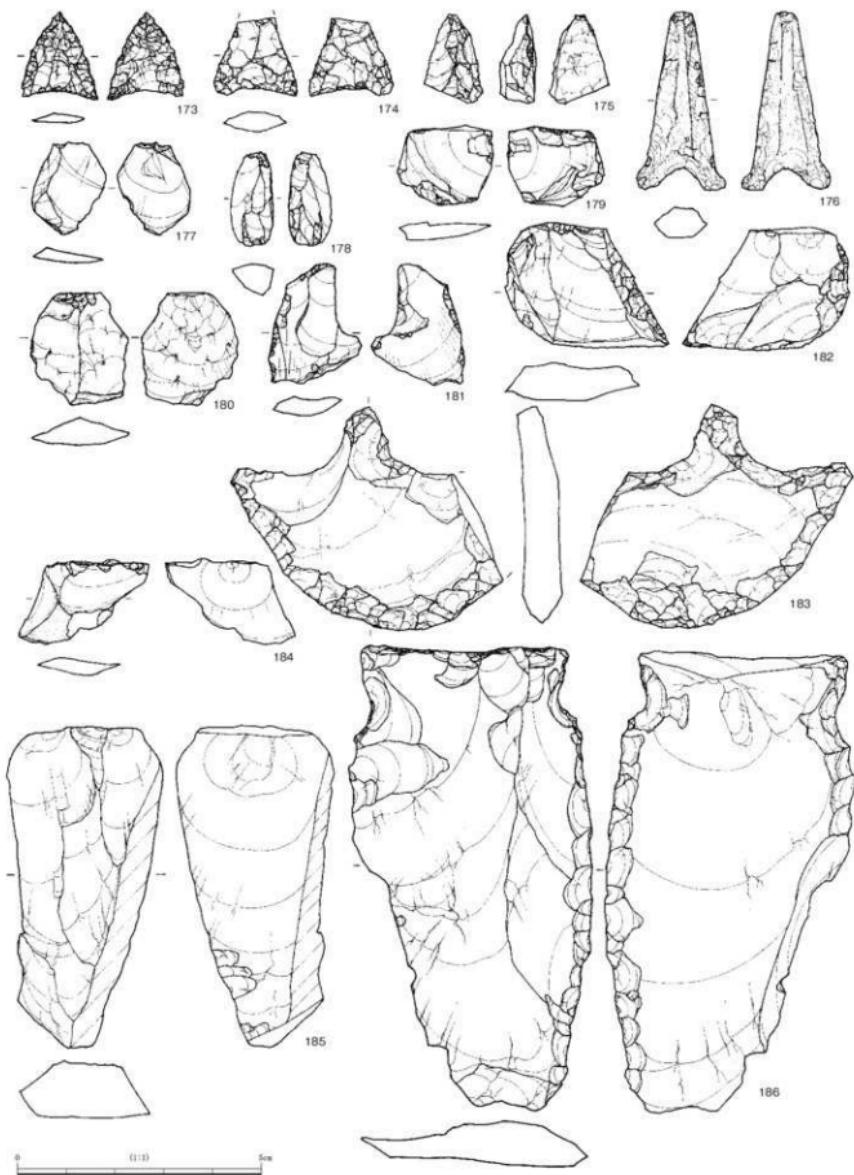
182は左側縫腹面と右側縫部に二次加工痕及び微細剝離痕を持つ剥片で、打面及び底面共に平坦面を成す。チャートを素材とする。183は半月状刃部の石刀である。上牛鼻産黒曜石で打面転移の見られる横長剥片を素材とする。刃部中央部の打瘤除去に多くの調整剝離が集中している。また、左肩部を欠損するが、右肩部は銳利に成形し、摘み部の発達は見られない。

184は調整剥片である。185は縱長剥片で、腹面左下部複数の剝離痕が残されるが、判断が難しい。

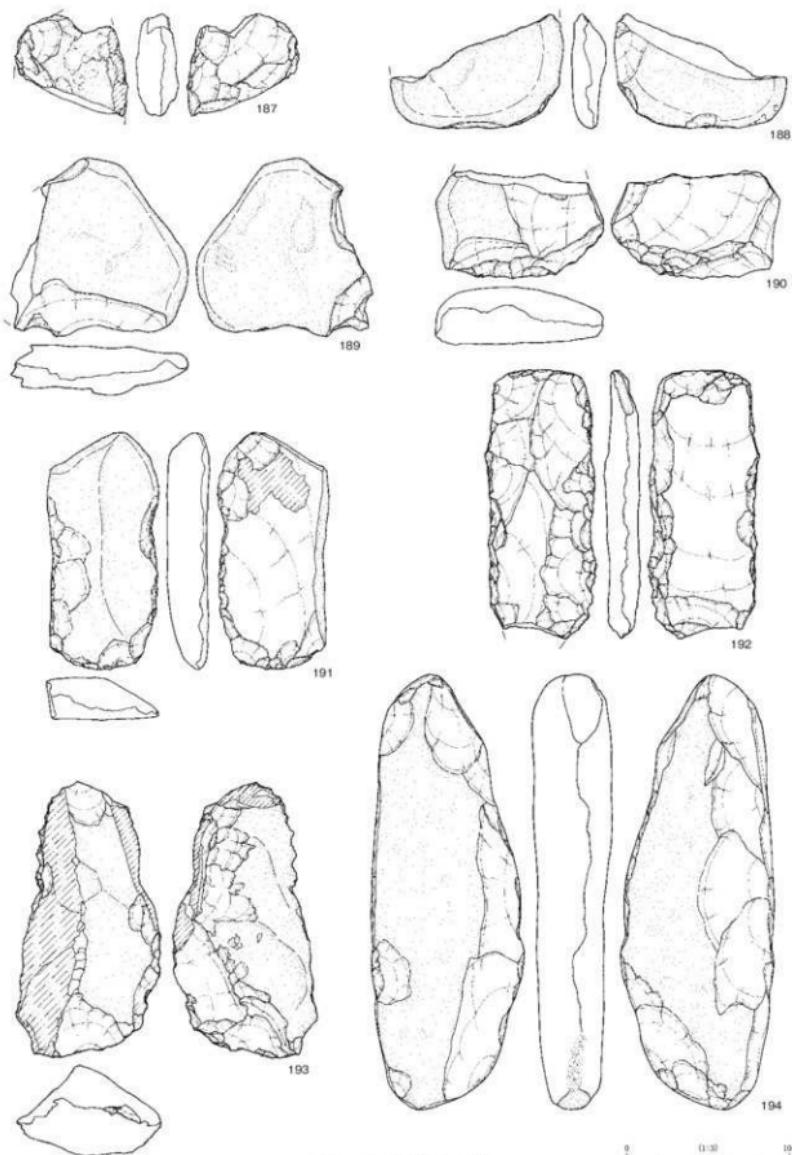
186は縱長剥片素材の削器である。チャートを素材とする。打面は平坦面、上部両端に抉入部を持ち、右側縫全域と左側縫上部には両面方向からの刃部形成が行われる。187～190はいずれもB-28区出土の縄器及び石斧製作時の関連資料と見られる。187は石斧の頭部、188は石斧の刃部ないしは素材礫が想定される。189は扁平な亜円錐の下端部を打ち欠いたもので、左側縫は欠損し、190は両側縫から剝離痕を持つ部分を下位に配置し石斧の刃部を想定しているが、上記3点を含め、器種の特定が困難な資料である。

191～194は打製石斧として捉えている。191は風化が著しいが、表面は縛面、裏面は剝離面ないし節理面であり、下端部を中心に剝離成形が見られる。192は右側縫部頂部にわずかであるが縛面を残す、扁平な剥片を素材とした短冊形で、刃部は欠損する。裏面は剝離面の平坦面を活かしており、表面では側縫部からの入念な成形剝離が確認できる。193は左側縫及び右側縫上部が節理面で欠損したと思われる。石斧の一部が残されたもので、右側縫下部から下端部に剝離痕が見られる。194も風化が著しく進行する亜円錐で、明確な成形剝離は認定できないが、石斧の素材の可能性の高いものとして取り上げた。

195はD-23区出土の針尾産黒曜石を素材とした石核で、扁平で幅広の不定形が剥出されている。

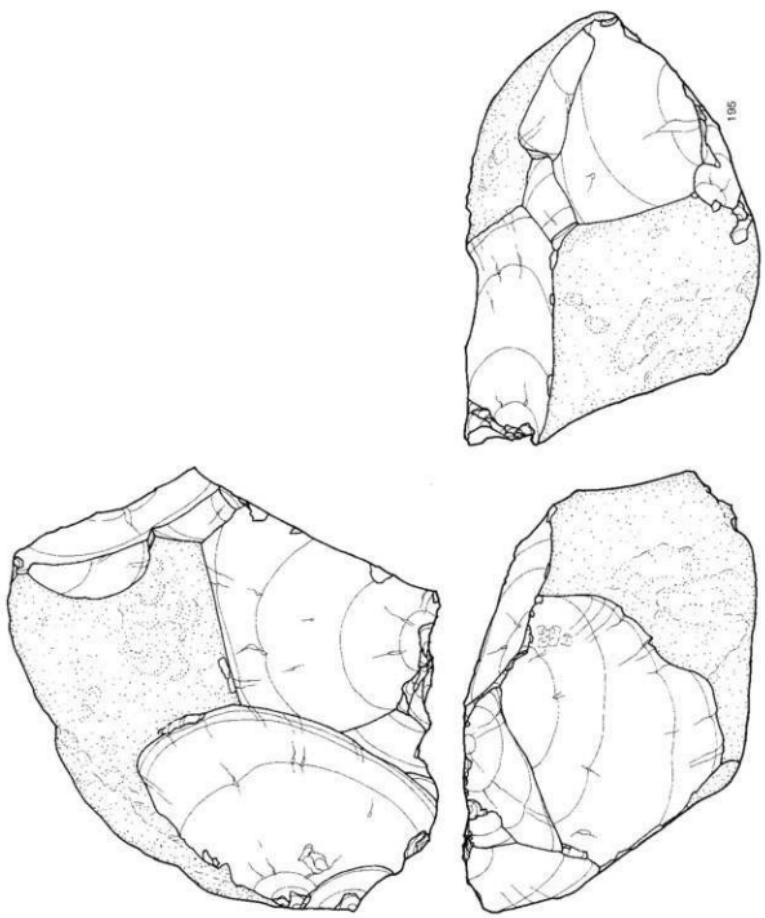


第41図 縄文時代の石器(2)

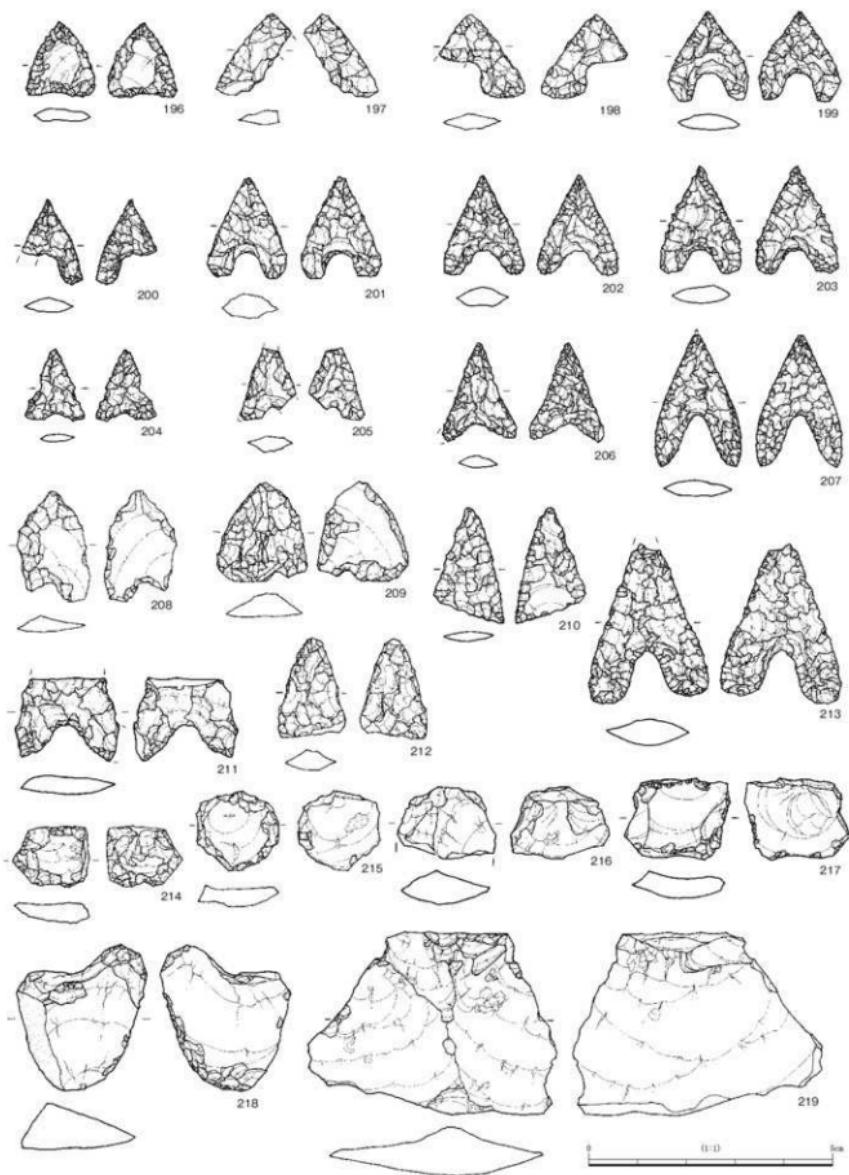


第42図 縄文時代の石器（3）

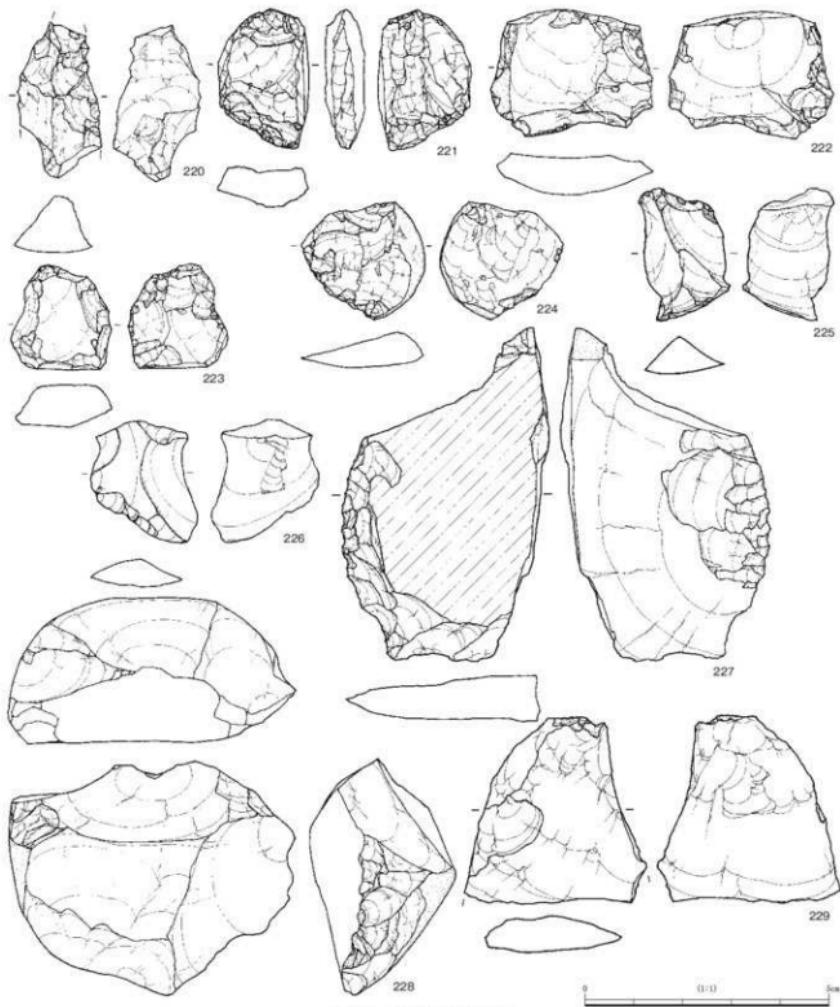
0 (1:10) 10cm



第43図 桶文時代の石器 (4)



第44図 縄文時代の石器 (5)



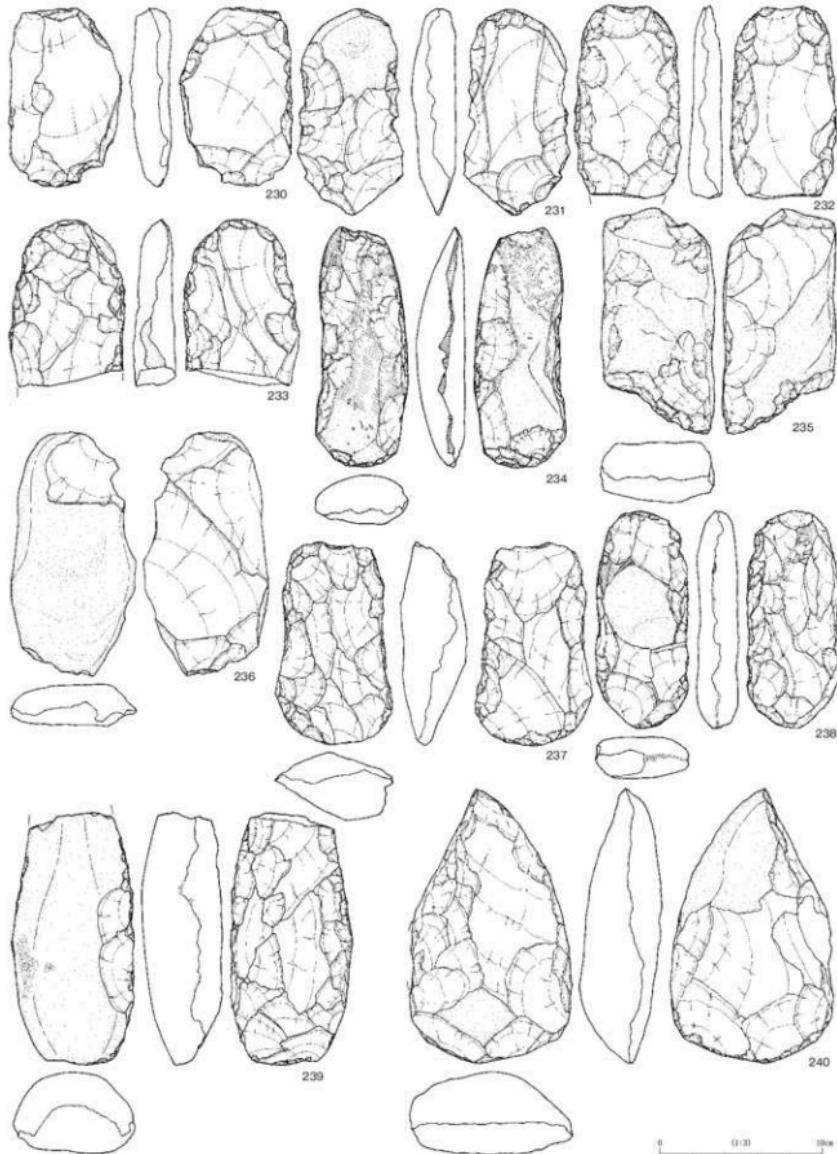
第45図 縄文時代の石器(6)

(ウ) IV層(第44~47図196~249)

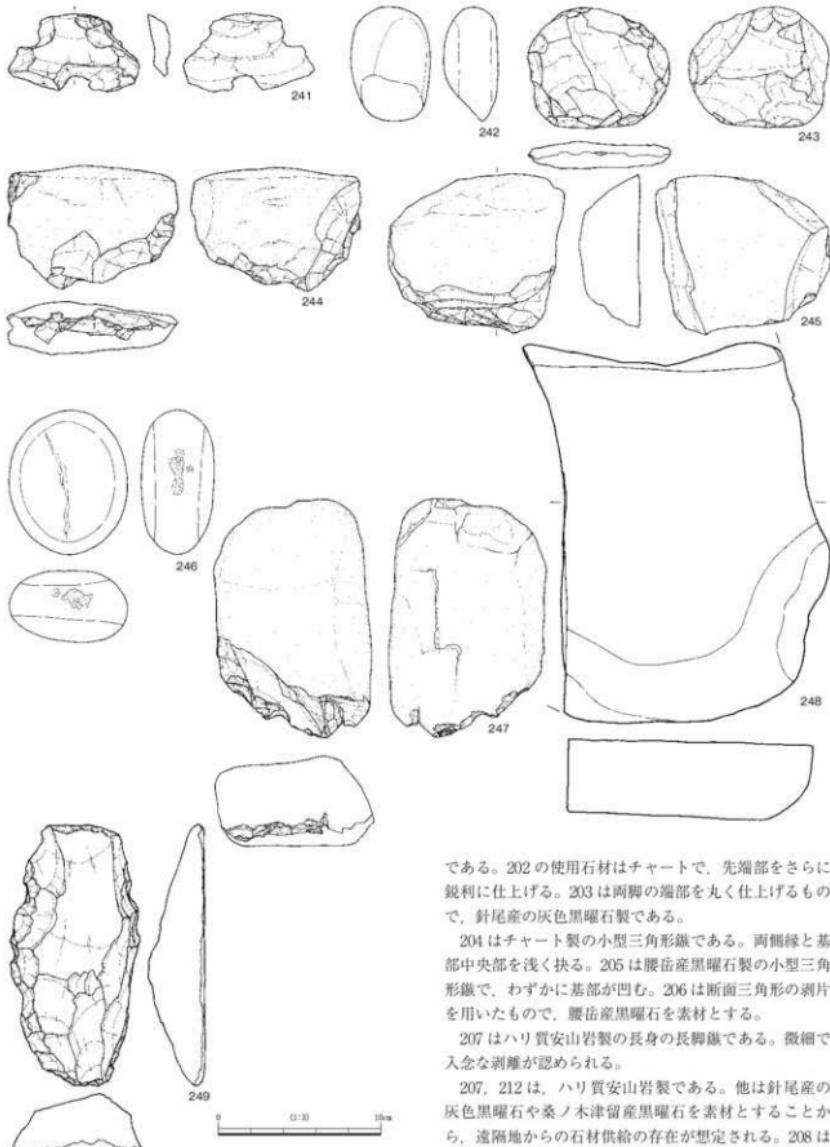
196~213は打製石鎌である。C-24区とB-27区に集中して出土する。

196は両面に素材剥離面を大きく残す正三角形鎌で、石材は桑ノ木津留産の黒曜石である。197~199は正三角形のU脚鎌(鉤形鎌)である。片脚を欠くが、先端部

が鋭利に残る。197は針尾産黒曜石、198、199は桑ノ木津留産黒曜石を素材とする。199は両脚の端部を丸く仕上げる。200~203は形状の類似するU脚鎌である。200が最も深く基部が抉られる。半透明の桑ノ木津留産黒曜石を素材とし、片脚は欠く。201~203は完形品である。針尾産の灰色黒曜石を素材とした厚手の素材剥片



第46図 縄文時代の石器（7）



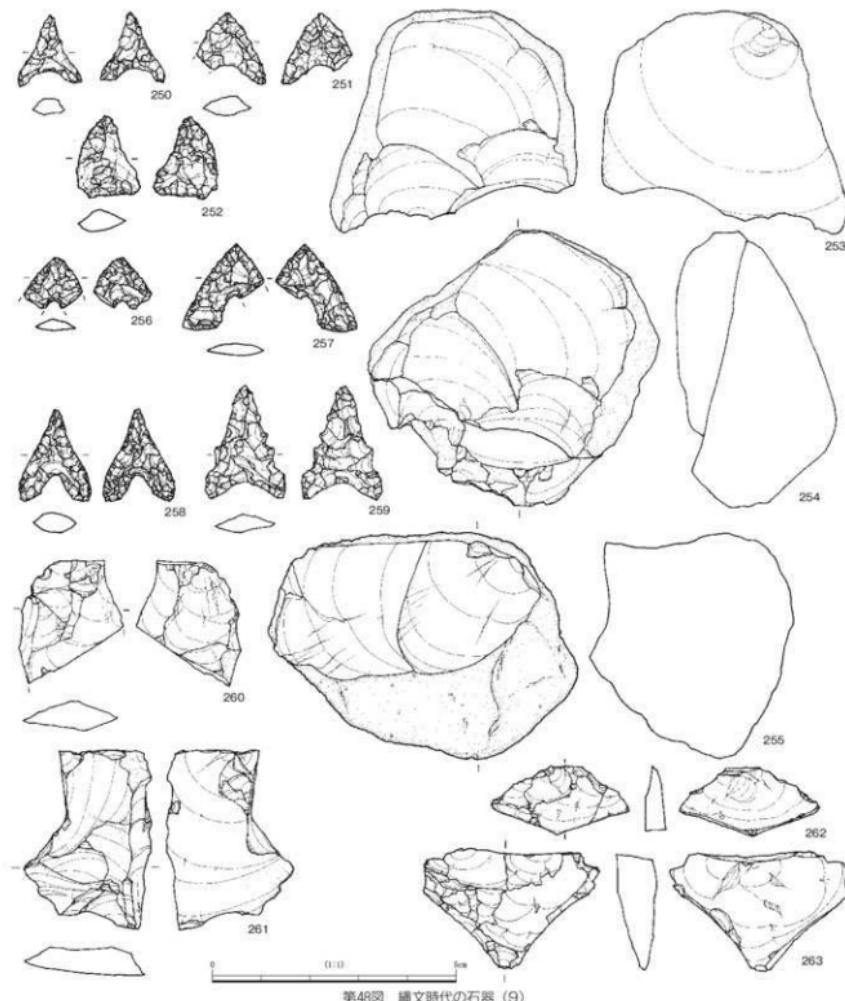
第47図 猪文時代の石器（B）

である。202 の使用石材はチャートで、先端部をさらに鋭利に仕上げる。203 は両脚の端部を丸く仕上げるもので、針尾産の灰色黒曜石製である。

204 はチャート製の小型三角形鏃である。両側縁と基部中央部を浅く抉る。205 は腰岳産黒曜石製の小型三角形鏃で、わずかに基部が凹む。206 は断面三角形の剥片を用いたもので、腰岳産黒曜石を素材とする。

207 はハリ賀安山岩製の長身の長脚鏃である。微細で入念な剥離が認められる。

207, 212 は、ハリ賀安山岩製である。他は針尾産の灰色黒曜石や桑ノ木津産黒曜石を素材とすることから、遠隔地からの石材供給の存在が想定される。208 は断面三角形の扁平な剥片の肥厚する打面部を主に剥離し



第48図 縄文時代の石器(9)

たもので、重心が偏るが石鏃と判断した。使用石材は針尾産黒曜石である。

209は腹面をほぼそのまま残し、稜の高い背面に平坦剥離状の調整剥離を加えたもので、腹面左隅が打点に相当する。石鏃として報告するが、製品か否かについては不明である。チャート製である。210はチャート製の扁平な剥片である。石鏃の未製品と思われる。腹面には剥

離面が大きく残される。両脚の長さが異なり、微細観察では長脚側の剥離が細かく、摩滅の進行も認められる。

211は本遺跡内では大型の石鏃である。使用石材は針尾産黒曜石である。側縁部は鋸歯状に仕上げた可能性が高い。212はハリ質安山岩製の三角形鏃で、若干右側縁部を波状に仕上げ、側縁部のバランスを欠く。213は本遺跡最大のU脚鏃である。先端部の一部を欠くが、微細

で入念な剥離が認められる。三船産黒曜石を素材とする。

214～219は剥片である。214は使用痕剥片で、三船産黒曜石製である。215は桑ノ木津留産黒曜石を素材とする。円柱状の石核から連続して剥離した母指状の剥片で、微細な剥離痕が見られる。216は折断剥片の打面側(頸部)資料で、打面は平坦面である。日東産黒曜石製で、二次加工等は見られない。217は腰岳産黒曜石製で、ほぼ全域に微細な剥離痕を持つ。218の剥片先端部から右側縁に、微細な剥離痕が見られる。チャート製である。219は幅広の不定形剥片で、下端部は折断した可能性もある。日東産黒曜石製である。

220はナイフ形石器の側縁部ないしは基部の一部と見られ、稜の高い断面三角形の剥片を使用している。日東産黒曜石製である。221は両側縁に楕状剥離を持つもので、彫器の機能も想定される。下縁部に両側からの整然とした剥離痕も見られることから、器種認定には至っていない。

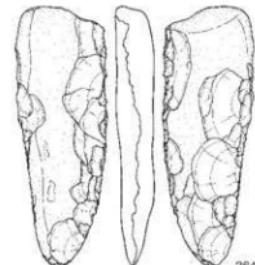
222～226は剥片である。222は打面が平坦な剥片である。下縁部が使用部であり、217と類似する。なお、背面から腹面方向に使用痕が残され、さらに抉入状の曲線を成す。チャート製である。223は厚さ0.8cm程のチャート剥片の周辺加工品で、背面はそのままに周辺部は腹面から急角度の剥離を行い、腹面は平坦な剥離で仕上げる。224は分削標素材石核の打面転移石核から剥出した剥片である。225は平坦打面から剥離した剥片で、剥片の底面は石核の底面に相当する。腰岳産黒曜石製である。226の打面は平坦である。

227の背面は平坦面な節理面で、横長剥片の打点部両側に平坦剥離を施した削器と見られる。チャート製である。

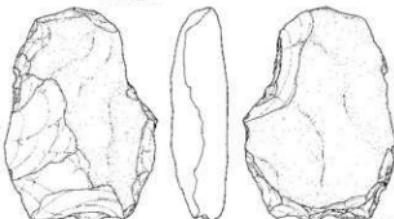
228は円錐を用いた稜上交互剥離の石核で、不定形な横長剥片を剥出している。また、右側縁下部には使用痕と見られる小剥離痕が残される。軟質頁岩製である。229は複数の不定形剥片で、下端部は折断した可能性もある。

230～240は石斧またはそれに準ずる資料である。230は半月形状の剥片の周辺部に二次加工が認められるもので、左側縁が厚く、右側縁が薄くなることから、横剥ぎの剥片の可能性もある。231の表面頭部には裏面を残し、裏面は風化が進行するが剥離面で構成する。成形剥離は裏面の両側縁が先行し、表面方向から再調整が加えられるが、刃部は欠損によるリダクションの可能性が高い。

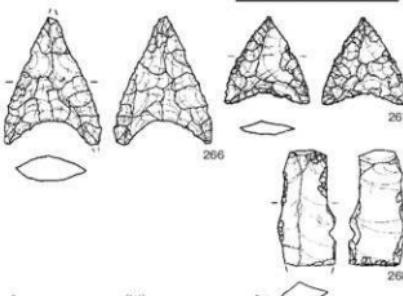
232は幅6.6cm、最大厚さ2.1cmの短冊形で、刃部の一部が欠損する。使用石材は安山岩で、横剥ぎの扁平剥片を素材としている。233は幅7.1cm、厚さ2.6cmの被破損の頭部と判断したもので、剥片を素材としている。234は完成品と判断される。両面に裏面が残ることから、意图的に中央部がバナナ状に屈曲する亜円錐を素材として選択している。研磨痕は明瞭に残り、最終段階で両側縁



264



265



266

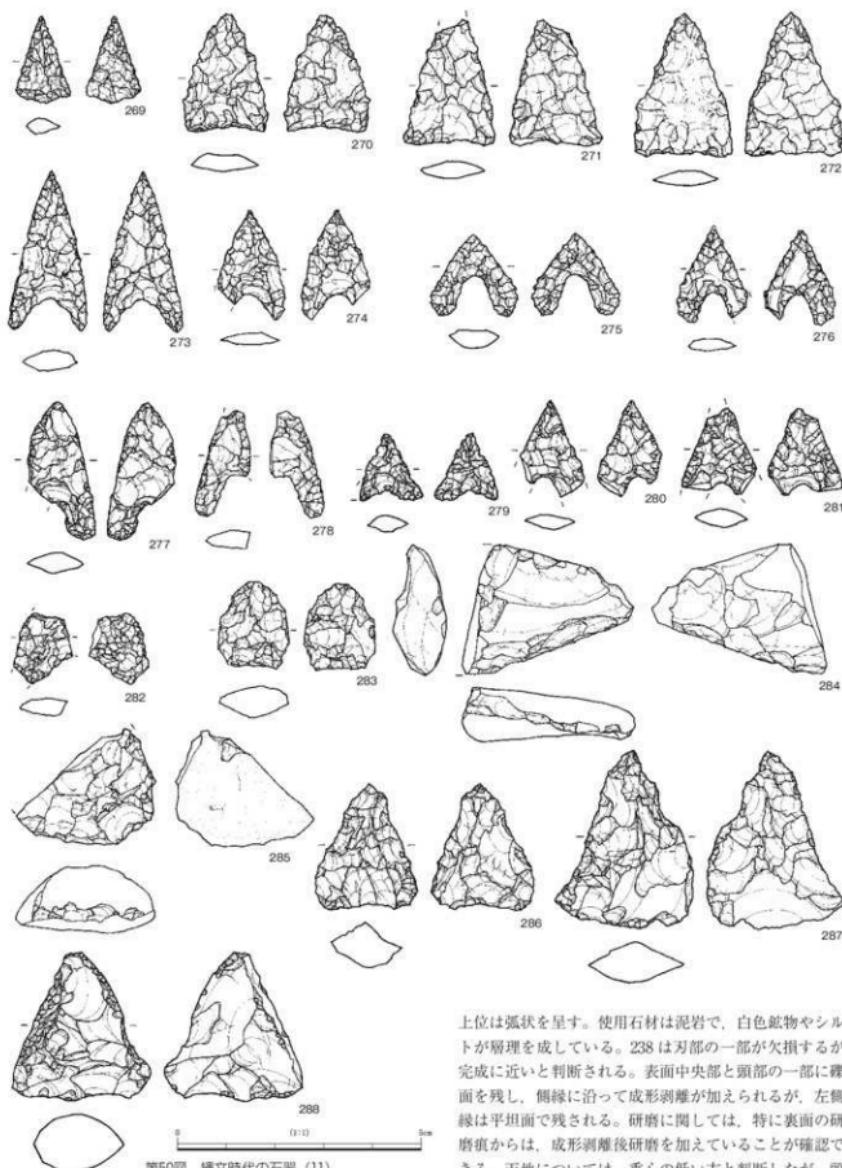


267

第49図 純文時代の石器(10)

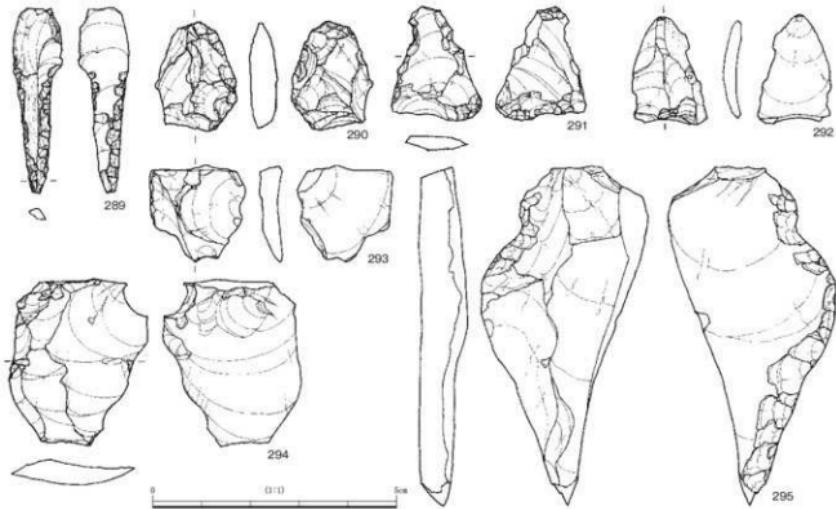
部へ研磨を加えている。天地については、重心の低い方と判断したが、頭部の研磨仕上げも丁寧なことから逆もあり得る。硬質砂岩製である。235は長さ13.9cm、幅7.0cm、最大厚さ3.8cmの短冊状の角錐の端部に刃部形成と見られる剥離痕が認められる。なお、敲打具の可能性も想定され、繰り返し使用したことにより長軸が短くなつたことも考えられる。

236の下端部裏面に見られる小剥離は、リダクションの可能性が高く、表面は裏面、裏面は剥離面で構成する。237は完成品と判断される。中央部が若干くびれ、頭部



第50図 縄文時代の石器 (11)

上位は弧状を呈す。使用石材は泥岩で、白色鉱物やシルトが層理を成している。238は刃部の一部が欠損するが完成に近いと判断される。表面中央部と頭部の一部に縦面を残し、側縁に沿って成形剥離が加えられるが、左側縁は平坦面で残される。研磨に関しては、特に裏面の研磨痕からは、成形剥離後研磨を加えていることが確認できる。天地については、重心の低い方と判断したが、頭



第51図 繩文時代の石器(12)

部の研磨仕上げやくびれの位置等から逆も想定できる。硬質砂岩製である。239の表面は裸面、裏面は分割面で構成し、裏面の分割面に大小の成形剥離を加え、刃部は丸整状に仕上げているが、研磨等の痕跡は認められない。また、左側縁部を中心に敲打痕が残り、頭部を欠損するが814gと重量がある。240は長さ16.7cm、幅10.1cm、最大厚さ5.1cmの洋梨形を呈す。風化が激しく、詳細観察が困難なことから人工品でない可能性もある。

241はホルンフェルス製の剥片で、調整剥片と見られる。242はハンマーストーンの可能性のあるもので、一部は欠損する。243は全周を両面から円形状に加工した周辺加工石器で、凝灰角礫岩を使用する。244、245は穀器である。244は厚さ3cm程の角縁で、下縁部を両側から、右側縁部は裏面から数回打ち欠いたもので、使用痕等については確認できない。剥離痕のある石器でホルンフェルス製である。245は厚さ3.5cm程の角縁の長辺の一端を、片側(裏面)から数回剥離したもので、使用痕等の確認はできない。左右両側縁の剥離は自然剥離で人為的なものではない。ホルンフェルスを素材とする。

246は磨石と敲石の両機能を備える。248は石皿片である。249は横断面が鍤鉗状の石器で、刃部加工及び側縁成形は裏面方向から行っている。裏面は節理面で、天地逆の可能性もある。

#### (工) III層(第48図250～255)

250～252は打製石器である。250は上牛鼻産黒曜石、

251はチャートを素材とする。252は変形の石鎌と考えられる。日東産黒曜石製である。

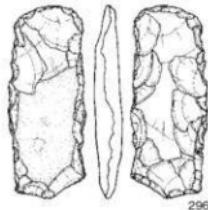
254は霧島系黒曜石製の石核で、253と接合することが判明している。255は穀器である。円錐の平坦面を打面に、2～3回の打撃を加えたもので、目的剥片を剥ぎ取った痕跡は認められない。よって、試し割りした素材礫と見られる。針尾産黒曜石を素材とする。

#### (オ) II層(第48・49図256～265)

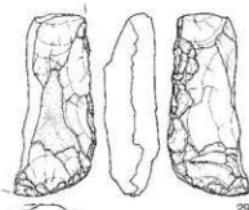
256～259は打製石器である。256は両脚端部を欠損するが、257と同種の正三角形のU脚縁と見られる。腹面には剥離面を多く残すもので、腰岳産黒曜石を使用する。258は針尾産黒曜石ではほぼ完形品の石鎌である。259は針尾産黒曜石を素材としたやや長身の石鎌である。両側縁を鋸歯状に仕上げる。

260～263は剥片である。260は平坦打面から剥離した剥片で、下半は折断により欠損する。滑性の高いチャート製である。261は打面転移を繰り返す剥離技術が見られるもので、本剥片の打面は自然面である。腰岳産黒曜石製で、使用痕等は確認できない。262は横長の不定形剥片である。上牛鼻産黒曜石製で、底面は石核の底面に相当する。263は剥片の両下端を斜めに折断したもので、使用石材は上牛鼻産黒曜石である。

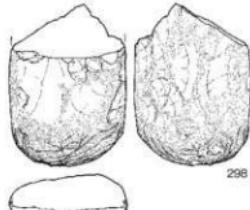
264、265は打製石斧である。264は扁平な亜円錐の一端を尖頭状に仕上げたものである。265は厚さ3.5cm程の洋梨形の円錐素材の周縁部を剥離し、斧状に仕上げた



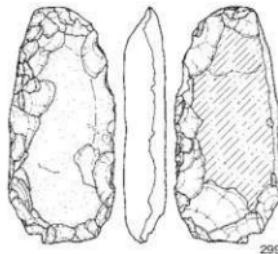
296



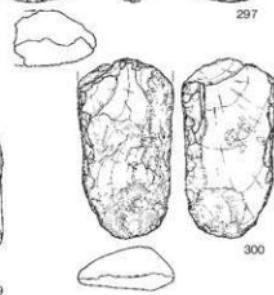
297



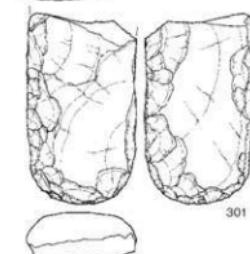
298



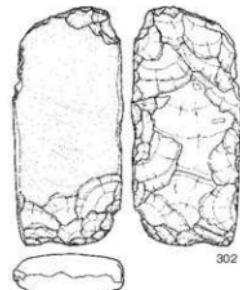
299



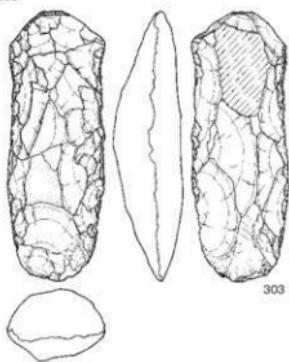
300



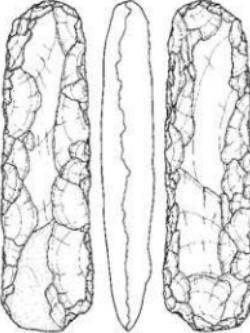
301



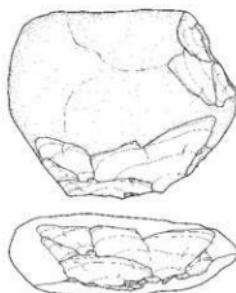
302



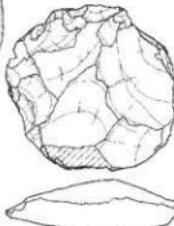
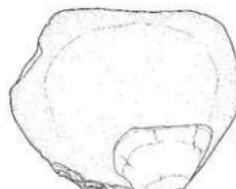
303



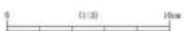
304



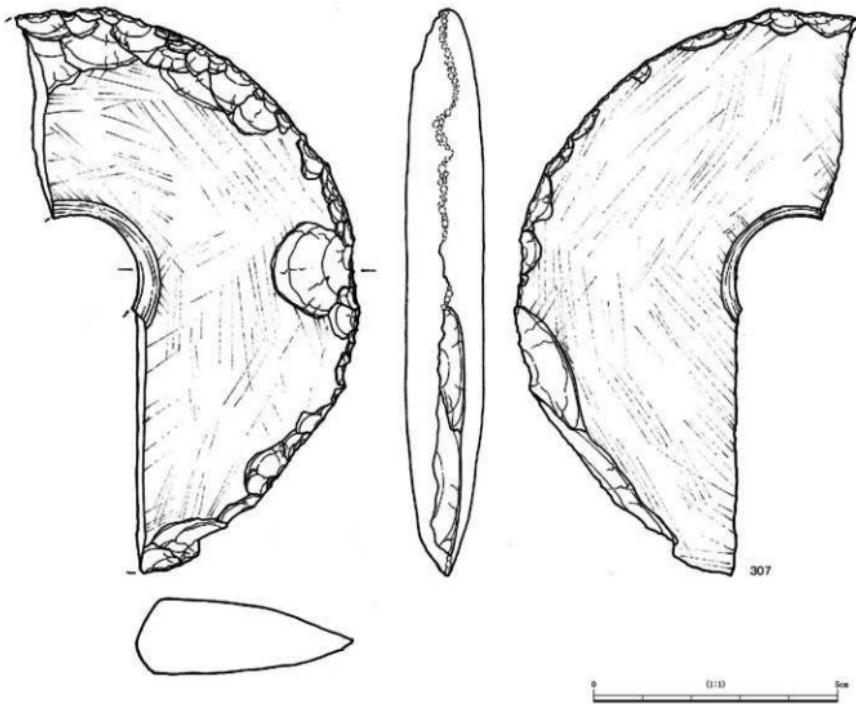
305



306



第52図 縄文時代の石器 (13)



第53図 繩文時代の石器 (14)

ものである。先端部は刃潰れ状の小剥離が見られる。ホルンフェルスを素材とする。

#### (力) 遺構内 (第49図 266～268)

266、267は打製石鏨である。両者とも黒色安山岩製である。267は薄い素材洞片の三角形鏨で、基部の抉りは浅い。268は剥片である。平坦打面から剥離したやや厚手の剥片で、両側縁に激しい使用痕と摩耗痕が見られる。腰岳産黒曜石製である。なお、図示していないが、E-15区出土で、ホルンフェルス製の握り斧状の石核が出土している。厚さ3.5cm程の角礫で、両側縁部に剥離痕を残す。

#### (キ) 表土採集 (第49～53図 269～307)

石鏨15点及びその関連資料3点、その他の剥片石器3点、打製石斧7点、部分磨製石斧2点、円盤状石斧1点、穀器1点、環状石斧1点が採取されている。

269～283は打製石鏨である。269は基部中央部が短

い舌状を持つ完成品で、黒色のチャートを素材とする。270は光沢性が高く且つ漆黒で良質の黒曜石を用いている。271、272は三角鏨である。271は安山岩製で、若干左側縁部を波状に仕上げる特徴が酷似する。272は他と比較して長さが卓越する。扁平な素材洞片を選択し、平坦剥離状の成形剥離を行い、背面中央部から先端部にかけては主に縱方向の研磨仕上げが行われる。273の基部は大きく抉る典型的な二等辺三角形鏨である。針尾産黒曜石製で側縁は微細な鋸歯状に仕上げている。274は良質の腰岳産黒曜石を素材とする。275はいわゆる鉤形鏨で、針尾産黒曜石製である。276は桑ノ木津留産黒曜石製である。両面に剥離面を多く残すもので、左脚端部と先端部をわずかに欠く。277は白灰色の良質のチャートを使用し、二等辺三角形に近い。278は針尾産黒曜石製のやや長身の三角形のU脚鏨である。279は小型の三角形鏨で、基部の中央部をわずかに抉る。桑ノ木津留産黒曜石を素材とする。280は先端部が锐利に残るが、両脚端部は欠損する。ルーペによる詳細観察では、表面摩耗

が確認できる。針尾産黒曜石製である。281は黒灰色のチャートを素材とする。282は桑ノ木津留産ないしは霧島系黒曜石を使用し、左刃部一部を残し、大部分が欠損する。283は体部中央部が0.7cmと厚く、先端部は尖らない。黒灰色のチャートを素材とする。

284は、背面中央部の先行する平坦な剥離面を含め、横長剥片を使用した可能性の高い資料である。縦方向に図示すると石槍の基部、左側縁を刃部とすると石匙の可能性がある。使用石材は安山岩である。

285は裏面で縫面で構成するもので、下辺部の剥離から搔器と判断した。

286～288は打製石鎌の未製品である。286は鉄石英製の石鎌未製品である。背面中央部はステップ、フラクチャーが起因で放棄したと見られる。287は縞状模様のある灰色チャート製で、石鎌の未製品と見られるが、右側縁部はノッチの可能性もある。288も同様で、ステップやヒンジ、フラクチャーの繰り返しにより、製作放棄したと見られる。瑪瑙製である。

289は石錐である。背面に縫面を残す縱長剥片の打点部を刃部としており、腰岳産黒曜石を使用する。290は石鎌である。283と酷似する資料で、右側縁部の欠損で放棄したと見られる。石材も黒灰色のチャートと同一石材を使用している。291は摘みあるいは抉入部を持つ剥片で、使用石材は腰岳産黒曜石である。292、293は調整剥片である。292は針尾産黒曜石製、293は黒色頁岩製である。

294は縫打面から剥離した剥片で、先行する3枚の剥離面が見られる。素材剥片の可能性が高い。腰岳産黒曜石製である。295は縱長剥片の頭部方向に抉入部を持つことから、石匙の可能性もあるが、刃部加工が背面方向に限られることから断定はできない。良質の安山岩を素材とする。

296～306は打製石斧である。296は表面が縫面として表示したが剥離面の可能性もある。なお、天地については刃部形成をリダクションと判断した。

297は部位の特定が難しいが、打製石斧の刃部右側と判断した。表面の一部に縫面を残し、厚さは3.4cmが確認できる。298は部分磨製石斧と判断した。両面とも入念な敲打成形で仕上げ、刃部には丁寧な研磨が加えられる。なお、刃部の中央から先端方向に刃潰れ痕が見られる。299の表面は縫面、裏面は簡便面と素材剥片の形状を活かしている。なお、表面の刃部は急角度の剥離が見られる。300も部分磨製石斧の刃部と判断したので、表面は縫面、裏面は剥離面で、刃部を中心に研磨が加えられる。301は頭部を欠損する。両面とも剥離面と図示しているが、表面上部は縫面の可能性もある。302は表面が縫面と見られる。裏面に成形剥離が集中し、刃部リダクションが繰り返された可能性が高い。303は中央部の

最大厚さ4.4cmの短冊型であるが、鶴頭状の頭部を成す。図示した裏面は裏面斜線部が節理での剥落と見られることから、疑問が残る。なお、裏面の刃部が磨かれ、完成品と判断される。

304は本遺跡最大級の短冊型の石斧で、表面刃部付近に縫面を残す。重量は504gあり、刃潰れ痕も認められることから、完成品と判断される。305は厚さ5cm程の角礫で、突出した下縁部に数回剥離したので、刃潰れ痕が見られる。右側縁の上部の剥離は成形剥離と見られ、握り斧とした可能性を想定できる。石材はホルンフェルス製である。306は径10.2～10.5cm、厚さ3.1cmの円盤形で、断面はレンズ状を成す。全局に刃部が認められ、摩耗痕も認められることから、石斧の機能が高いと判断される。

307は環状石斧である。最大厚1.6cmで、最大長12.0cm程が想定できる。外縁部に残る剥離痕は全て使用痕で、全面丁寧な研磨仕上げが行われている。なお、中央部の穿孔は両側から回転して行われ、孔中央部が逆算盤玉状をなす。砂岩製である。

なお、図示しなかったが、表土層の採集を含め42点の磨石や敲石と8点の石皿が出土及び採取されている。器種は、磨石9点、敲石が3点。磨石と敲石の両機能を持つものが24点、磨石、敲石、凹石の3機能を備えているもの6点に区分される。主要石材が砂岩で、径5.0～10.0cmのものがB・C-24・25区を中心に出土している。また、8点の石皿は定型化した石皿の一部と判断できるものが3点、扁平な安山岩を使用したもの5点で構成される。

### 3 弥生・古墳時代の調査

#### 調査の概要

弥生時代・古墳時代の遺構は確認されておらず、遺物も他時代の遺物と比して少數しか出土していない。遺物の残存状況も悪く、表面が摩滅するものが多い。出土層は1層が大半を占める。出土遺物の中で、残存状況が良好なものや特徴的なものを中心に図化に努めた。本項では、それらの遺物について報告する。

#### (1) 弥生時代の遺物(第54図)

308は弥生時代終末期に相当する肥後系の複合口縁壺である。口縁部は外反し、粘土紐を貼り付けて肥厚させる。頭部には一条の沈線をもつ。表面は摩滅しているが、外面ともにヨコナデ調整が確認できる。胎土には白色を帯びた浅黄橙色を呈し、角閃石を多く含む。木本礼城跡採集資料でも、同一型式の資料が確認されている(第2章参照)。

#### (2) 古墳時代の遺物(第54～56図)

##### ア D・E-4・5区出土遺物

309～311は、成川式土器の壺の底部片である。いずれも脚台部分は欠損し、煤や被熱痕はみられない。309.

310は、外面を縦方向のケズリの後、ナデ調整される。311は、表面の摩滅が激しいが、ナデ調整であることは確認できる。

##### イ B～E-11～18区出土遺物

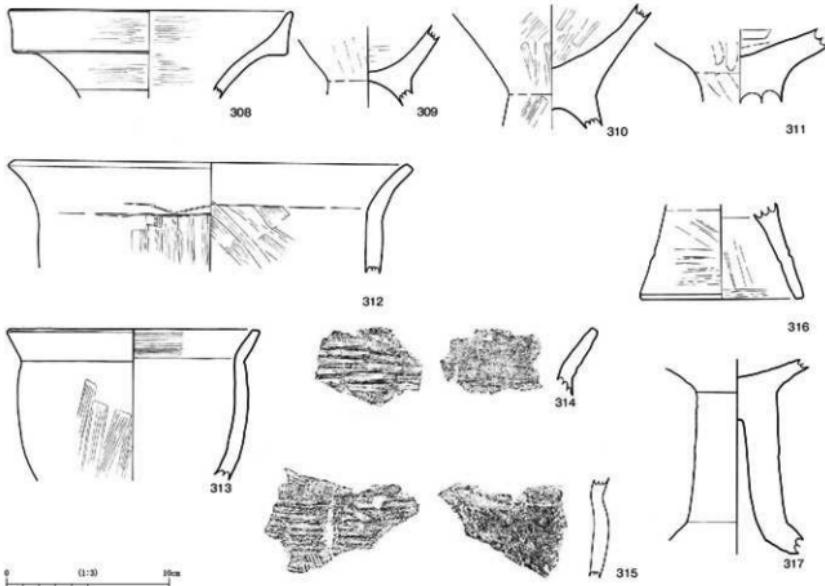
312は成川式土器の壺である。中津野式に相当し、口縁がくの字状に外反し、口唇部は後を成す。外面は縦方向のケズリがみられ、いわゆるカキアゲ状の口縁である。内面は斜方向のケズリで調整され、口縁部はヨコナデで調整される。

##### ウ B～E-18～25区出土遺物

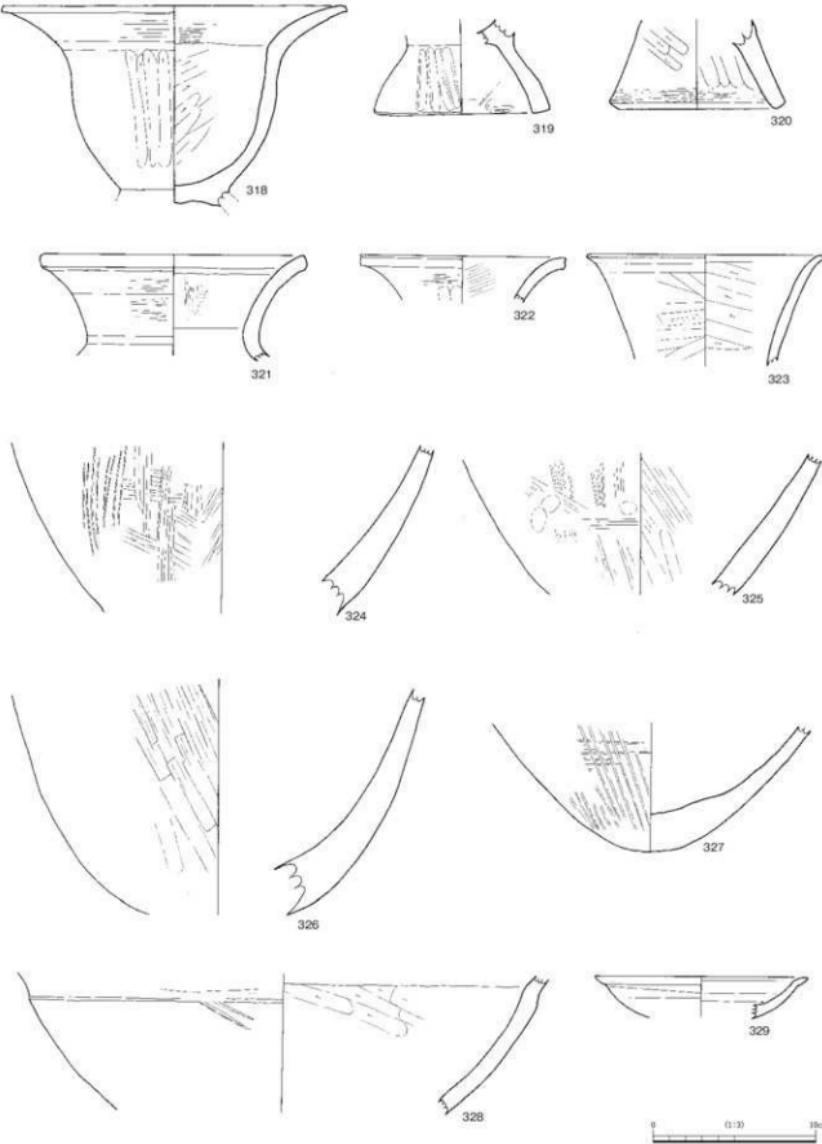
313～316は成川式土器の壺である。313は小型の壺である。口縁部がくの字状に外反するが、やや立ち気味になる。外面と口縁部内面にはハケメ調整がみられるが、表面の摩滅が激しい。314、315は、外面にタタキがみられる資料である。器形や胎土の特徴から、成川式土器の範疇に収まるものと判断した。外面に平行タタキ痕がみられ、内面はナデで調整される。

316は壺の脚部である。ハの字状に直線的に伸び、端部がやや先細りになる。内外面ともにナデ調整である。

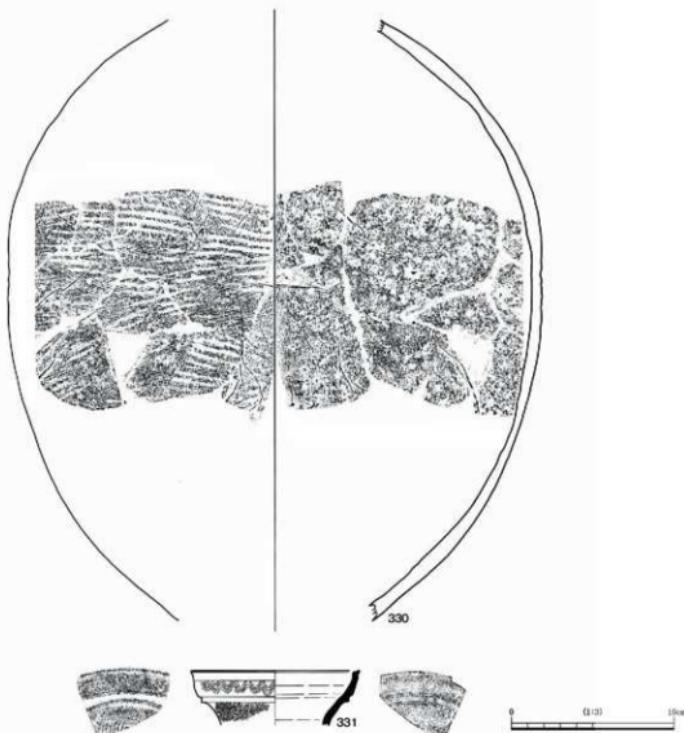
317は高壺の脚部である。表面の摩滅が著しく、器面



第54図 弥生・古墳時代の遺物



第55図 古墳時代の遺物（1）



第56図 古墳時代の遺物(2)

調整は特定できない。胎土は粗く、石英や白色鉱物、角閃石を多く含む。

#### 工 B・C-26~28区出土遺物

318~320は成川式土器の壺である。318は成川式土器の小型壺で、脚部が欠損する。口縁部が長く、大きく外反する。肩部は外面が縱方向の粗いケズリ。内面はヨコナデで調整され、口縁部はナデ調整である。319、320は脚部である。319はやや丸味を帯びる形態をもち、内外面に強い縱方向のケズリ痕が残る。端部は平坦面を成し、方形状になる。320は直線的に伸び胎土には角閃石が多く含まれる。

321~328は壺である。321~323は、壺の口縁部で、外反する。調整は内外面ともに丁寧なヨコナデである。323は口唇部がやや先細りになる。324~327は底部である。いずれも外面上には粗いハケメ調整後、ナデで調整される。内面はナデである。外面上には部分的に赤化した

箇所があり、被熱痕と思われる。

328は鉢の肩部である。表面は摩滅のため粗い。外面は工具痕が2ヶ所みられる。329は小型鉢と考えられる。口縁部は短く外反し、丸味を持った体部をもつ。

330は、古式土器の範疇に入るものと考えられる。長胴形を呈し、器壁が非常に薄い。外面は緻密なハケメ調整の後、斜め方向の平行タタキが全面に残る。内面は、当て具痕と思われる僅かな凹凸がみられる。また、外面より内面が煤の付着範囲が広い。胎土には石英、白色鉱物を多く含む。胎土の特徴では他の成川式土器と類似するが、形態的特徴、製作技法を鑑みると、肥後系の土器とを考えられる。

331は須恵器の壺である。口縁部と頸部に櫛描波状文をもつ。口部は短く、外上方へひろがり、頸部と口縁部との境界には僅かにつまみ出した鋭い突帯が巡っている。初期須恵器でTK 208相当の資料で、5世紀中~後半段階に相当するものと考えられる。

#### 4 古代の調査

古代の調査では、D-14区のⅣ層中で土師器の埋納遺構が検出されている。遺物については調査区全域で出土するが、数量は多くない。なお、遺構外出土遺物の内黒土師器については古代末～中世前期に相当する資料が主であるが、古代該当の土師器との関連から古代の範疇に入れて報告する。

##### (1) 遺構

###### ア 土坑7号(第58図)

検出状況 D-14区で溝状遺構3号を掘り下げている際に、土師器の塊が一部露出する状態で確認された。

形状・規模 平面形は中央部がすさまる瓢箪型を呈する。規模は、長軸(推定)45cm、短軸21cmであり、検出面からの深さは12cmである。床面は裏側がやや低くなる。

埋土 褐色土で、周囲の土と色調が似ていたが、やや黒みが強く、軟質であった。

遺物出土状況 土坑内から土師器の塊、壺、小型の甕の3点が出土した。塊が正位の塊に被せられた状態で検出され、甕は逆位の状態で検出した。

遺物 332は土師甕である。器高が12cmほどの小品型で丸底を呈し、頸部でややくびれて、口縁部が外反する。内面下半部は指頭圧痕が残る粗いナデ調整が施され、上半部、口縁の屈曲部まではケズリで調整される。口縁部と外縁は内面に比してナデ調整が施されるが、指頭圧痕は残り、口縁部平面形は歪む。外面のほぼ全面と内面の底部付近に厚く煤が付着している。口縁部が四分の一程欠損しており、意図的に打ち欠いたものと思われる。

333は壺である。完形品で、底部切り離しはヘラ切り

である。厚さ9mm程の円盤状の底部をもつ。緩やかに立ち上がり、上方へ立ち上がる。体部はやや丸味をもつ。内外面ともに丁寧な回転ナデで調整され、胎土には1～3mmほどの小穢や赤色鉱物が含まれる。

334は壺である。体部がわずかに欠損するが、良好な状態で出土している。高い高台を有し、接地面は5mm程の平坦面が作られる。底部から緩やかに立ち上がり、口縁部が外反する。内外面の調整は回転ナデであり、壺が被さっていた内面底部付近の表面は摩滅している。これらの3点は、10世紀後半階に位置づけられる。

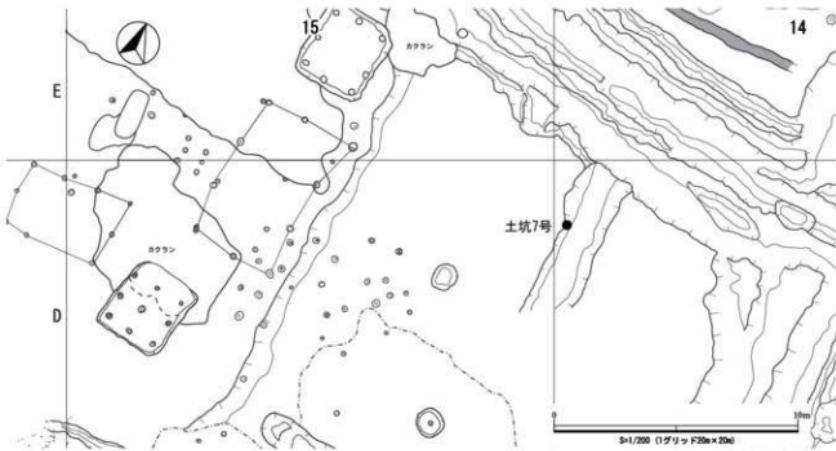
###### (2) 遺構外出土遺物(第59・60図)

古代の遺構外出土遺物に関しては、調査区ごとに報告する。

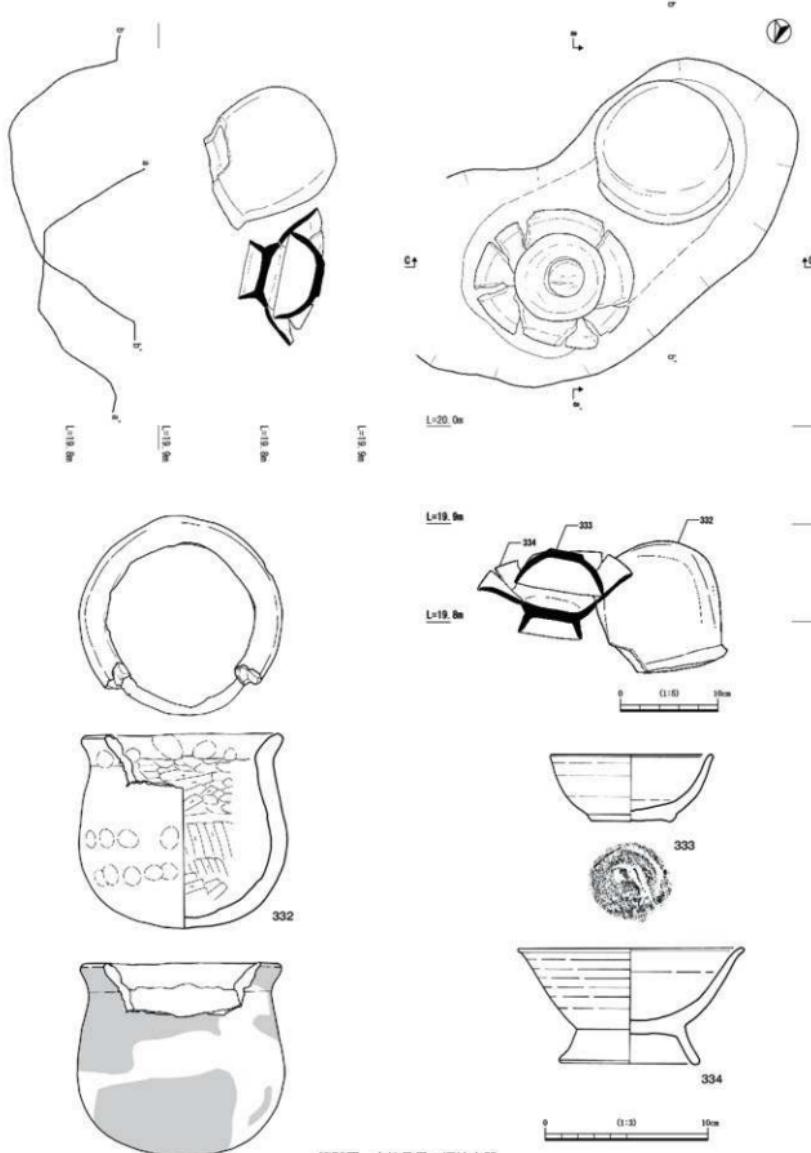
###### ア D・E-4・5区出土遺物(第59図)

335は土師器の甕の口縁部である。口縁部で外反し、内面にはケズリ痕が残る。336～338は土師器の壺である。336は体部がやや曲線を描いて立ち上がる。全体的に赤褐色を呈するが、二次焼成によるものか、赤色土器であったかは表面が摩滅しているため、判断できない。337、338は壺の高台である。337は高台が低く、ハの字状に開き、端部は丸く収まる。338の高台は垂直に立ち、端部は丸く収まる。内面見込みは回転ナデにより、僅かに凹む。表面の摩滅が激しいが、内面には僅かに黒色化した箇所があり、内黒土師器の可能性も考えられる。

339～358は黒色土器Aで、全て内黒土師器である。347、351のような高い高台のものは古代の範疇に入るが、それ以外は高台が低く、ハの字状に開く資料に関しては中世前期に上る可能性が高い。339、340は高台が



第57図 古代遺構配置図



第58图 土坑7号·埋纳土器

短く端部は丸く收まり、高台内は丁寧なナデ。外面はミガキが施される。外面の上部まで黒色化している。341～344は体部が丸みを持った直口縁である。外面の上部まで黒色化し、内外面ともに横方向のミガキが施される。

345、346は体部が丸みをもって立ち上がり、口縁部が僅かに内面に入る。347は「ハ」の字に聞く高い高台で、丁寧な回転ナデで調整される。体部との境目を意図的に打ち欠いた可能性が高い。

348、349は低い高台で外方にはあまり間がない。高台内にナデ調整が施される。349は、表面の摩滅のため外面の調整は確認できない。350、351の高台内は丁寧なナデ調整が施される。351は体部との境を打ち欠いている。また、底部中央部が焼成後に穿孔されており、紡錘車の紡輪として再利用された可能性がある。なお、高台内面に矢印のような線刻が3本刻まれている。穿孔部分に線刻はみられないため穿孔の方が後の可能性がある。

352は中央部から緩やかに立ち上がる5mmほどの短い高台を有するものである。353は高台が低く、端部は丸く收まる。内面は横方向のミガキが施される。表面の摩滅により、黒色化部分が部分的にしか確認できない。354は高台端部が丸く先細りになる。体部に底部切り離しの際の糸切り痕と思われる痕跡が残る。355は高台の作りが粗い低い高台をもつ。356は高台内がナデ調整により僅かに凹む。

357は内外面とも赤化している箇所がみられるが、表面の摩滅が著しいため、詳細は不明である。358は中央部から緩やかに立ち上がる5mmほどの短い高台を有するものである。

359、360は楠葉型の黒色土器B（両黒土器）の底部である。焼成が硬質で瓦質に近く、他の内黒土器とは胎土が異なる。高台は低く、台形状になり、いずれも内面は丁寧なミガキが施される。360は体部がほとんど残存していないため外面の詳細は不明だが、内面にはミガキが施される。形態的特徴等から、10世紀後半～11世紀中頃のものと考えられる。

361～363は須恵器である。361、362は宝珠を呈す蓋のつまみである。363は壺の頭部である。外面に丁寧なナデ調整が施され、内面はナデ調整と指頭圧痕が残る。364、365は焼塙土器の口縁部である。内面に粗い布目痕が残る。366は瓦である。格子目状の叩き痕と布目痕が明瞭に残る。焼成が不良で、浅黄褐色を呈す。

#### イ B～E-11～18区出土遺物（第59図）

367～374は須恵器である。367は壺で、体部が直線的に外傾する。硬質で、内外面ともに丁寧な回転ナデで調整される。

368、369は高台付壺である。高台の断面が方形状を成し、稜を成す。368は高台内面に線刻と思われる一条の

直線がみられる。また、高台の付け根が回転ナデ調整により凹んでいる。369は高台がほぼ直に立ち上がり、内外面ともに丁寧な回転ナデで調整される。いずれも8世紀後半～9世紀前半段階のものと考えられる。

370、371は壺である。370は外面に格子目叩き痕が残り、内面はナデで調整される。371は肩部で、外面に平行叩き痕が残る。内面は上部にナデ調整、下部には同心円状の当て具痕が残る。焼成があまく、にぶい黄褐色を呈す。

372～374は壺である。372は肩部で外面に灰釉がかかり、内面には粗いナデで調整される。373、374は底部である。373は底部が円盤状で、段を持つ。器壁は薄く、内外面のナデ調整も粗い。内外面の上部には自然釉の付着がみられる。374は硬質で、底部と比較して器壁が厚い。内外面はナデ調整で、胎土には5mmの大い小窓が含まれる。

#### ウ B～E-18～25区出土遺物（第60図）

375、379は土器器の壺である。375は口縁部が外反し、外面は縱方向の緻密なハケメ、内面はケズリで調整される。口縁部はナデ調整だが、僅かにハケメ痕が残る。379は肩部である。外面には強い横方向のナデ、内面にはケズリで調整される。胎土には黒雲母が少量含まれる。

376～378は黒色土器である。376、377は内黒土器、378は両黒土器である。376は高台が垂直に立ち上がり、端部がやや先細りになる。内面はミガキ。外面がナデ調整である。377は高台内が回転ナデ調整により凹み、中央部が盛り上がる。胎土には約2mmの大赤鉄物を含む。

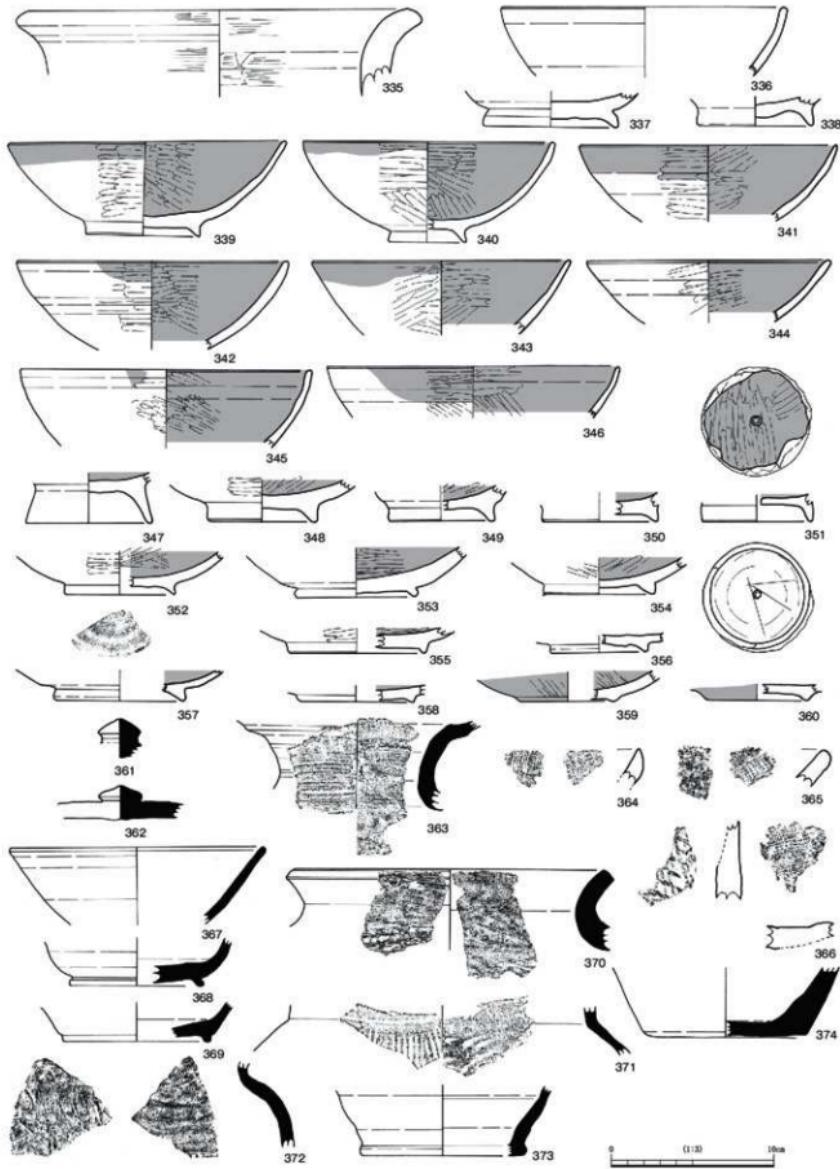
378は黒色土器Bで、両面黒色化する。底部切り離しは糸切りで、底部以外はミガキで丁寧に調整される。380は土器器の壺である。つまみ状の鉢を有し、鉢の周囲に直径6.5cmほどの平坦面を作り、口縁端部は内湾する。調整は全面ナデ調整である。

381～384は須恵器である。381～383は壺である。381は二重口縁を呈す壺である。382は肩部で、丸みをおびて形態をもつ。内外面はヨコナデで調整される。硬質で灰黄色を呈す。383は肩部の把手部である。把手の右側は削って面取りされ、断面が方形状を呈す。384は壺の胴部である。外面に格子目叩き痕、内面に平行状の当て具痕が残る。焼成は良く、橙色を呈す。

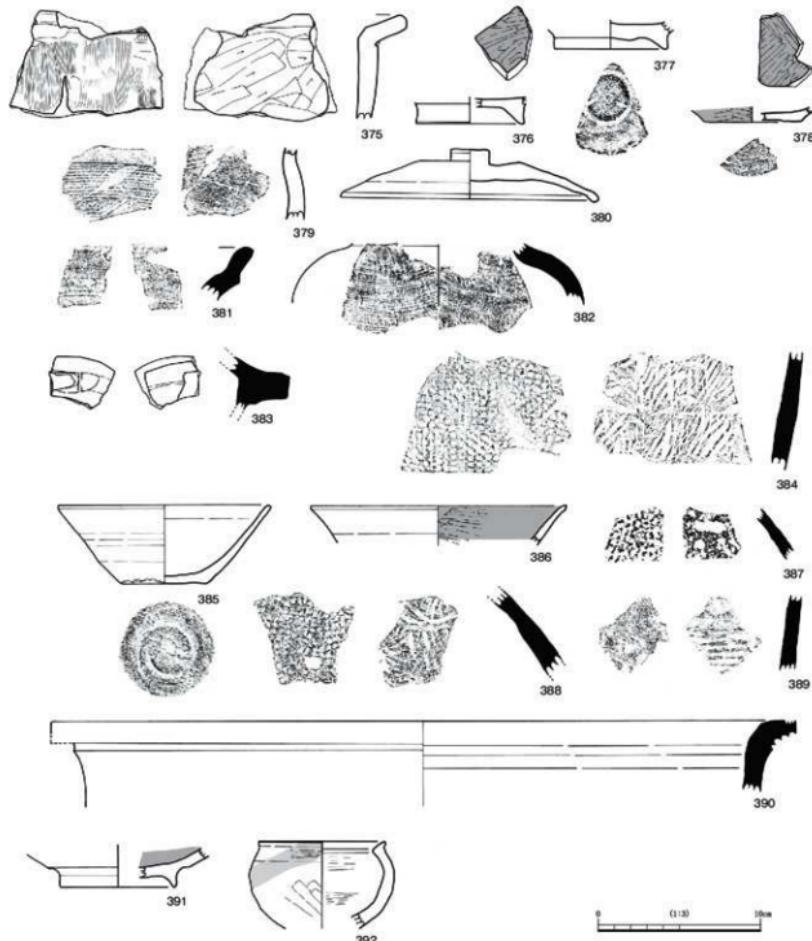
#### エ B・C-26～28区出土遺物（第60図）

385は土器器の壺である。底部切り離しはヘラ切りで、切り離し後に体部下部をヘラ削りで粗く面取りする。386は内黒土器である。口縁部が外方に伸び、僅かに外反する。内面の黒色部分にはミガキ。外面はヨコナデで調整される。外面の上部まで黒色化する。

387～390は須恵器の壺である。387、388は胴部片で



第59図 古代の遺物（1）



第50図 古代の遺物（2）

外面に格子目叩き痕。387は内面に平行状の當て具痕。388は同心円状の當て具痕が残る。389は外面にナデ調整。内面は平行状の當て具痕が残る。390は口縁部である。上下に割れ口があり、二重口縁を呈するものと考えられる。内外面には灰軸がかかり、2mmほどの白色の小穂を含む。

#### 才 出土区不明遺物（第60図）

391は内黒土師器である。表面が摩滅するため、詳細な調整は確認できない。腰部が強いヨコナデにより凹み、段を成す。392は小壺もしくは壠堀である。口縁部は短く、直口縁に近い。口縁部、内面は丁寧なナデで調整されるが、外面の調整は粗いナデである。外面には煤が帯状に薄く付着する。やや硬質で、灰黄色を呈す。

## 5 中世の調査

中世の調査は調査区の東側からD・E-4・5区、C-E-12~15区及びB-E-19~26区で行った。第2節で述べたとおり、中郡遺跡群の堆積状況は非常に悪く、中世の包含層であるII層は、丘陵の一部や谷地形の底付近等の一部で確認されるだけであった。遺構の検出は、II層が残存している地点ではII層掘削と平行して行い、それ以外の地点では表土直下で行った。中世に該当する遺構の埋土は、暗褐色～黒色を呈する。

### (1) D・E-4・5区の調査

#### 調査の概要(第61図)

D・E-4・5区の調査は平成21年度に行なった。調査時には、本地区周辺の小字名をとつて「金剛園地区」と称した。D・E-4・5区周辺は、ほとんどの地点で地山であるⅦ層(シラス)まで削平を受けており、旧地形がほとんど残らない状況であった。したがって、遺構及び包含層がほぼ消滅している状況であったが、D・E-4・5区では、II層及び中世の造成が確認され、表土直下のシラス上面で遺構が確認された。

検出された遺構は、掘立柱建物跡1棟、土坑9基、柱穴群及び上記の焼土である。また、詳細は不明だが、シラスを階段或いはスロープ状に掘削した様子なども確認された。

**中世の造成(第62図)** 中世の造成は2回行われたようである。1回目の造成は、D-5区の一段低い地形で確認され、II層の下で、黒褐色土とシラスの混土で行われていた。この造成土の上面には複数の焼土が見られ、この周辺では盛んな土地利用を想定させる。さらにII層が堆積した後に2回目の造成が行われ、その際の造成土は灰茶褐色土を呈する。造成面の焼土域周辺から出土した遺物と、柱穴から出土した遺物はここで報告する。

393は土師器の皿である。内面は器壁の立ち上がり部分がやや凹み、底面中央部は盛り上がる。394、395は鍋運育文をもつ龍泉窯系青磁碗II類である。高台が方形状を成す。豈付及び高台内は露胎する。394は395に比して蓮弁が幅広である。395は体部の1/4弱が欠損するが、良好な状況で出土している。

397は土師器の皿である。ほぼ完形で出土した。底部切り離し痕は糸切りである。398は滑石製石鍋の鰐部の二次加工品である。鰐部に1カ所穿孔がみられる。

396は白磁碗V類である。扁平な玉縁状の口縁部で、釉が厚くかかる。

#### 掘立柱建物跡1号(第63図)

**検出状況** D-5区で、Ⅶ層上面で検出された。

**形状・規模** 平面形は $2 \times 4$ 間である。長軸方向はN $10^{\circ}$ Eを示す。

**柱穴跡** 柱穴跡の上部は削平により消滅しており、検出面からの深さが浅いものと深いものがある。各柱穴跡の床面にレベル差があるという特徴を示す。

#### 土坑

土坑は13基検出されたが、報告可能なものは9基のみである。

#### 土坑8号(第64図)

**検出状況** D-5区のⅦ層上面で検出された。西側を土坑9号に切られる。

**形状・規模** 平面形は略南北方向に長い隅丸長方形を呈し、長軸はN $23^{\circ}$ Eを示す。規模は、長軸91cm、短軸50cmであり、検出面からの深さは14cmである。断面形は、床面は南側に向かって緩やかに下り、壁面はやや外傾し立ち上がる。

#### 土坑10号(第64図)

**検出状況** D-5区でⅦ層上面で検出された。

**形状・規模** 平面形は北東～南西方向に長い隅丸長方形を呈し、長軸はN $47^{\circ}$ Eを示す。規模は、長軸142cm、短軸83cmである。断面形は、床面はほぼ水平だが、長軸の中央付近でやや段が付く。検出面からの深さは33～45cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

**埋土** 埋土①は、褐色土で粘性がなく、軟質である。埋土②は灰黄色土で粘性がなく、軟質である。埋土③は、褐色土シラスが混ざる。粘性がなく、軟質である。

#### 土坑11号(第64図)

**検出状況** D-5区で、検出された。西側の一部が溝に切られている。

**形状・規模** 平面形は略円形を呈する。規模は、径87cmであり、検出面からの深さは15cmである。断面形は、床面はほぼ水平で、壁面はわずかに外傾し立ち上がる。

**埋土** 暗褐色を呈する火山灰土を基調とする。

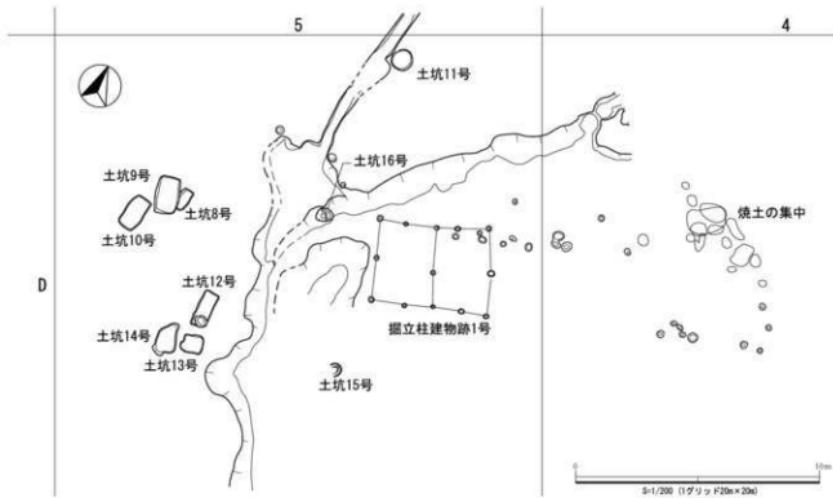
#### 土坑9号(第65図)

**検出状況** D-5区で、Ⅶ層上面で検出された。東側の土坑8号を切っている。

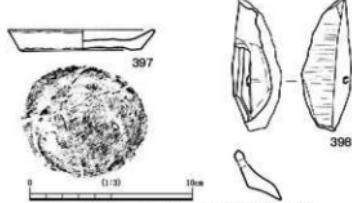
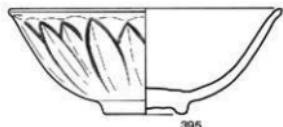
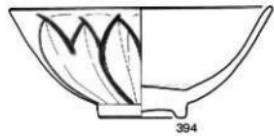
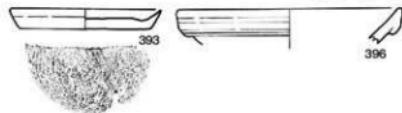
**形状・規模** 平面形は南北方向に長い隅丸長方形を呈し、長軸はN $9^{\circ}W$ を示す。規模は、長軸151cm、短軸99cmであり、検出面からの深さは76～90cmである。断面形は、床面はほぼ水平で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

**埋土** 暗褐色を呈する砂質土でシラスを含む。

**出土遺物** 底面付近から鉄釘が出土した。いずれも木質が付着している。鉄釘は床面の3ヶ所からは数点ずつ出土し、間隔は長軸方向で126cm、短軸方向で41cmを測る。長軸方向の平面図左右の鉄釘集中部分を結ぶ線上から、3点の鉄釘が出土しており、それぞれの鉄釘の間隔は南



第61図 D-E-4·5区遺構配置図



第62図 D-E-4·5区出土遺物

側から42cm, 26cm, 17cm, 41cmを測る。鉄釘は14点を図化しているが、これ以外に腐食や残存状況が不良のため図化できなかつた小片もある。

**棺** 人骨や骨片等は出土していないが、形状及び釘の出土状況や木質の付着などを鑑みると木棺墓と認定できる。側面の板の厚さは1cm程度であると想定される。掘り込みの南西側及び南側からは鉄釘が出土していないことから、釘が腐食して残存していないか、もしくは鉄釘を使用しない部材で閉われていた可能性が考えられる。

#### 土坑15号(第66図)

検出状況 D-E-5区の造成面で検出された。西側がトレンチに切られている。

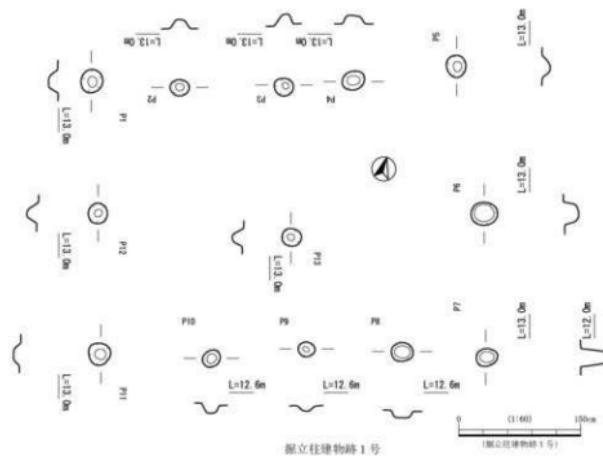
**形状・規模** 平面形は円形を呈すると考えられる。規模は、残存する範囲では径51cm。検出面からの深さは41cmである。断面形は、中段で平坦面を有し、中央部を段掘りしている。床面は傾斜し、不定形である。

**遺物出土状況** 床面から約30cm上からほぼ完形の土師器壺が1点、完形の土師器皿が2点出土している。

**出土遺物** 413は土師器壺である。ほぼ完形で出土した。器壁が直に立ち上がり、内外面は丁寧な回転ナデ調整する。414, 415は皿である。2点とも完形で出土している。器形、大きさがほぼ同じで、器高が低く、内面の作りだしも浅い。底部切り離し痕は糸切りである。

#### 土坑16号(第66図)

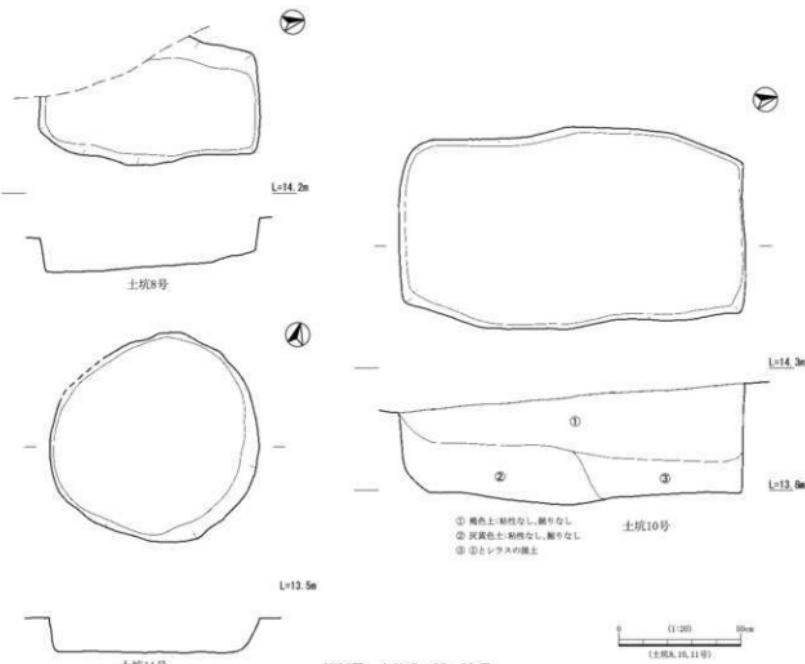
検出状況 D-5区で検出された。



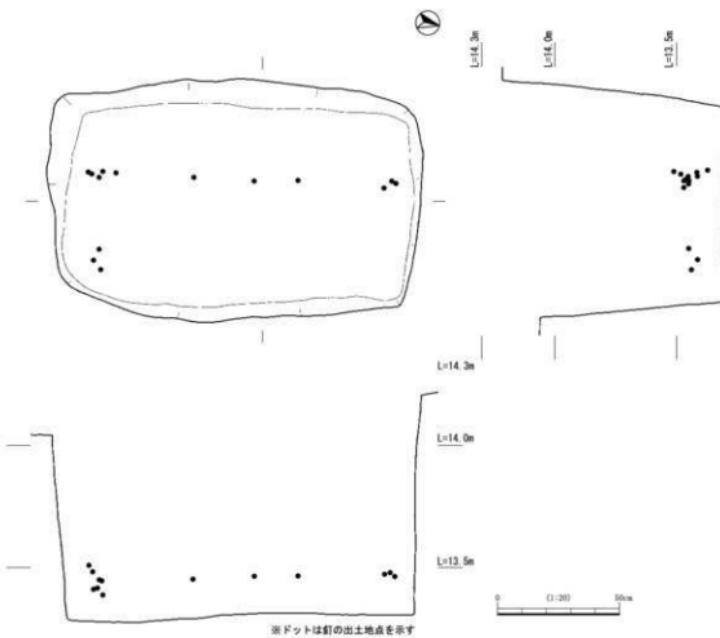
掘立柱建物跡 1号		
No.	柱穴 (cm)	柱間距離 (cm)
P1	29	27
P2	24	19
P3	24	20
P4	28	21
P5	26	22
P6	33	19
P7	27	19
P8	27	20
P9	21	15
P10	23	17
P11	28	23
P12	25	22
P13	26	13

主軸	方向	柱間距離	
		W	R
N10° E	P1-P2	108	3.16
	P3-P4	130	4.29
	P4-P4	84	2.77
	P4-P5	120	4.22
	P7-P8	160	3.29
	P8-P9	120	3.96
東方	P9-P10	116	3.82
	P10-P11	137	4.52
	P5-P6	182	6.00
西方	P6-P7	177	5.94
	P11-P12	173	5.70
	P12-P1	161	5.31

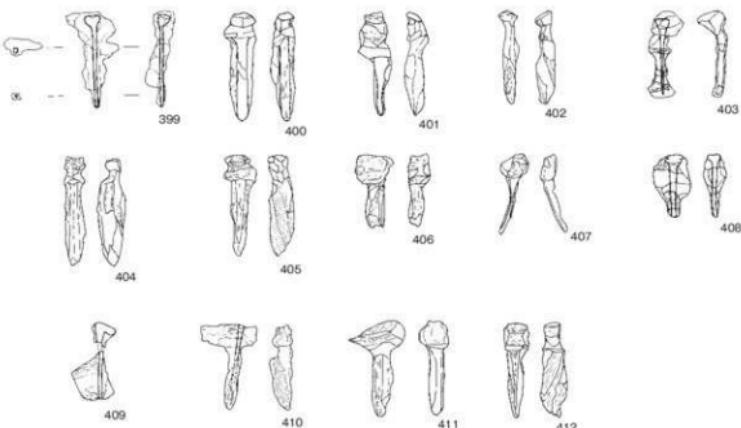
第63図 掘立柱建物跡 1号



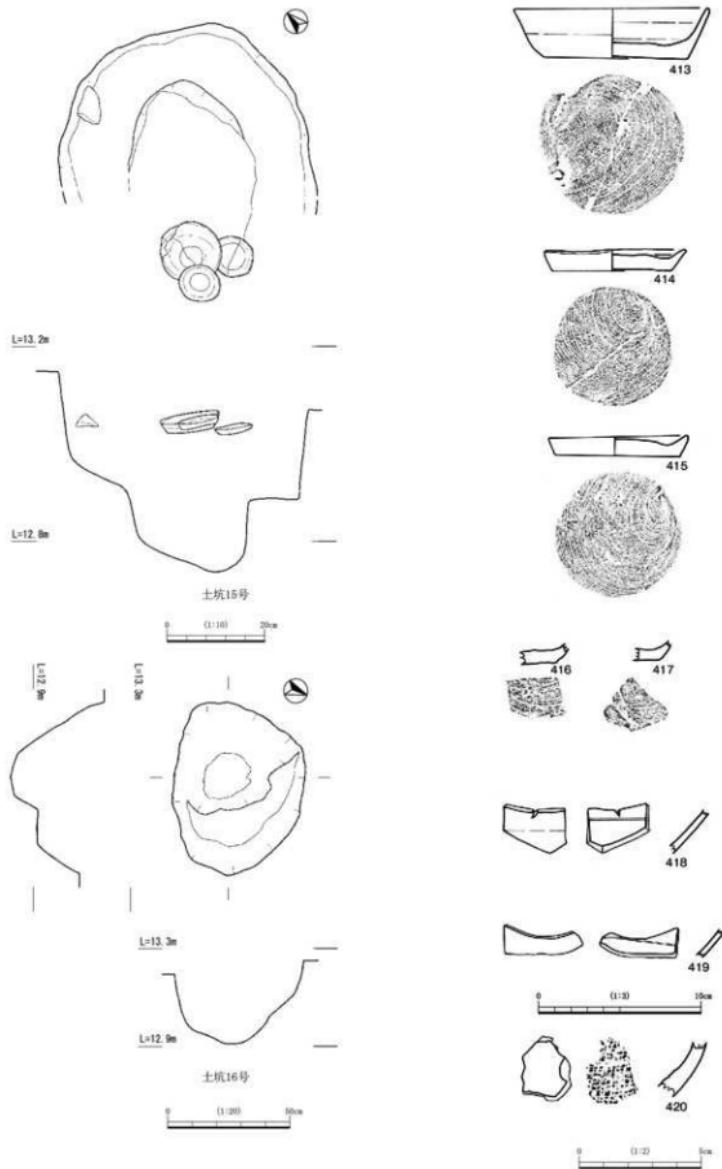
第64図 土坑 8, 10, 11号



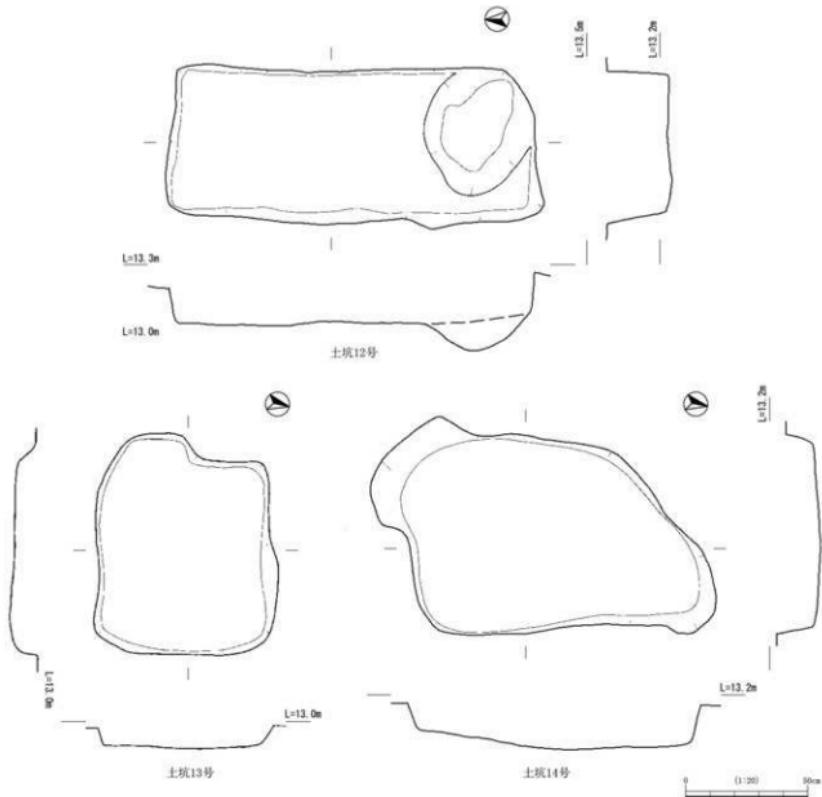
●ドットは釘の出土地点を示す



第65図 土坑9号及び出土遺物



第66図 土坑15・16号及び出土遺物



第67図 土坑 12・13・14号

**形状・規模** 平面形は南北方向にやや長い略楕円形を呈する。規模は、長軸70cm、短軸53cmであり、検出面からの深さは38cmである。北側の掘り込み途中に平坦面を有し、そこからさらに10cmの二段掘りが行われている。

**出土遺物** 416、417は土器器の壊もしくは皿の底部である。糸切底である。418、419は白磁碗の胴部片である。内面に一条の沈線がみられる。420は焼塙土器である。内面に粗い布目痕が残り、外面は粗いナテ調整が施される。胎土が粗く、白色鉱物を多く含む。

#### 土坑 12号 (第67図)

**検出状況** D-5区で、VII層中から検出された。土坑13号・土坑14号に隣接する。

**形状・規模** 平面形は略南北方向に長い隅丸長方形を呈し、長軸はN 9° Eを示す。規模は、長軸150cm、短軸62cmであり、検出面からの深さは15～32cmである。断面形は、床面はほぼ水平で、南側に径50cm×46cm、深さ10cmの掘り込みを有する。

**埋土** 暗灰色を呈する砂質土で鉄分を含む部分が散在する。

#### 土坑 13号 (第67図)

**検出状況** D-5区で検出された。

**形状・規模** 平面形は略方形を呈し、南西隅がやや膨らむ。長軸はN 87° Eを示す。規模は、長軸91cm、短軸72cmであり、検出面からの深さは11cmである。断面形は、床面は西側に向かって緩やかに下り、壁面はやや外傾す

る。

#### 土坑 14 号（第 67 図）

検出状況 D - 5 区で、検出された。

形状・規模 平面形は隅丸の台形状を呈する。規模は、長軸 120cm、短軸 81cm であり、検出面からの深さは 18 cm である。断面形は、床面は東西方向にはほぼ水平で、南側から中央部に向かって緩やかに下り、中央部から北に向かって平坦になる。壁面はやや外傾する。

#### （2）C ~ E - 12 ~ 15 区の調査

##### 調査の概要（第 69 図）

C ~ E - 12 ~ 15 区の調査は平成 21 年度に行った。調査時には、周辺の小字名から「岡畠地区 1」と呼称した。本地点でも地形の改変が大きく、旧地形の残存状況は悪かったが、一部で II 層及び中世の造成が確認され、掘立柱建物跡、堅穴建物跡、柱穴及び溝状遺構等が検出された。また、調査区を南北に縱断する農道に平行するように南北方向に延びる大規模な堀跡 1 号が検出された。さらに、堀跡 1 号に直交し、東西方向に延びる堀跡 2 号も検出された。

堀跡 1 号、堅穴建物跡等と堀跡 2 号遺構の切り合い関係や、堀跡 1 号の壁面が平坦面に造成され、その面で遺構が検出されたことから、中世の複数の時期に大規模な土地の改変が行われたことが想定される。

なお、本地点から西に向かって標高は高くなるが、C ~ E - 16 区の西側から C ~ E - 17 ~ 19 区では、シラスまで削平を受けていたためか、遺構及び包含層は確認されなかつた。

##### 堅穴建物跡・堅穴状遺構

本地点では、堅穴建物跡 5 基と堅穴状遺構 1 基が検出された。シラスまで削平を受けているため、遺構の上部は消滅しているが、堅穴建物跡では床面及び炉跡を検出した。

#### 堅穴建物跡 1 号（第 68 図）

検出状況 E - 15 区で、表土直下のⅧ 層上面で検出された。北側の一部は擾乱により削平されている。

形状・規模 平面形は南北方向に長い隅丸長方形を呈し、長軸は N 8° E を示す。規模は、長軸 340cm、短軸 304 cm であり、検出面からの深さは 30cm である。断面形は、床面はほぼ水平で、壁面はやや外傾する。

柱穴跡 堅穴の四隅とその中に 8 基の柱穴が確認されているが、柱穴の深さは不明である。柱間は 0.9m ~ 1.6m である。

地床炉跡 中央部に焼土域がある。その周囲に 3cm 程の窪みがあり、検出状況から地床炉跡と想定される。地床

炉跡の周辺には径 1 m 程度の範囲にまで炭化物が認められた。

埋土 埋土のベースは、黒褐色を呈する砂質土で炭化物を含み、黄色の火山灰バミスが混ざる。

出土遺物 堅穴中央部の地床炉跡付近で瓦質土器の捏鉢片が出土している。421 は櫛万文竈の捏鉢である。口唇部から下に 8mm 程度をナデて、緩い段を有する。口唇部はナデ調整により丸みを帯びている。内面は横位を主とするハケメが施され、外面下部は指頭圧痕が残る粗いナデ調整。上部 2cm 程は横位のハケメが残る。

#### 堅穴建物跡 2 号（第 70 図）

検出状況 D - 15 区で、表土直下のⅧ 層上面で検出された。北側 3 分の 1 程度の部分（北側上方）は擾乱により壁及び床面の一部が残存していないが、周囲の壁の立ち上がり等から推定される範囲である。

形状・規模 平面形は南北方向に長い隅丸長方形を呈し、長軸は N 14° E を示す。規模は、長軸 328cm、短軸 292 cm であり、検出面からの深さは 20cm である。断面形は、床面はほぼ水平で壁面はやや外傾する。

柱穴跡 堅穴の四隅とその中に 8 基の柱穴が確認されている。柱穴の深さは 40 ~ 60cm で、柱間は 1 m ~ 1.1 m である。

炉跡 中央部に焼土域があり、隣接して径 28cm 程で周囲から 12cm 挖り込まれた炉跡がある。炉跡の周辺に径 70cm 程度の範囲で炭化物が広がる部分が 2ヶ所ある。

出土遺物 422 は土師器の皿である。体部外表面は直に立ち上がり、内面は緩やかに立ち上がる。423 は土師器の杯か皿の底部である。いずれも系底を有する。424 は須恵器裏の崩部である。内面に平行き目が残る。425 は管状土錐である。426 は鉄釘の可能性が考えられる。

#### 堅穴建物跡 3 号（第 71・72 図）

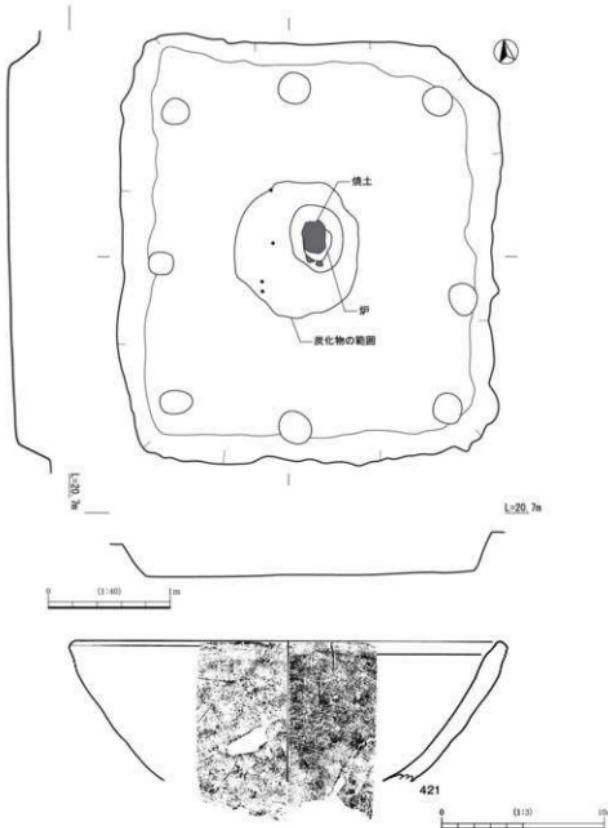
検出状況 C - 15 区で、表土直下のⅧ 層上面で検出された。すぐ東側に溝状遺構 1 号が位置する。

形状・規模 平面形は南北方向に長い隅丸長方形を呈し、長軸は N 1° W を示す。規模は長軸 374cm、短軸 321cm であり、検出面からの深さは 60cm である。断面形は、床面は緩やかな凹レンズ状となり、壁面はやや外傾し立ち上がる。

柱穴跡 堅穴の四隅とその中に南北方向に 3 基ずつ、東西方向に 4 基ずつ柱穴跡が計 10 基確認されている。柱穴の深さは 40 ~ 60cm で、柱間は南北方向に平均 144cm、東西方向に平均 84cm である。

炉跡 床面では、炭化物が集中し、焼土が検出される。また、炉跡と考えられる範囲が 3ヶ所検出された。

ステップ 南側に 2段のステップ状（階段状）の部分が



第68図 窪穴建物跡1号及び出土遺物

検出されたことから、ここに入り口のあった可能性がある。

出土遺物 427～431は土器師皿である。427は完形に復元できた。全て糸切り底を有する。432は白磁皿Ⅳ類である。口禿の皿で、口縁部が外反し、口唇部から下に内面3mm程、外面0.5mm程が無釉である。433は上田B類に相当する青磁碗である。片切形と丸形を混用して蓮弁文を施す。胎土が橙色を呈し、細かい灰釉が全面を覆うようにかかる。福建省産と考えられ、龍泉窯系青磁の模造品の可能性がある。434は龍泉窯系青磁碗Ⅱ-b類である。丸形で蓮瓣弁文が施される。

435は瓦質の片口鉢である。窓穴中央部の炉跡付近で

出土した。ヘラナデにより口唇部に斜めの平坦面をつくる。片口の一部が残る。内外面とも器壁の剥落が激しい。436は鉄製品である。幅13mm程度あり、左側で上方に屈曲する。用途は不明である。

#### 窓穴建物跡4号（第73図）

検出状況 C-15区で、表土直下のⅧ層上面で検出された。北側と東側の壁は擾乱を受け消滅している。炭化物を含む黒色のしみ込みの範囲から床面の範囲を想定した。

形状・規模 平面形は東西方向に長い隅丸長方形を呈し、長軸はN 84°Wを示す。規模は、擾乱を受けているため

16

15

14

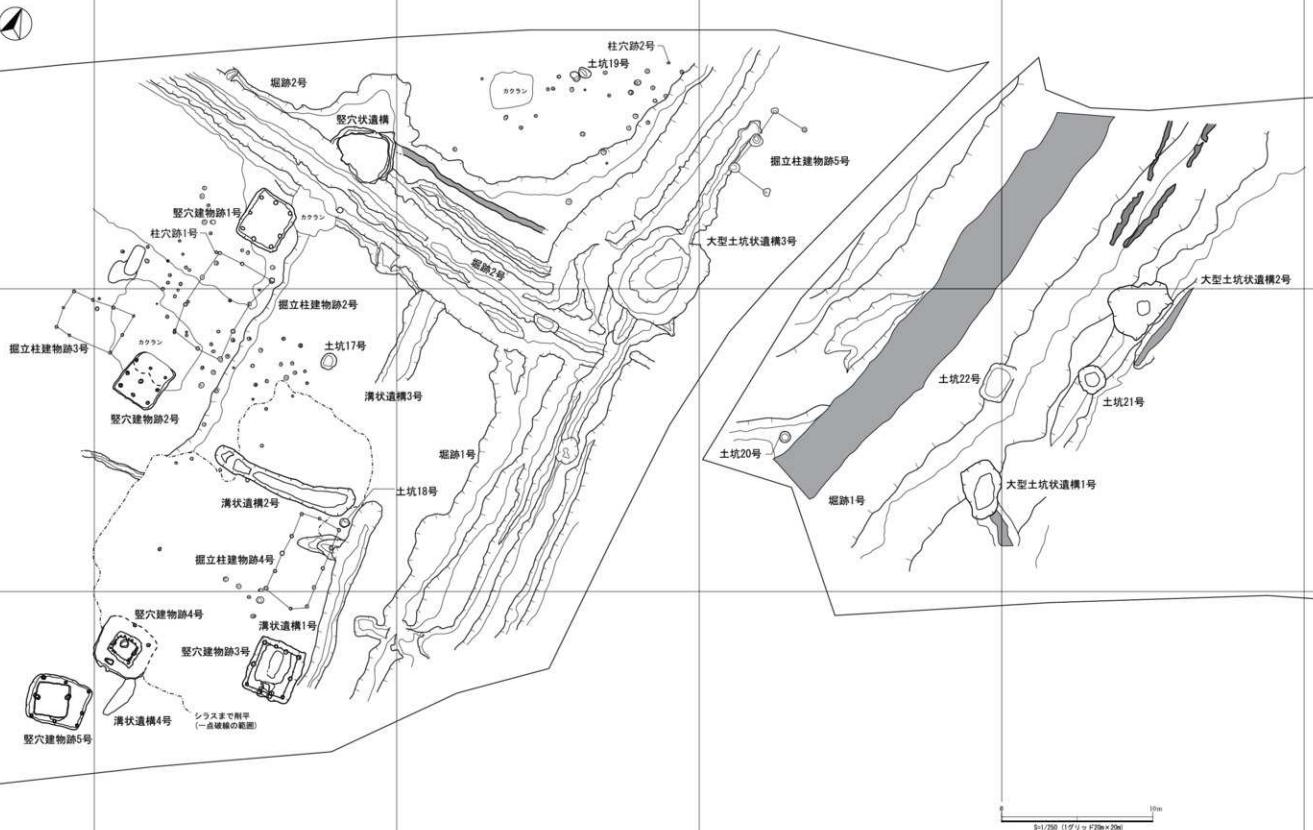
13

12

E

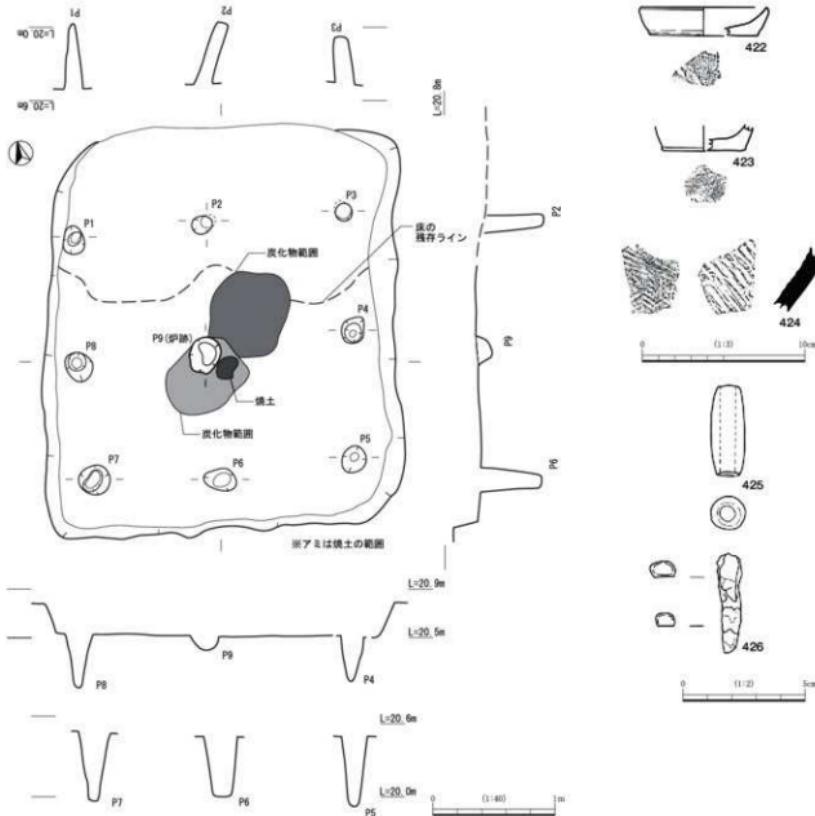
D

C



第69図 C～E - 12～16 区遺構配置図





第70図 壺穴建物跡2号及び出土遺物

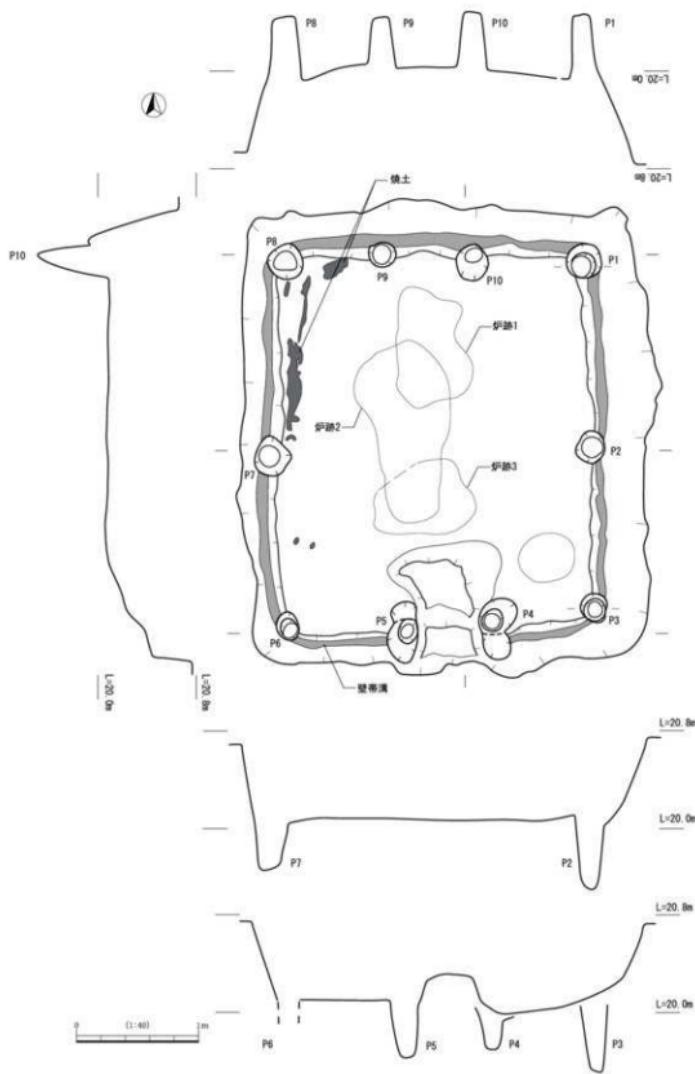
断定はできないが、推定で長軸375cm程度、短軸355cm程度であり、検出面から床面までの深さは30cmである。床面はほぼ水平だが、中央付近で192cm×180cm、深さ80cmの掘り込みがあり、二段掘りを呈する。この段掘り部分は、上部の壺穴の主軸と若干ずれる。また、最下部の貼り床の下から60×50cm、深さ28cmの土坑を検出した。南東側の角付近で溝状の掘り込みと接するが、関係は不明である。

**柱穴跡** 上面の床面では柱穴を3基検出した。また、中央部の段掘り部分では、4面に壁帶溝を有し、その内側に東西方向を軸とした2基の主柱と15基の小さな柱穴が巡る。

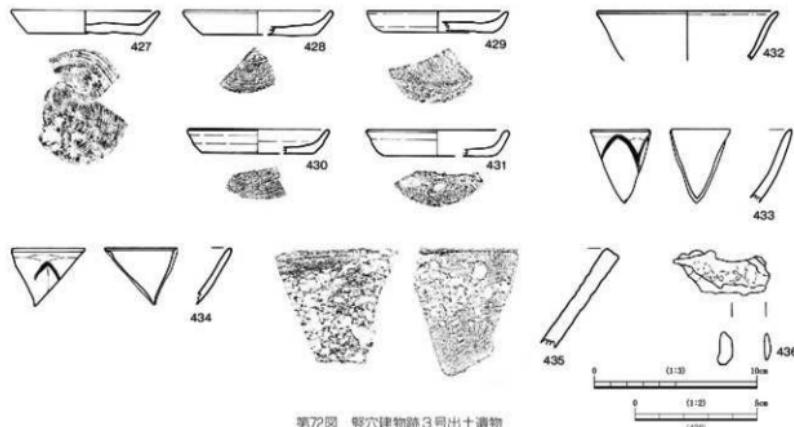
**炉跡** 壺穴建物跡4号では、複数の炉跡が検出された。炉跡は一部上下の重なりを有し複雑だが、最低でも4面は確認された。少し埋まるたびに、その上を地床炉として利用している状況がうかがえる。なお、最下部の炉跡床面出土炭化物の放射性炭素年代測定結果では、 $920 \pm 30$ yrBPという結果が得られている。詳細は第4章を参照されたい。

**埋土** 茶褐色土を主体とする。

**出土遺物** 437は土師器の环の底部と思われる。糸切り底を有する。



第71図 窓穴建物跡3号



第72図 穴穴建物跡3号出土遺物

#### 豎穴建物跡5号（第74図）

検出状況 C-16区で、表土直下のⅦ層上面で検出された。北側に豎穴建物跡4号が位置する。

**形状・規模** 平面形は東西方向に長い隅丸長方形を呈し、長軸はN 78° Eを示す。規模は、長軸400cm、短軸324cmである。検出面からの深さは30cmである。断面形は、床面はほぼ水平で、壁面はやや外傾する。中央やや西寄りに、主軸のずれた掘り込みがあり、220cm×220cm程度の方形を呈する。上部の床面からの深さは20cm程度である。埋土が連續している状況から、上部の豎穴を掘削する際に同時に掘り込まれたものと判断した。北側の床面には粘土貼りが施されていた。

**柱穴跡** 豊穴の四隅とその中間に8基の柱穴が確認されており、柱穴の深さは40~70cmである。柱間は南北方向で平均128cm、東西方向で156cmを測る。東西方向に2基の主柱が検出されている。また、P10内からは縁が出土している。

**炉跡** 上部の床面に対応する炉跡は豎穴のほぼ中央付近で検出された（第74図中の炉跡1）。また、段掘り部分からも、やや西側によった箇所で炉跡が検出された。

なお、炉跡出土炭化物の放射性炭素年代測定結果では、 $800 \pm 30$ yrBP、そして張床下の炉跡床面で $830 \pm 30$ yrBPという結果が得られている。詳細は第4章を参照されたい。

**出土遺物** 433は土師器の壺である。底部内部中央部はナデ調整が施され、周縁部には回転ナデがみられる。器壁は直線的に引き出される。439は土師器皿の底部である。441、442は龍泉窯系青磁碗II類の口縁部から胴部である。片切形で幅広の鍋運弁が施される。440は縁の羽口である。

#### 豎穴状遺構（第75図）

検出状況 E-15区の堀跡2号掘削後、Ⅶ層上面で検出された。全体が堀跡2号に切られており、北側はさらに擾乱を受け一部削平されている。

**形状・規模** 平面形は北側が突き出た五角形様を呈する。規模は、長軸404cm、短軸356cmであり。検出面からの深さは36cmである。断面形は、床面はほぼ水平で、壁面は基本的にはやや外傾するが、一部でオーバーハングしている所もみられる。内側の壁面外側に平坦面があり、そこからもう一度、壁が立ち上がる部分がある。柱穴跡や跡跡は確認できない。

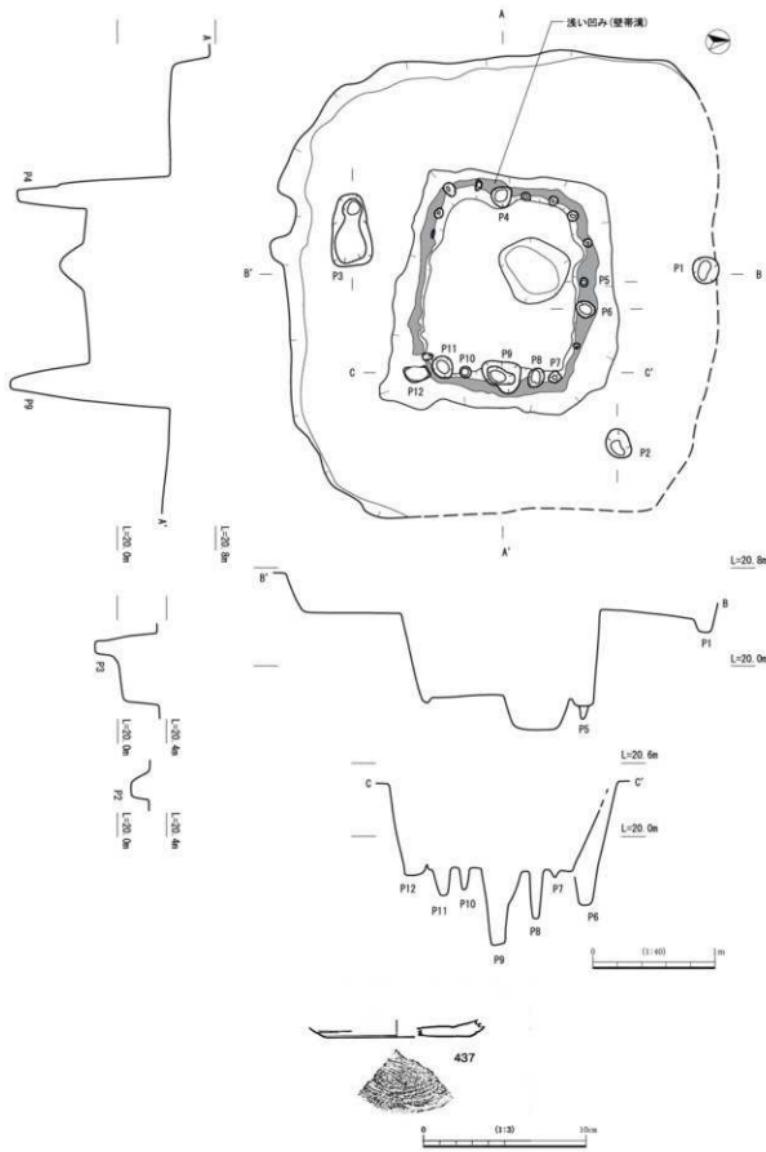
**出土遺物** 443~446は土師器の皿である。443は底部内面中央でナデ調整により平坦にするが、やや盛り上がる。内面の立ち上がりは回転ナデにより凹み、器壁をわずかに立ち上がらせる。444は底部で、糸切り痕が残る。445、446は底部内面中央部から強い回転ナデの痕跡がみられる。446は口縁部の内外面に部分的に煤が付着しており、灯明皿として使用された可能性が高い。皿はすべて糸切り底である。

447は中国陶器で、水注の肩部と思われる。外面に2条の沈線が施される。灰緑釉が全体にかかるが、部分的に無釉の箇所もみられる。

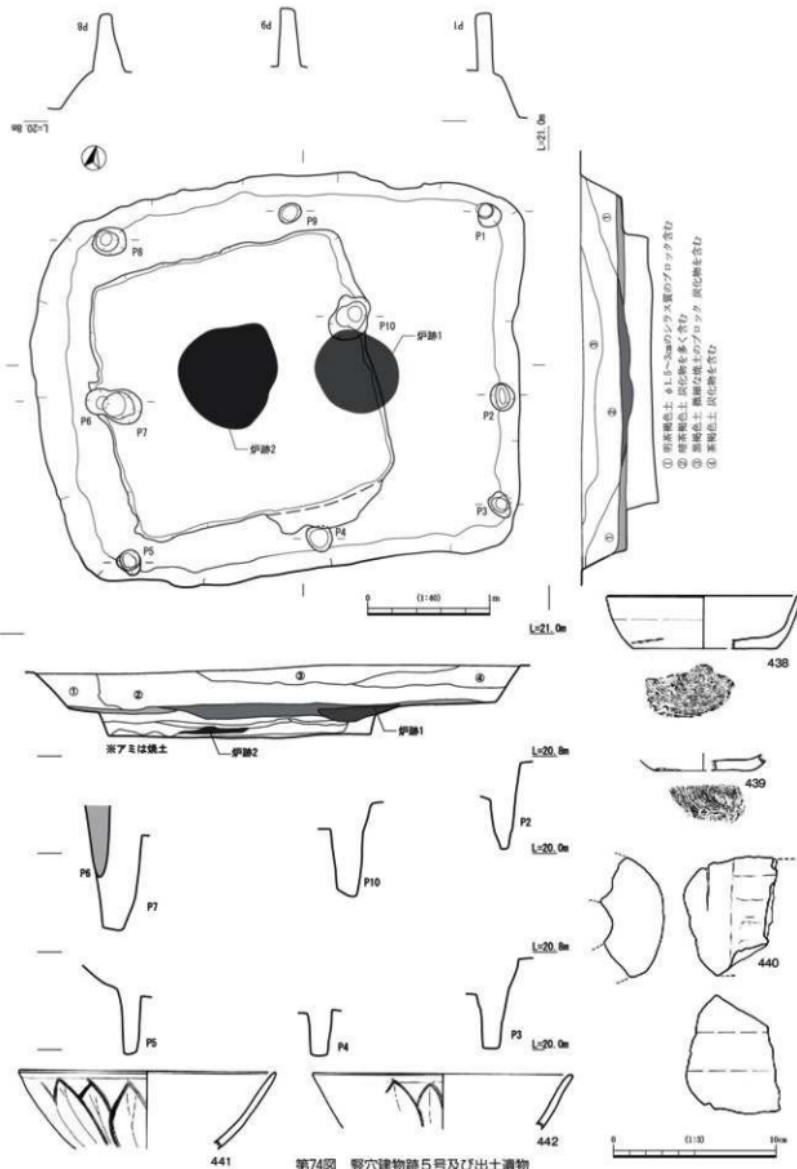
#### 掘立柱建物跡4号（第76図）

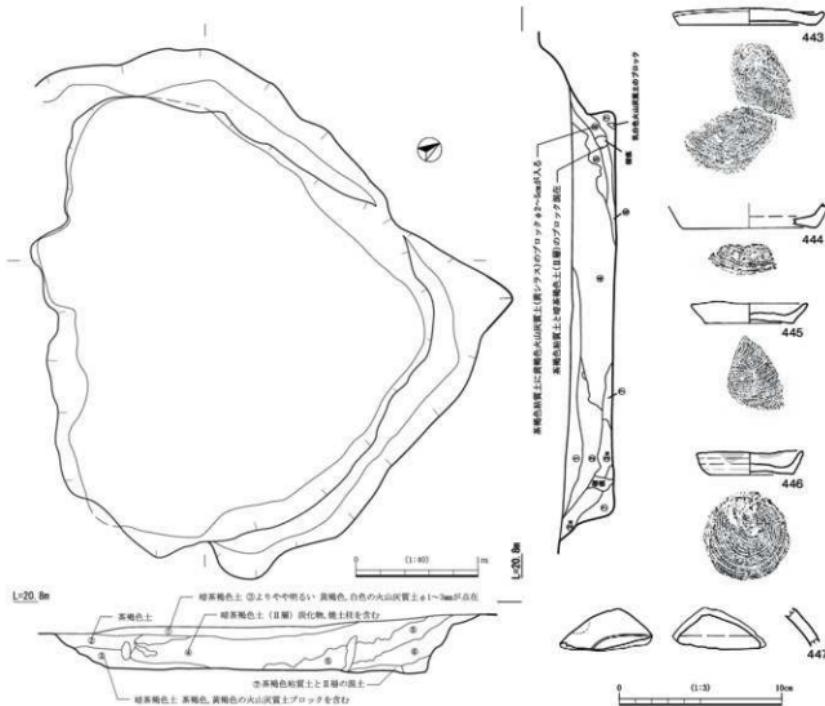
検出状況 C-D-15区で、Ⅶ層上面で検出された。一部を溝状遺構1号に切られる。

**形状・規模** 平面形は南北方向に長い2間×4間である。桁行方向はほぼ真北を示す。規模は、梁間間東側541cm、西側544cm、桁行間北側275cm、南側320cmである。



第73図 突穴建物跡4号及び出土遺物





第75図 穴状遺構及び出土遺物

### 掘立柱建物跡3号(第76図)

検出状況 D-15・16区で、VII層上面で検出された。一部擾乱を受ける。

**形状・規模** 平面形は東西方向に長い2間×3間であるが、南東部の桁行2本目の柱穴跡は未検出である。桁行方向はN 92°Eを示す。規模は、桁行間東側427cm、南側395cm、梁間間東側292cm、西側265cmである。

**埋土** 柱穴の埋土は茶褐色土である。

### 掘立柱建物跡2号(第77図)

検出状況 D・E-15区で、VII層上面で検出された。堅穴建物跡1号と堅穴建物跡2号に挟まる。

**形状・規模** 平面形は南北方向に長い2間×3間で、桁行方向はN 7°Wを示す。規模は、桁行間東側626cm、南側599cm、梁間間北側389cm、南側358cmである。

**埋土** 柱穴の埋土は茶褐色土である。

**出土遺物** 448は滑石製石鍋の口縁部である。P1から出土した。内外面とも縦方向の削り痕が残る。鋤部下には煤が付着する。

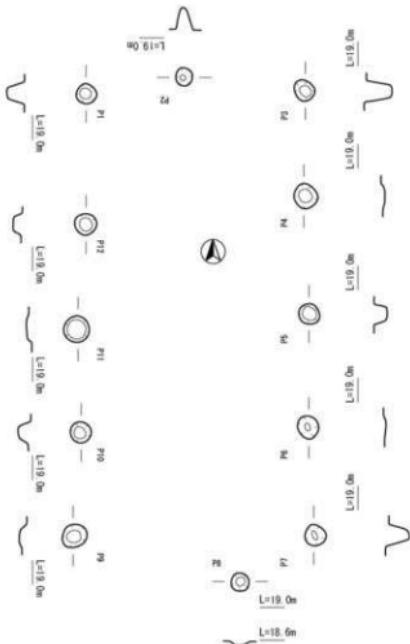
### 掘立柱建物跡5号(第77図)

検出状況 E-13区の、VII層上面で検出された。検出された付近には、堀跡1号の横面を造成し平坦面が造り出されている。建物跡の東側は調査区外へ続くと想定される。

**形状・規模** 現状での規模は、桁行間東側485cm、西側460cm、梁間間北側230cm、南側273cmである。

**柱穴跡内の礫** 固化しなかつたが、北側の東の柱穴を除いて礫が出土している。特に西側の桁行中央の柱穴から根石と想定される礫が5点程度出土している。

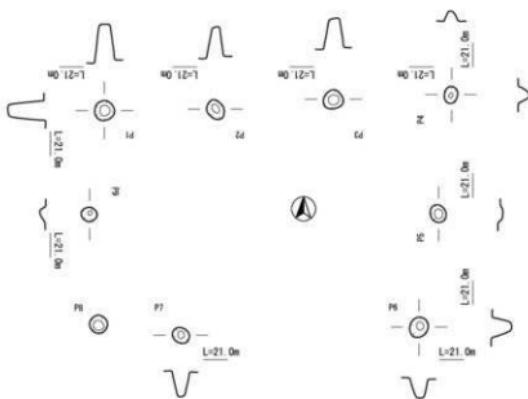
### 柱穴跡



掘立柱建物跡4号

掘立柱建物跡4号		
No.	柱穴 (cm)	
	直径	深度
P1	25	22
P2	22	18
P3	27	20
P4	31	24
P5	28	21
P6	29	22
P7	26	20
P8	23	20
P9	32	22
P10	26	22
P11	33	25
P12	28	22

主軸	方向	柱穴		柱間距離 cm	尺
		cm	尺		
N	東行	P1-P2	121	3.99	
		P2-P3	154	5.09	
		P1-P9	198	6.56	
		P9-P9	212	6.99	
		P3-P4	129	4.25	
		P4-P5	143	4.76	
N9°	東行	P5-P6	137	4.52	
		P6-P7	130	4.29	
		P9-P10	128	4.22	
		P10-P11	127	4.19	
		P11-P12	129	4.25	
		P12-P1	160	5.28	

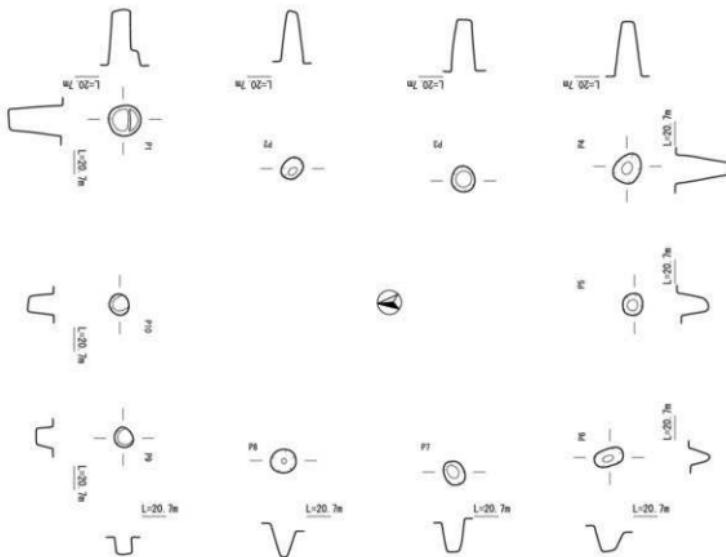


掘立柱建物跡3号

掘立柱建物跡3号		
No.	柱穴 (cm)	
	直径	深度
P1	25	21
P2	26	17
P3	25	20
P4	21	15
P5	23	17
P6	25	20
P7	22	15
P8	23	19
P9	20	17

主軸	方向	柱穴		柱間距離 cm	尺
		cm	尺		
N9° E	東行	P1-P2	130	4.33	
		P2-P3	145	4.79	
		P3-P4	144	4.75	
		P4-P5	295	9.73	
		P7-P9	160	5.30	
		P4-P6	146	4.81	
東行		P5-P6	146	4.81	
		P9-P9	130	4.33	
		P9-P1	127	4.19	

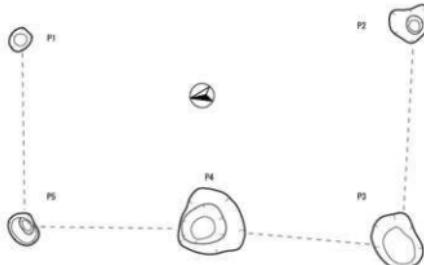
第76図 掘立柱建物跡4・3号



掘立柱建物跡2号

No.	柱穴 (cm)		
	直径	幅幅	深さ
P1	40	33	68
P2	29	20	61
P3	32	25	63
P4	39	27	68
P5	28	22	56
P6	36	18	30
P7	30	20	38
P8	32	26	37
P9	35	20	21
P10	27	20	31

主軸	方向	柱穴	柱間距離	
			cm	尺
N7° W	P1-P2		215	7.09
	P2-P3		210	6.93
	P3-P4		201	6.43
	P6-P7		193	6.36
	P7-P8		208	6.86
N9° W	P6-P9		196	6.53
	P4-P5		168	5.34
	P5-P6		190	6.27
	P9-P10		164	5.41
	P10-P3		225	7.42

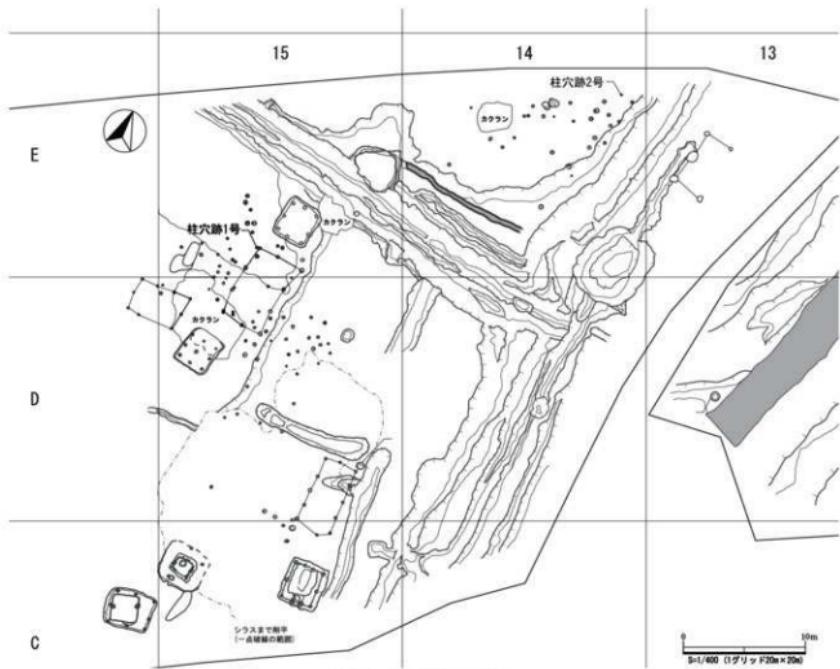


No.	柱穴 (cm)		
	直径	幅幅	深さ
P1	30	20	-
P2	32	40	-
P3	72	43	-
P4	90	69	-
P5	43	28	-

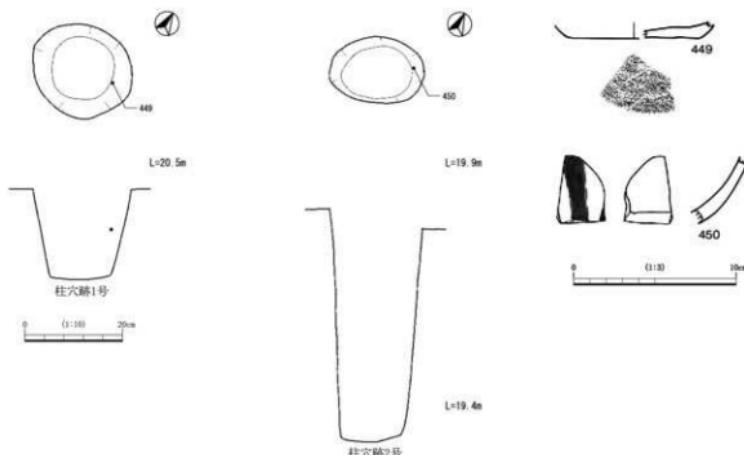
主軸	方向	柱穴	柱間距離	
			cm	尺
N9° W	P1-P2		486	16.00
	P3-P4		237	7.82
N9° E	P4-P5		223	7.35
	P2-P3		273	9.00
	P6-P1		230	7.59

掘立柱建物跡5号

第77図 掘立柱建物跡2・5号及び出土遺物



第78図 中世の柱穴跡位置図



第79図 柱穴跡 1・2号及び出土遺物

柱穴跡は、74基検出された。埋土が黒褐色のものと灰褐色のものの2種類みられた。柱穴内から遺物の出土したものだけを報告する。

#### 柱穴跡1号（第79図）

検出状況 E-15区で、Ⅶ層上面で検出された。掘立柱建物跡2号の北西隅の柱穴に隣接する。

形状・規模 平面形は略円形を呈する。規模は、20cm×20cmであり、検出面からの深さは18cmである。断面形は、床面はレンズ状を呈し、壁面はやや外傾する。

出土遺物 底面から10cm上方で土師器が出土した。449は土師器の坏か皿の底部である。糸切底を有する。

#### 柱穴跡2号（第79図）

検出状況 E-14区で、Ⅶ層上面で検出された。やや柱穴が集中する場所であるが、建物跡の復元はできなかつた。

形状・規模 平面形は略椭円形を呈する。規模は、20cm×13cmであり、検出面からの深さは48cmである。断面形は床面がレンズ状を呈し、壁面はやや外傾する。

出土遺物 450は龍泉窯系青磁碗II類の胴部である。鎌蓮弁の鍋の部分が残る。

#### 土坑

土坑は6基検出された。

#### 土坑19号（第80図）

検出状況 E-14区で、Ⅶ層上面で検出された。

形状・規模 平面形は不定形を呈する。規模は、長軸82cm、短軸63cmであり、検出面からの深さは53cmである。断面形は床面が西側にわずかに凹む。壁面は外傾する。

遺物出土状況 床面付近と、検出面付近で土師器の小皿が出土した。

出土遺物 451、452は皿である。いずれも器壁が低く、内面の作り込みが甘く、円盤状を呈す。451は均整がとれて回転ナデ調整も丁寧である。452は451と比べてやや調整が粗い。

#### 土坑18号（第80図）

検出状況 D-15区で、Ⅶ層中で検出された。

形状・規模 平面形は略円形を呈する。規模は、長軸68cm、短軸57cmであり、検出面からの深さは6cmである。断面形は床面がレンズ状に凹む。網掛け部分で硬化面を検出した。

埋土 暗茶褐色土（II層）で、炭化物を多く含み黒色を呈する部分がある。0.5~2cm未満の鉄滓や微細な鉄片を多く含む。また、埋土中には礫も含まれていた。

出土遺物 453は鉄滓である。

#### 土坑20号（第80図）

検出状況 D-13区で、堀跡1号の底面付近のⅦ層上面で検出された。

形状・規模 平面形は略円形を呈する。規模は、長軸74cm、短軸73cmであり、検出面からの深さは6cmである。断面形は、床面はレンズ状に凹む。

埋土 黒色土で炭化物を含む。

#### 土坑17号（第80図）

検出状況 D-15区で、Ⅶ層上面で検出された。

形状・規模 平面形は略円形を呈する。規模は、長軸105cm、短軸102cm。検出面からの深さは43cmである。断面形は床面がほぼ水平で、壁面はやや外傾する。

埋土 埋土は暗褐色を呈する。埋土中から礫が1点出土している。

#### 土坑22号（第81図）

検出状況 D-12・13区の境界で、Ⅶ層上面で検出された。

形状・規模 平面形は南北方向に長い隅丸方形を呈する。規模は、長軸261cm、短軸171cmであり、検出面からの深さは32cmである。断面形は、床面はほぼ平坦で、壁面はやや外傾する。

埋土 茶褐色土中に赤褐色の焼土と炭化物が混在する。炭化物は径1cm~8cm程度の炭化木で、樹皮を残すものもあった。

#### 土坑21号（第81図）

検出状況 D-12区で、堀跡1号に沿った土壘状の高まりの北東側で検出された。

形状・規模 平面形は略円形を呈し、規模は、長軸196cm、短軸182cmであり、検出面からの深さは192cmである。断面形は、床面はほぼ水平で、壁面はやや外傾しながら立ち上がる。壁面はⅦ層（シラス）で、底面から水が湧き出す。井戸であった可能性がある。

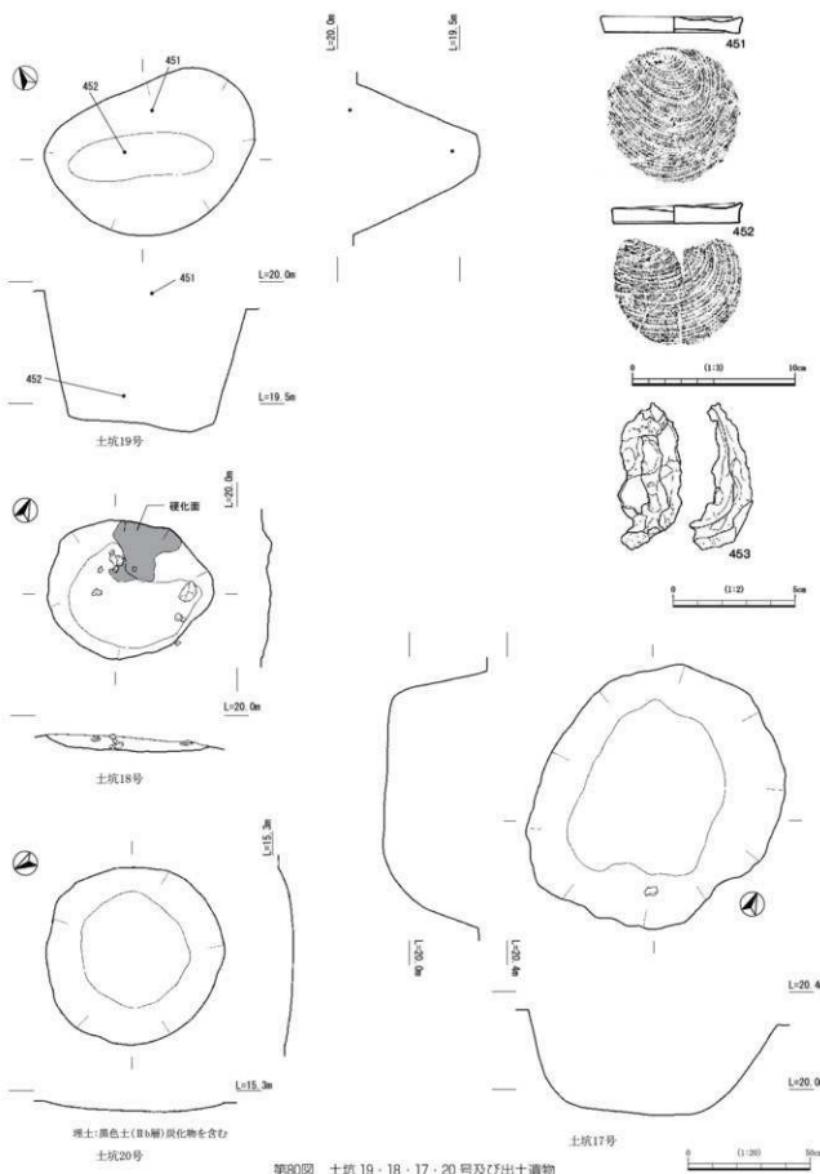
埋土 検出面から下へ150cm程度まで：茶褐色土で径5~10cm程度のシラスのブロックが入る。検出面から150cm以上：暗茶褐色粘質土、II層に類似するが、粒子が細かく、焼土・炭化物を含まない。

出土遺物 454は青磁碗の底部である。全面に施釉後、豊富の釉を剥いでいるが、一部釉が残る。455は青磁の坏である。口縁部は「く」の字状に外反し端部を上方に引き出す。

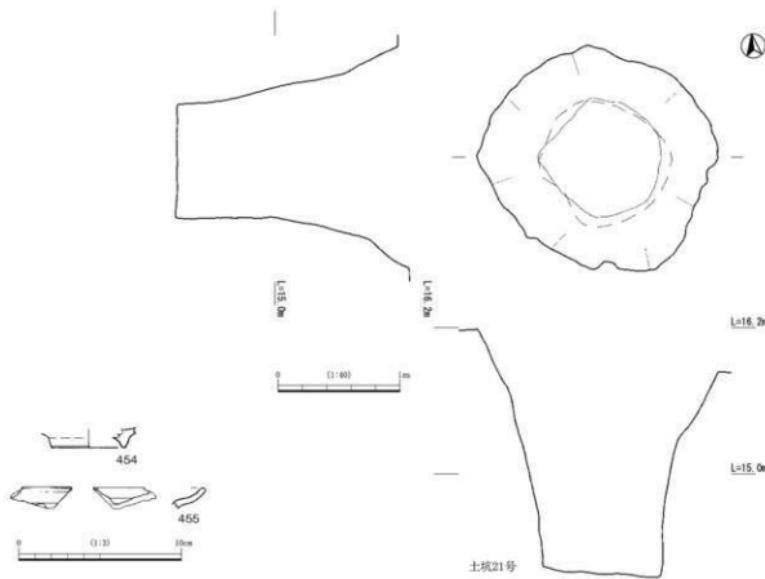
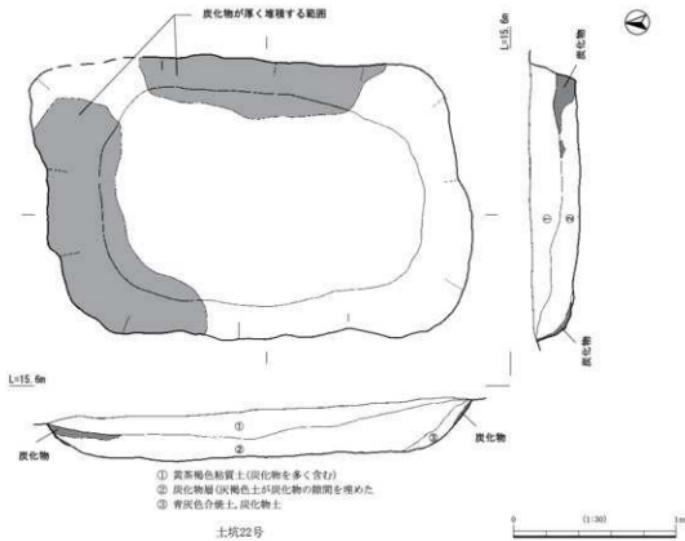
#### 大型土坑状遺構1号（第82図）

検出状況 堀跡1号内のD-12・13区の境界で、Ⅶ層上面で検出された。堀跡1号との関係は不明である。

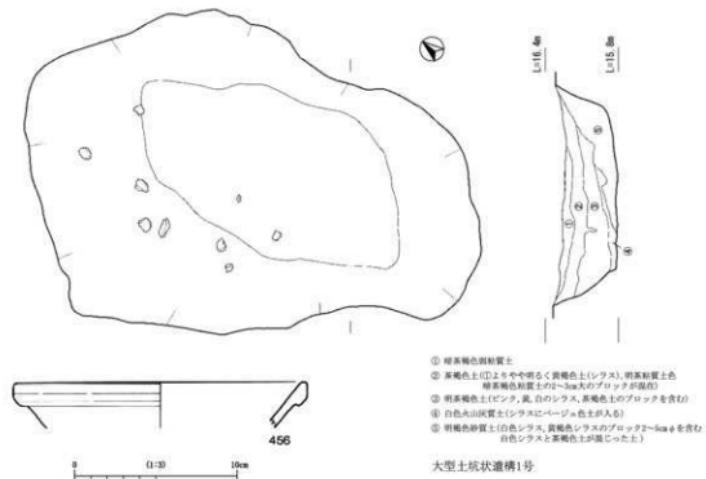
形状・規模 平面形は不定形を呈する。規模は、長軸352cm、短軸262cmであり、検出面からの深さは47cmで



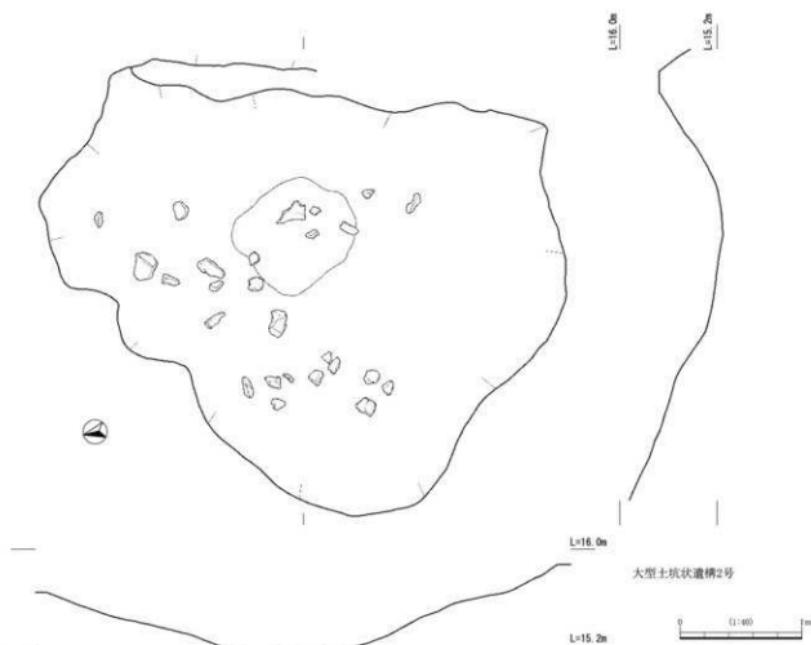
第80図 土坑 19・18・17・20 号及び出土遺物



第81図 土坑22・21号及び出土遺物

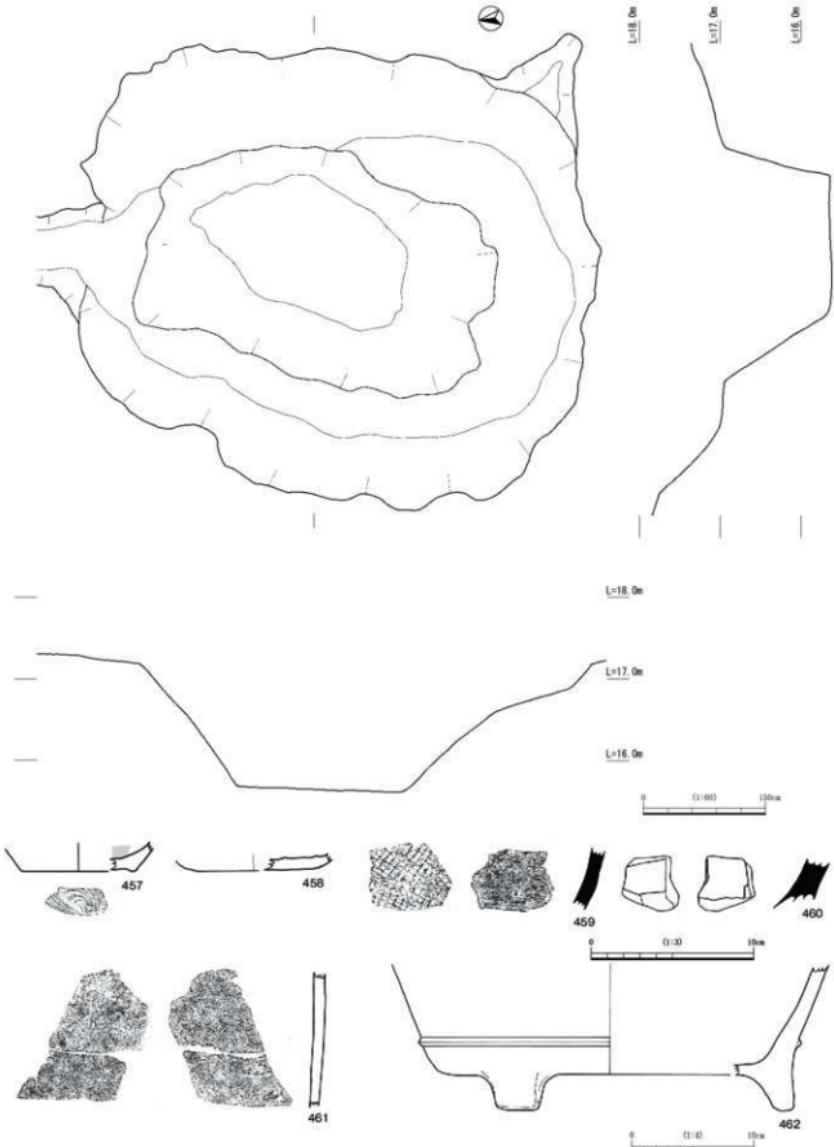


大型土坑状遺構1号.



大型土坑状遺構2号

第82図 大型土坑状遺構 1・2 号及び出土遺物



第83図 大型土坑状遺構 3号及び出土遺物

ある。断面形は、床面はほぼ平坦で、壁はやや外傾する。また、埋土中に礫が出土した。

**出土遺物** 456は白磁碗V類の口縁部である。扁平な玉縁口縁を有する。

#### 大型土坑状遺構2号（第82図）

**検出状況** 堀跡1号内のD・E-12区で、Ⅶ層上面で検出された。堀跡1号との関係は不明である。また、埋土から径10~20cm程度の礫が26個出土した。

**形状・規模** 平面形は不定形を呈する。規模は、長軸420cm、短軸330cmであり、検出面からの深さは72cmである。断面形は不整形で、床面から壁面が緩やかに外傾しながら立ち上がる。

#### 大型土坑状遺構3号（第83図）

**検出状況** D・E-14区、E-13区堀跡1号の内部のⅦ層上面で検出された。

**形状・規模** 平面形は東西方向に長い略隅丸長方形を呈する。規模は、長軸612cm、短軸546cmであり、検出面からの深さは162cmである。断面形は、床面はほぼ水平で、壁面はやや外傾し、上部でラッパ状に開く。

**埋土** 褐色のバミス混じりの黒褐色土。褐色のバミス及び白色のシラスが混在している。

**出土遺物** 457は土師器皿の底部である。内外面に煤状のものが付着している。458は土師器の坏か皿の底部である。器壁の立ち上がり部に赤線が1条残る。

459は須恵器の壺の胴部である。内面にナデ調整痕、外面に格子目叩き痕が残る。胎土は崩壊して、0.5mm以下の大粒が多くみられる。460は須恵器の壺の胴部である。胎土はほぼ均一だが、器壁が厚いためか、断面内部に黒色を呈する部分がある。

461は国産陶器の壺の胴部片と思われる。内外面はナデで調整される。462は瓦質の火鉢である。脚部は隅丸長方形を呈する平坦面を有し、体部下部に1条の突帯が残る。内外面ともハケメとナデ調整が施されているが、外面の突帯より上位は特に丁寧な調整が施される。脚部の数は不明である。

#### 堀跡1号（第84・85図）

**検出状況** C-E-12~14区で、調査区を南北方向に縱断する農道に沿って検出された。農道に沿って調査区外の南北方向に続くものと想定される。

**形状・規模** 調査区内での規模は、南北方向に長さ約35m、東西方向の幅約50mに渡り、上述のように南北方向は調査区外へ続く。

断面形は、E-12・13区からD-13区に南北方向に底面があり（第84図のアミ掛けの範囲）、底面の立ち上がりは大きく外傾し、底面には小規模な段差がみられる。

床面までの深さは約2~2.5m程度である。

**埋土** 埋土はレンズ状堆積を呈し、床面付近にはⅡ層が堆積する。Ⅱ層の上層には、Ⅱ層とシラスの混土等が堆積し、最終的に1mほど表土で覆われる。

**出土遺物** 床面付近のⅡ層出土遺物を報告する。463、464は土師器の壺の底部である。いずれも系切り底を有する。

465は龍泉窯系青磁碗II類である。片切彫りで幅広の鍋運弁が施される。釉内に径1mm以下の気泡が多くみられる。466は青磁碗の底部である。断面四角の高台を有し、疊付きは外側に向けて斜め上にヘラ切りを行う。見込みには圓線が巡る。片切彫りの鍋運弁が施される。高台内周縁部まで施釉されている。467は青磁碗の底部である。断面台形の高台を有し、高台内は中心部に向けて盛り上がる。見込みに目跡が残り、釉が白濁化した部分がある。残存部の外面は無釉である。平面が略円形を呈しており、高台も含めて意図的に打ち欠いた可能性がある。

468は中国産の天目碗の口縁部であるが、小片であるため、詳細は不明である。胎土は白色を基本として微細な黒粒が多く含む。内外面に黒色を呈する鉄輪がかかり、内面は口唇部から2mm程の所から下へ3mmほど、外側は口唇部から2mm程の所から下へ8mmほど色調が褐色を呈している。

469は瓦質の火鉢である。口唇部外面の張り出しと胸部に巡らした2条の突帯で区画を作り出す。最上部の区画に断面V字状の長方形の印文を巡らし、2番目の区画に四菱文を巡らす。

470は平瓦である。凸面はナデ調整が施される。凹面は布目が残るが周縁部にナデ調整が施される。

#### 堀跡2号（第86~88図）

**検出状況** D・E-14・15区で、表土直下のⅦ層上面で検出された。長軸は東西方向であり、堀跡1号に直交する。検出状況から、堀跡1号、堅穴建物跡1号及び堅穴状遺構を切っており、時期差のあったことが確認された。

**形状・規模** 検出された範囲で、東西方向に長さ約30m、南北方向に幅約5m、長さ約30mであり、東端は堀跡1号にぶつかり、西側は調査区外へ延びる。検出面からの深さは約80cmである。断面形は、最下部で狭い平坦面を有する。壁面は外傾するが、南側の傾斜が北側と比較して緩やかである。

**埋土** 埋土は、Ⅱ層を基調としたレンズ状堆積を基本とする。一部にシラス等が混入する。

**出土遺物** 底面付近から出土した遺物を報告する。471~473は土師器壺である。色調は全て褐色を呈する。471は底部内面を回転成形した痕跡が残るが、中央はナ